

北谷町文化財調査報告書第16集

上 勢 頭 古 墓 群

—嘉手納(7)貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告—

1996年 3 月

北谷町教育委員会

上勢頭古墓群

—嘉手納(7)貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告—

1996年3月

北谷町教育委員会

正 誤 表

北谷町文化財調査報告書第16集 「上勢頭古墓群」

頁	行	誤	正
15	6	(第29図 <u>9</u>)	(第29図 <u>2</u>)
	7	(第29図 <u>9</u>)	(第29図 <u>10</u>)
22	10	(第 <u>23</u> 図23、26)	(第 <u>18</u> 図23、26)
31	図右下	<u>2</u> m	<u>4</u> m
32	2	被服	被覆
34	21	(第 <u>28</u> 図～第26図)	(第 <u>18</u> 図～26図)
	25	<u>頸</u> 部	<u>頸</u> 部
	26	<u>低</u> 部	<u>底</u> 部
35	6	(第28図 <u>24</u>)	(第28図 <u>23</u>)
	13	(第 <u>5</u> 表)	(第 <u>6</u> 表)
	20	(第 <u>6</u> 表)	(第 <u>7</u> 表)
	26	(第 <u>6</u> 表)	(第 <u>7</u> 表)
55	4～7	仲村 <u>梁</u>	仲村 <u>渠</u>
69	写真下	(<u>1</u> 段左)伐採 <u>後</u> 近景	(<u>1</u> 段左)伐採 <u>前</u> 近景



東・西地域完掘状況

は じ め に

本報告書は、嘉手納基地に所在する「上勢頭古墓群」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

近年、墓も埋蔵文化財として認識され、県内各地で発掘調査が行なわれるようになり、南島における葬墓制や、石造技術等を知る重要な文化財として認識されるようになりました。

今回調査を行った上勢頭古墓群は、18世紀に上勢頭に入植し生活の場を築きあげた、屋取士族層の墓群であることが確認されております。

新たに発見された、無名の被葬者の遺骨は、南島の葬墓制を考えるうえでも貴重な資料であると聞きおよんでおります。

町内には、まだ多くの古墓を含め、多くの埋蔵文化財が残されております。今後、さらに調査研究を行うことで、私達の祖先が築きあげ伝えてきた歴史や文化を解明することができることと確信しております。

他方、貴重な文化遺産を記録、保存するだけでなく現況を後世残すことも私たちの使命であります。

本書が多くの方々に活用され、さらなる文化財保護思想の高揚はもとより、諸開発事業の協議・調整、学術研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査及び資料整理にあたり御指導、御協力をいただいた諸先生方及び関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成8年3月

北 谷 町 教 育 委 員 会
教 育 長 當 山 憲 一

例 言

1、本報告書は平成6・7年度事業として「嘉手納(7)貯油施設建設に係る文化財発掘調査」として、那覇防衛施設局と受託契約をおこない『上勢頭古墓群』の緊急調査報告書として、その成果をまとめたものである。その中に、旧下勢頭上原地区の亀甲墓についての発掘調査及び解体作業も含めて報告する。

2、本報告書に掲載した地形図は国土地理院の承認をえて、北谷町役場が複製した2万5千分の1の地形図と、5000分の1の地形図は、沖縄県の承認をえた北谷町役都市計画課作成、1954年米軍作成の地形図を借用した。

3、遺物の同定は下記の先生方による、記して謝意を表します。

陶磁器	手塚直樹（鎌倉考古学研究所所長）
人 骨	松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）
脊椎動物遺骸	川島由次（琉球大学農学部教授）

4、付記として土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏、琉球大学教授の川島由次氏、町文化財保護審議員の玉木順彦氏から玉稿を戴いた。記して謝意を申し上げます。

5、本書の執筆編集は山城がおこない、分担は下記のようにおこなった。

遺物実測	上間真寿美	儀間ますみ	長嶺初子	仲村まゆみ	前川恵子
遺物一覧	上間真寿美	前川恵子	仲村まゆみ	仲村渠安子	
トレース	長嶺初子	豊里初江			

6、発掘調査で得られた出土遺物及び資料は北谷町教育委員会に保管されている。

目 次

序 例 言	
第 I 章 遺跡の位置と環境	1
第 II 章 調査に至る経緯	4
a 調査に至る経緯	4
b 調査の体制	4
第 III 章 調査の概要	7
第 1 節 調査の経過	7
第 2 節 各墓の概要	8
1. 北地域1号	8
2. 東(地域)	9
D地区1号	9
D地区2号	10
D地区3号	14
3. 西地域	14
1号	14
2号	15
3号	16
4号	16
5号	22
6号	26
4. 亀甲墓	29
第 IV 章 出土遺物	34
第 1 節 出土遺物	34
1. 磁器	34
a. 青磁	34
b. 染付	34
c. 現代磁器	34
2. 陶器	34
a. 施釉陶器	34
b. 無釉陶器	34
c. 陶質土器	34
3. 金属製品(釘、キセル、ジューパー)	35
4. 銭貨	35
5. 骨製品	35
6. プラスチック製品	35
7. ガラス製品	35
8. 人骨	36
9. 脊椎動物遺骸	36
第 V 章 まとめ	54

表 目 次

第1表 外国産磁器観察一覧 …… 36	第5表 金属製品一覧 …… 49
第2表 近代磁器観察一覧 …… 37	第6表 貨錢観察一覧 …… 51
第3表 陶器観察一覧 …… 39	第7表 現代製品観察一覧 …… 52
第4表 納骨器一覧 …… 45	

挿 図 目 次

第1図 上勢頭古墓群の位置 …… 2
第2図 上勢頭古墓群の墓分布図 …… 6
第3図 米軍地図（1954年）による地形と上勢頭位置図 …… 6
第4図 北-1号墓実測図 …… 9
第5図 東地域D地区1・2号墓実測図 …… 11
第6図 東地域D地区3号墓実測図 …… 13
第7図 西地域1号墓実測図 …… 17
第8図 西地域2号墓実測図 …… 19
第9図 西地域3号墓実測図 …… 21
第10図 西地域4号墓実測図 …… 23
第11図 西地域5号墓実測図 …… 25
第12図 西地域6号墓出土人骨実測図 …… 26
第13図 西地域6号墓実測図 …… 27
第14図 字下勢頭上原地区の亀甲墓位置図 …… 30
第15図 米軍地図（1954年）による地形と下勢頭位置図 …… 30
第16図 字下勢頭上原地区亀甲墓実測図 …… 31
第17図 墓室内奥壁墨書 …… 32
第18図 青磁・染付・陶器 …… 56
第19図 陶器 …… 57
第20図 陶器 …… 58
第21図 納骨器 …… 59
第22図 納骨器 …… 60
第23図 納骨器 …… 61
第24図 納骨器 …… 62
第25図 納骨器(蓋) …… 63
第26図 納骨器(蓋) …… 64
第27図 近代・現代磁器 …… 65
第28図 金属製品 …… 66
第29図 現代製品 …… 67

図 版 目 次

図版 1	北地域 1 号墓 …………… 69		
	(一段左) 伐採前遠景	(一段右) 伐採後遠景	
	(二段左) 伐採後近景	(二段右) 伐採後近景	
	(三段左) 発掘後	(三段右) 墓面	
	(四段左) 墓右側袖垣	(四段右) 墓庭平面	
図版 2	東地域 D 地区 …………… 70		
	(一段左) 伐採前 (東北東より)	(一段右) 伐採後 (北東より)	
	(二段左) 1・2・3 号墓伐採後遠景 (北西より)	(二段右) 1・2 号墓伐採後近景 (北西より)	
	(三段左) 1・2 号墓露出状況	(三段右) 1・2 号墓近景	
	(四段左) 3 号墓露出状況	(四段右) 3 号墓近景	
図版 3	東地域 D 地区 1 号墓 …………… 71		
	(一段左) 1 号墓近景	(一段右) 1 号墓庭右側発掘状況	
	(二段左) 1 号墓正面	(二段右) 1 号墓墓口	
	(三段左) 墓庭発掘状況	(三段右) 1 号墓右袖畦土層断面	
	(四段左) 灰袖碗出土状況	(四段右) 1 号墓右側袖垣検出遺物	
図版 4	東地域 D 地区 2 号墓 …………… 72		
	(一段左) 2 号墓正面	(一段右) 2 号墓左側検出土状況	
	(二段左) 2 号墓袖垣下盃出土状況	(二段右) 2 号墓墓庭キセル、簪出土状況	
	(三段) 1・2 号墓検出状況		
図版 5	東地域 D 地区 3 号墓 …………… 73		
	(一段左) 3 号墓近景 (北より)	(一段右) 3 号墓遠景	
	(二段左) 3 号墓墓口	(二段右) 3 号墓左前庭部遺物出土状況	
	(三段) 完屈状況		
図版 6	東地域 D 地区 1・2 号墓 …………… 74		
	(上) 1 号墓墓庭半截状況	(下) 2 号墓墓庭完掘状況	
図版 7	西地域 …………… 75		
	(一段左) 遠景 (西より)	(一段右) 遠景 (南東より)	
	(二段左) 遠景 (南より)	(二段右) 4 号墓付近遠景 (南西より)	
	(三段左) 1・2 号墓荒掘後	(三段右) 3 号墓伐採後	
	(四段左) 4 号墓荒掘後	(四段右) 5 号墓荒掘後	
図版 8	西地域 1 号墓 …………… 76		
	(一段左) 伐採前近景	(一段右) 荒掘後遠景	
	(二段左) 検出状況	(二段右) 墓正面	
	(三段左) 墓室	(三段右) 墓室内厨子甕出土状況	
	(四段左) 発掘状況 (南西より)	(四段右) 発掘状況 (南より)	

図版 9	西地域 2 号墓 …………… 77		
	(一段左) 荒掘後	(一段右) 墓口正面	
	(二段左) 袖墓墓室	(二段右) 袖墓	
	(三段) 墓正面 (南西より)		
図版10	西地域 3 号墓 …………… 78		
	(一段左) 伐採状況	(一段右) 伐採後	
	(二段左) 正面近景	(二段右) 墓面	
	(三段左) 墓室内検出状況	(三段右) 墓面 (南より)	
	(四段左) 墓面 (右) 内側	(四段右) 墓面 (左) 内側	
図版11	西地域 4 号墓 …………… 79		
	(一段左) 伐採前遠景	(一段右) 荒掘後	
	(二段左) 近景 (東より)	(二段右) 遠景 (南より)	
	(三段) 墓正面 (南西より)		
図版12	西地域 5 号墓 …………… 80		
	(一段左) 伐採前	(一段右) 荒掘後 (南東より)	
	(二段左) 荒掘後 (南西より)	(二段右) 遠景 (南東より)	
	(三段左) 荒掘後 (南東より)	(三段右) 石列部分	
	(四段左) 完掘後 (正面)		
図版13	西地域 6 号墓 …………… 81		
	(一段左) 6 号墓遠景 (南東より)	(一段右) 6 号墓遠景 (南西より)	
	(二段左) 6 号墓正面	(二段右) 6 号墓墓口 (東より)	
	(三段左) 6 号墓口検出状況 (西より)	(三段右) 6 号墓墓室内被葬者露出状況	
	(四段左) 墓室内被葬者検出状況	(四段右) 古銭、鉄釘検出状況	
図版14	亀甲墓 …………… 82		
	(一段左) 発掘前	(一段右) 発掘状況	
	(二段左) 墓室奥壁	(二段右) 奥壁改築終了月日墨書	
	(三段左) 発掘後近景	(三段右) 発掘後遠景	
	(四段左) 墓庭・外門	(四段右) 中門・外門	
図版15	亀甲墓 …………… 83		
	(上) 近景	(下) 墓庭・外門	
図版16	亀甲墓 …………… 84		
	(一段左) 漆喰除去後	(一段右) 石積解体作業状況	
	(二段左) 袖垣石材番号付け	(二段右) 袖垣石材除去裏込	
	(三段左) サンミディ一部石材検出	(三段右) 袖石材解体	
	(四段左) 屋根部断面	(四段右) 眉部解体	
図版17	亀甲墓 …………… 85		
	(一段左) 墓室検出状況	(一段右) 墓面石材除去後	
	(二段左) 墓室天井解体	(二段右) 墓室 (墓口を残す)	
	(三段左) 墓室 (棚を残す)	(三段右) 墓室石材除去後	
	(四段左) 墓室 (岩盤検出状況)	(四段右) ウライジョー部横断面	

図版18	染付・青磁・陶器	86	中右	納骨器(側面)
			下左	納骨器(平面)
図版19	染付・青磁・陶器(内面)	87		
図版20	上陶器	88	図版29	上左 無釉陶器納骨器(蓋)
	下陶器			中左 無釉陶器納骨器(蓋・内面)
図版21	上左 陶器 花瓶	89		上右 無釉陶器納骨器(蓋)
	上右 陶器 花瓶			中右 無釉陶器納骨器(蓋・内面)
	中左 陶器 花瓶			下左 無釉陶器納骨器(蓋)
	中右 陶器 壺			下右 無釉陶器納骨器(蓋・内面)
	下 陶器 甕		図版30	上 無釉陶器納骨器(蓋)
				下 無釉陶器納骨器(蓋・内面)
図版22	上陶器	90	図版31	一段左 近代磁器(盃・表面)
	下陶器(内面)			二段左 近代磁器(盃・内面)
図版23	上左 無釉陶器納骨器	91		三段左 近代磁器(盃・裏面)
	上右 無釉陶器納骨器			一段右 近代磁器(盃・表面)
	下左 無釉陶器納骨器			二段右 近代磁器(盃・内面)
	下右 無釉陶器納骨器(内面)			三段右 近代磁器(盃・裏面)
図版24	上下 無釉陶器納骨器	92		四段左 近代磁器(茶碗・表面)
	上右 無釉陶器納骨器			五段左 近代磁器(茶碗・裏面)
	下左 無釉陶器納骨器			四段右 近代磁器(急須の蓋・皿)
	下右 無釉陶器納骨器			五段右 近代磁器(どんぶり)
図版25	上左 無釉陶器納骨器	93	図版32	上 近代磁器
	上右 無釉陶器納骨器			下 近代磁器(内面)
	中左 無釉陶器納骨器		図版33	上 鉄製品
	中右 施釉陶器納骨器			中 古銭(表面)
	下左 施釉陶器納骨器(正面)			下 古銭(裏面)
	下右 施釉陶器納骨器(側面)		図版34	上 近現代製品(プラスチック・骨製品)
図版26	無釉陶器納骨器	94		下 近現代製品(ガラス製品)
図版27	無釉陶器納骨器(内面)	95	図版35	上下 脊椎動物遺骸(豚・牛)
図版28	上左 納骨器(蓋)	96		
	中左 納骨器(正面)			

1995年度（平成7年度）

調 査 主 体	北谷町教育委員会		
調 査 責 任 者	教 育 長	當 山 憲 一	
調 査 事 務 局	文 化 課 課 長	松 田 盛	
調 査 総 括	文 化 課 係 長	中 村 愿	
調 査 担 当 者	文化財調査嘱託員	山 城 安 生	
	文化 課 嘱託員	徳 吉 美 奈 子	
	文化 課 臨時職員	赤 嶺 健	上 間 真 寿 美
		国 仲 美 穂	花 城 可 時
		仲 村 ま ゆ み	名 幸 さ つ き
		仲 村 渠 安 子	前 川 恵 子
		豊 里 初 枝	

第 I 章 遺跡の位置と環境

北谷町は沖縄本島の中部に位置し、那覇から北に直線距離で約16kmの東シナ海に面した西海岸側にある。

町域は南北に約6km、東西に約4.3kmの総面積は13.62km²とやや長方形を呈し、北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南側は宜野湾市に接している。

地勢は、標高20m未満が43.98%、20～39mが20.63%、40～59mが11.53%、60～79mが14.90%、80～99mが4.99%、100～120mが3.96%である。

北側は標高約10～20mの微高地がつづき、東側は標高約100mの海成段丘の縁にあたり、西側へしだいに低くなりいわゆる東高西低の地勢を形成している。

土質は、珊瑚石灰土質、国頭礫層、泥灰岩土層、海性沖積土層から成り立っている。地域別に見ると、町域の北側の上勢頭・下勢頭は、国頭礫層と隆起石灰岩が露頭し、謝莉一帯は国頭礫層、玉上一帯は泥灰岩土層である。台地部や傾斜面では島尻マージが分布し、西海岸線の低地部の北谷、字北前一帯は海性沖積土層が分布している。

北谷は、「おもろそうし」で『きたたん』とするされ、九つの『むら』（安仁屋、北谷、桑江、平安山、砂辺、野国、屋良、嘉手納、山内）で成り立っていた間切であったが、1671年（寛文11年、尚真王3年）に宜野湾間切創設の時に安仁屋を宜野湾間切に、山内を越来間切に編入し、残り7つの『むら』を分割し、新設した5つの『むら』（玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里）を併せて12の『むら』にしたといわれている。

明治41年（1908年）に特別町村制が布かれ『むら』は『字』に、間切は『村』と改められた。

第二次大戦以前までの北谷は、“北谷ターブック”と呼ばれた県内でも屈指の水田地帯の広がる農村として栄えていたが、昭和20年4月1日、沖縄戦の上陸地点となり、終戦後もしばらくは居住が許されなかった。戦後米軍の接収で90%が基地として利用され町民の生活の場は失われた。昭和21年4月に村の行政が再開され徐々に村民が戻り始めたが、基地の拡大によって住民の往来が分断され、昭和23年に嘉手納村との分村を余儀なくされた。復帰後、多少の返還された地域もあるが、いまだに町域の約57%が基地として残っている。昭和55年4月1日に町制が施行された。

旧上勢頭の集落は、戦前まで、村のほぼ中央に位置していたが、昭和23年の嘉手納町との分村によって、現在は、町域の北側に位置している。

嘉手納基地の中に接収されている旧上勢頭は、町域の中でも最も広い範囲をもって



第1図 北谷町と上勢頭古墓群位置図

いた集落で、18世紀頃の琉球王府時代に首里・那覇から都落ちした士族たちが、主に農業を生業として形成した屋取集落である。

石灰岩台地上に住居が散在し、勢頭七組（喜友名・勝連・稲嶺・田仲・与那覇・瑞慶覧・勢理客）と呼ばれる地域に区分けされていたようである。

域内は、字平安山と字伊礼の行政字に属していたが、大正十年に御殿地を含め行政字・上勢として分離独立したが、戦後の米軍による土地接收のために住民は村内に居住できず、墓も移転を余儀なくされた。

上勢頭古墓群は、北谷町字上勢頭伊礼伊森原862番地ほかに所在する。町の北側、駐留米軍嘉手納基地の南側にあり、旧上勢頭、下勢頭の集落域南側に位置するこの一帯は、町の北東側の台地部から、南西方向に標高約45メートル前後の尾根が舌状に伸び、樹枝状を呈する起伏に富んだ地形である。

石灰砂岩部層と石英砂岩部層が分布する地域で、墓は丘陵斜面や舌状台地の先端に露出する石灰岩岩陰の前面と岩陰を掘り込んで形成されている。

調査区域内には、北地域に1基、東地域に3基、西地域に6基の合計10基が所在している。これらの墓は、西地域5号墓と西地域6号墓以外は、移転したあとの空き墓の状態であった。

この一帯は、第二次大戦後に米軍基地の貯油施設が建設されたために、一部地形を大きく変え、人の出入りがほとんど無い地域であったが、近年、更に施設建築によって本来の姿を失っている。

周辺には、いまだに多くの墓が残されている。なお、調査中に行なった試掘調査で、墓の所在する谷間にグスク時代と考えられる遺跡が確認された。

《参考文献》

北谷町役場ニライの都市ちたん〔1991年度版〕

北谷村役所『北谷村誌』

北谷町史編集委員会『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』

沖縄県中頭群北谷町『第11回北谷町統計書 平成6年版』

沖縄県北谷町『北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－』北谷町文化財調査報告書

第Ⅱ章 調査に至る経緯

a. 調査に至る経緯

上勢頭古墓群は、那覇防衛施設局が嘉手納飛行場提供施設整備工事として、既存の貯油施設の解体・新設工事を行う予定地において、新たに行った分布調査で確認された墓群である。

計画予定地域の北西側には、1983年に行われた古墓群の調査の際に136基の墓が確認されており、今回の建設計画予定地周辺には、現地保存されている墓が4基あった。

そのため、他の文化財の分布調査を樹木の伐採作業後にを行ったところ、建設工事予定地範囲内と工事に関わる施設整備地域において8基の古墓と墓の可能性のある岩盤が確認された。

那覇防衛施設局と北谷町教育委員会との間で、その取り扱いについて協議調整が行われた結果、建設予定地に現地保存されている墓を避ける形で計画が変更され、当教育委員会より調査員を派遣して、本古墓群の記録保存のための緊急発掘調査を実施した。調査は平成6年7月18日から12月16日の期間で実施された。

b. 調査体制

今回の発掘調査は次の体制により実施された。

1994年度（平成6年度）

調査主体	北谷町教育委員会				
調査責任者	教 育 長	當 山 憲 一			
調査事務局	社会教育課課長	照 屋 勝 雄			
調査総括	社会教育課主査	中 村 愿			
調査担当者	文化財調査嘱託員	山 城 安 生			
	文化財調査嘱託員	上 地 克 哉	(現南風原町学芸員)		
	民俗調査嘱託員	田 場 克 也			
	社会教育課嘱託員	徳 吉 美奈子	長 嶺 初 子		
	” 臨時職員	上 間 真寿美	仲 村 まゆみ		
		前 川 恵 子			

5. 発掘調査作業員

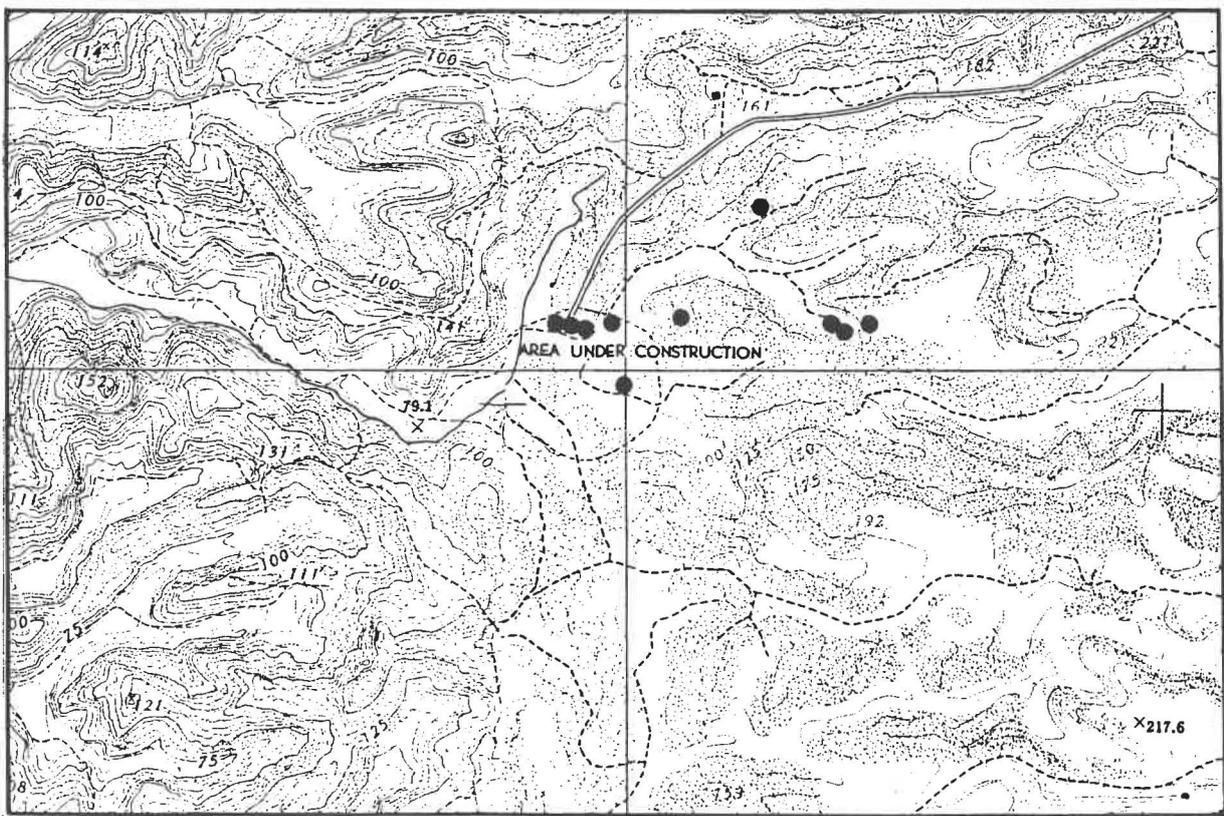
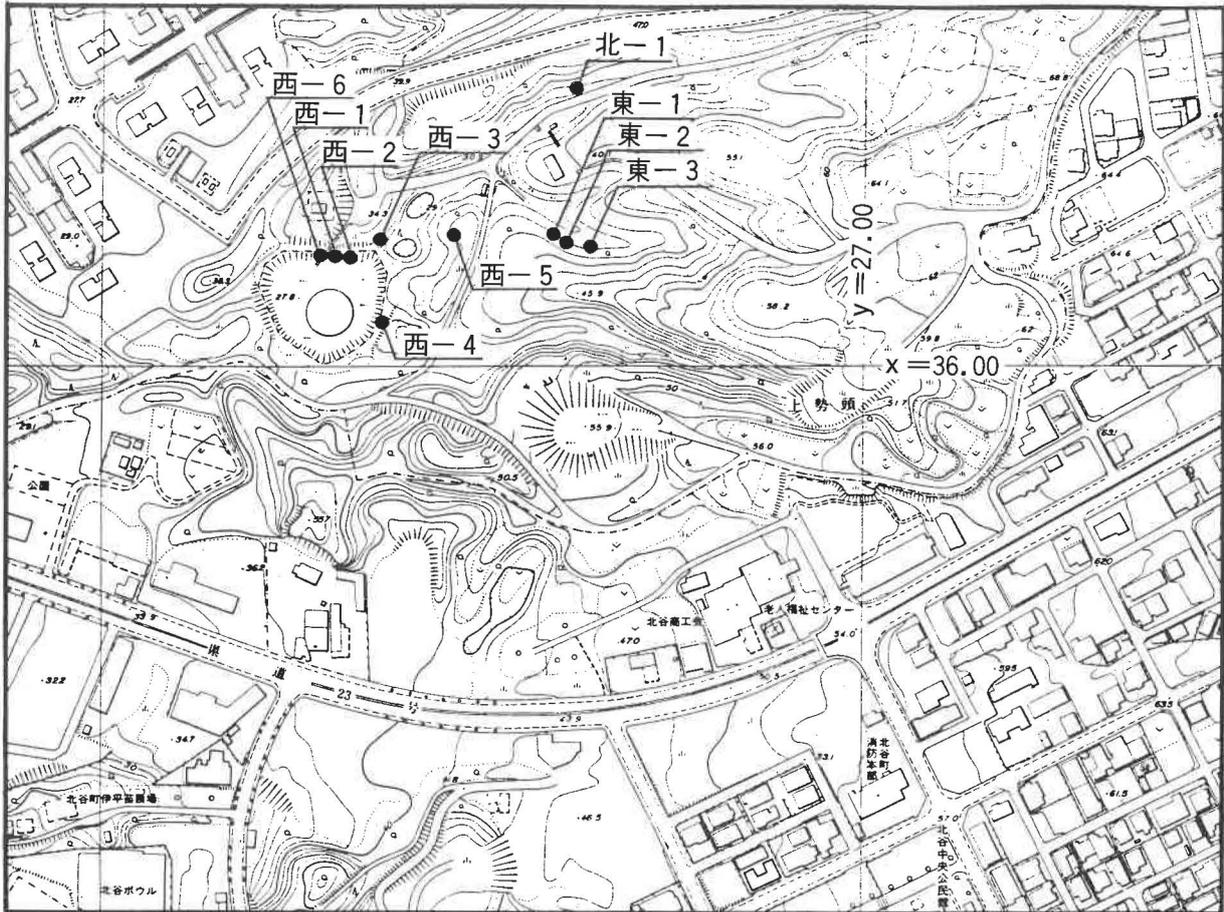
稲田 節子・上原 亀造・上原 常貞・金城 良夫
郡山 隆彦・砂川 栄・知念 清・渡口 英孝
渡久地政英・名嘉 實・仲宗根順次・普久原文子
松本ツル子・宮城 隆明・宮里 盛安・屋宜 光江
湧田 春子

6. 調査及び報告書にあたっては下記の方々の指導・助言をいただいた。記して謝意を表する。

読谷村歴史民俗博物館館長	名嘉間 宜 勝
沖縄国際大学 学長	平 敷 令 治
那覇市教育委員会文化課主幹	金 武 正 紀
” 主事	島 弘
” 主事	内 間 靖
” 主事	玉 城 安 明
” 主事	仲宗根 啓
” 副調査指導員	山 城 直 子
中城村教育委員会主事	渡久地 真
北谷町公文書館	玉 木 順 彦

7. 調査協力

上勢頭郷友会
稲 嶺 盛 昌 (上勢頭区区長)
崎 原 盛 吉 (崎原石材社長)
高江洲 敦 子



第2図 上勢頭古墓群位置図
 第3図 米軍地形図(1954年)

第三章 調査の概要

第1節 調査の経過

調査は、平成6年度事業として、1994年7月18日から12月16日の期間で実施した。

先ず、調査事務所の前を通る米軍基地の管理用道路を基準にして東西南北の各地域に分け、更に東地域の谷間をA・B・C・D地区に分けたのち、樹木の繁茂する各地域の伐採作業を行った。

調査区内の古墓は、丘陵緩斜面や舌状台地岩陰に形成されており、露出作業と墓の存在する可能性がある石灰岩露頭部についての確認作業をおこなった。

北地域では、新たに1基の墓を確認し、東地域D地区では、3基の墓が確認された。西地域では5基の墓が確認された。墓は、樹木に覆われたものや戦後の造成工事によって墓口部分のみが露出するものや埋没したものがあり、バックホーによる覆土の除去作業を平行しながら、本格的な墓の調査を東地域D地区から開始した。

東地域D地区では、周辺地形の変化や排水施設に起因する大量の雨水によって丘陵斜面が侵食され、流出した土砂が旧表土から約50センチから1メートル堆積していた。

西地域では、新たに貯油施設管理用道路下から1基の墓が確認され、その墓から1体の人骨が寛永通寶と鉄製丸釘を伴って検出された。

ほとんどの墓は、戦後の接収による移転のために、既に空き墓となっていたが、移転の際に打ち壊されて遺棄された納骨器（厨子甕）が採集され碗や盃、瓶類などの陶磁器が出土した。

東地域D地区の谷間には、大量の雨水が流れ込み、層序観察用の畦が実測前に壊滅し、濁流に流されて来た石灰岩や土砂、廃棄物などが調査区内に堆積し、その除去に、時間を費やすことになった。

墓に伴う遺構検出の完了後、写真撮影を行い墓の実測作業を行なって終了した。

なお、旧下勢頭の上原地区の北側に、防衛庁の新たな施設建設予定地があり当地には、昭和十四年改築の墨書が記されている亀甲墓が所在しており、その調査も合わせて行った。

第2節 各墓の概要

今回、調査を行った古墓は北地域1基、東地域3基、西地域6基の横穴式掘り込み墓と下勢頭上原地区の亀甲墓1基の合わせて11基であった。

墓は、丘陵斜面に露頭する石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んだものや岩陰を利用して掘削し横穴を掘り込んだものである。この形態は、沖縄の方言で“フィンチャー”と呼ばれる墓に含まれる。

調査区の北地域は、基地施設管理用道路が通っている緩斜面地で、道路沿いには現地保存されている古墓が間隔を置いて分布している。

東地域の丘陵上には貯油施設が建設されており、2つの谷が合流する地域で、南西方向にのびる丘陵の北向斜面と北西向き斜面に墓がある。

西地域は、3つの谷が合流する場所で、貯油施設が建築されていた場所である。貯油タンクは既に解体されており、それを囲んでいた土手が丘陵をつなぐように、巡らされている。

1. 北地域1号墓（第4図）

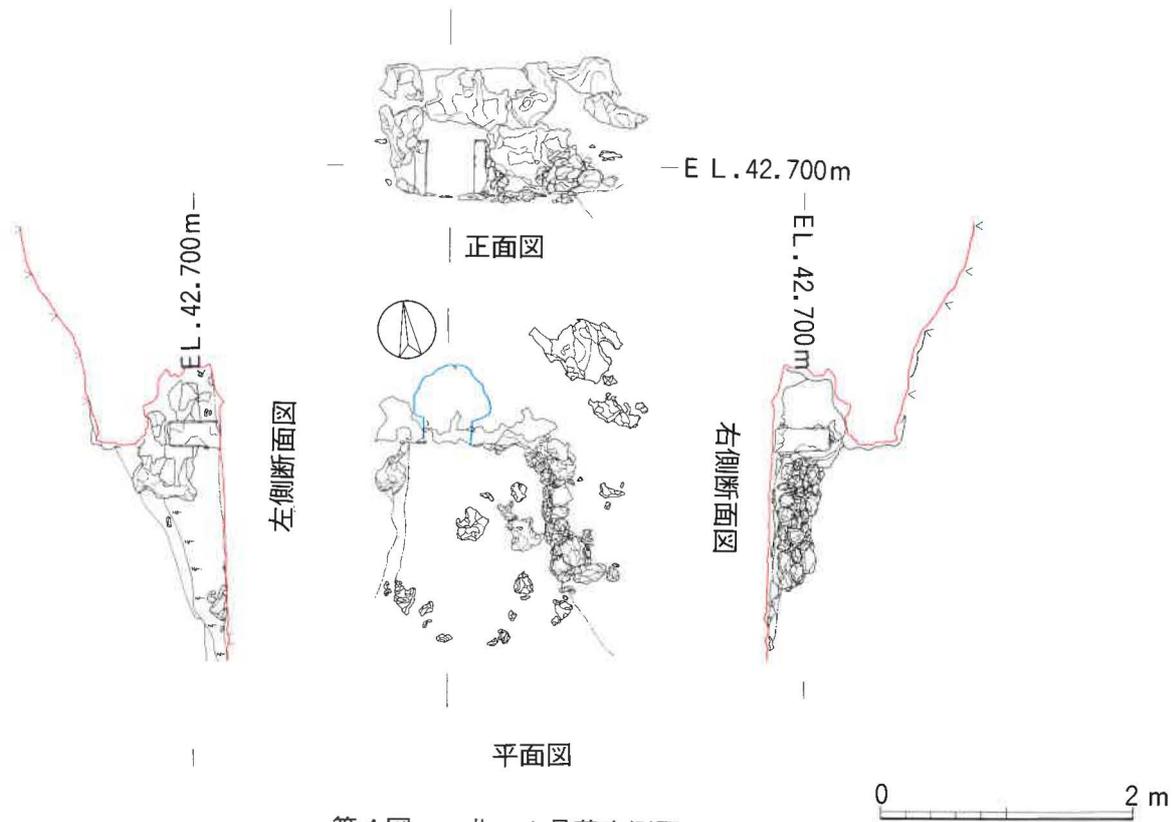
北谷町上勢区伊礼伊森原889番地にある。南西方向に伸びる丘陵斜面の中腹に露頭している小さな岩盤を利用した、小型の横穴式掘り込み墓である。

南向き斜面の中腹に露頭している石灰岩の前面を略方形に掘削して墓庭をつくる。墓庭は縦約3.5m、横幅約1.5mの約5.25㎡である。墓庭を区切る袖垣は、右側のみで、約20cm前後の石灰岩礫を野面積にし、先端部分にやや大きめの石灰岩を使用する。墓庭と斜面の境界部分には大きな石灰岩がある。

墓口の幅約0.54m、高さは約0.84mである。墓口の両脇には、高さ約60cm、厚さ約15cm、奥行き幅約30cmの加工された石灰岩の隅石（方言名：シミシ）をたてる。隅石と岩盤の隙間は土や石灰岩小礫で塞がれている。

墓室は奥行き約0.7m、横幅約0.8mで面積は約0.56㎡である。高さは墓口付近で最大約0.8m、奥壁部分で高さ約0.6mである。非常に簡素に作られており、棚をもたない墓である。墓室を掘り込む際に、岩盤隙間の堆積した土の部分や風化によって脆くなった部分を勘案して造られている。

本墓は、聞き取りに調査によると、かつての上勢頭喜友名組、屋号坂又上の喜友名家の墓で、子供が葬られていたようである。伐採後の露出状況は、墓の蓋石と思われる石灰岩や、墓口の上部の隙間をふさいだと思われる石が散乱していたが、人工遺物は出土していない。



第4図 北-1号墓実測図

東地域

D地区1号墓（第5図）

北谷町上勢区伊礼伊森原867番地にある。西北西方向に伸びる丘陵の北向斜面にある。墓は、谷間の平坦面との境目に露頭した小規模の石灰岩の岩陰を掘り込んだ棚をもたない墓である。隣には更に1基並列する。

本墓は、斜面に露頭している石灰岩岩盤の前面を掘削し、略方形状の墓庭をつくり、更に水平方向に岩陰の脆い部分に横穴を掘り込んだ、棚を持たない墓である。

墓庭は、縦約2.3m、横約2.1mの約4.8㎡である。墓庭入口部分は石灰岩小礫を土留として約30cm程積み上げている。袖垣は左右両方にあり左側袖垣は、2号墓と共有している。20～30cm大の石灰岩礫を一列に積み上げている。右側袖垣は岩盤の前面にある傾斜部分をそのまま利用して約15cm大の石灰岩小礫を積み上げている。

墓口は、墓面の左よりに開き、幅約0.8m、高さ約0.9mである。右側墓面は、長さ40～60cm厚さ20cm前後の石灰岩を隅石にし、石灰岩と土を交互に積み上げ隙間を塞いでいる。蓋石は、大型の方形に加工された石灰岩を一段目に並べ、その上に積み上げて塞いでいる。

墓室は最大で奥行1.7m、幅は中央部付近で約1.5m、面積は約2.1㎡である。掘り込んだ間口は幅約1.5m、高さ0.9mで、ほぼ水平に掘り込まれている。棚をもたない

墓である。

墓庭外に検出された2本の溝は、丘陵斜面の縁に沿って1号墓と2号墓を谷間の平坦地と区切るようにはしる。幅60～80cm、深さ約30cmの溝と幅30cm、深さ約10cmの2つの溝が確認できた。溝からは、蓋石と思われる石灰岩の切石が検出された。

伐採後の墓庭から、『大正四年□□ 米』と銘書が記されたマンガン掛け厨子甕蓋（第25図2）が採集された。墓庭から灰釉碗底部（第18図4）と銅製キセル吸口（第28図23）施釉陶器碗（第18図16）が出土し、右側袖垣の中から、花瓶（第19図21）と寛永通寶（第28図27）が出土した。

D地区2号墓（第5図）

北谷町字上勢区伊礼伊森原867番地にある。1号墓と同じ石灰岩岩盤の岩陰を掘り込んだ横穴式掘り込み墓である。1号墓の東側に並ぶ墓である。

石灰岩岩盤の前面を掘削して墓庭をつくり、更に水平方向に岩陰の脆い部分に横穴を掘り込んだ棚をもたない墓である。

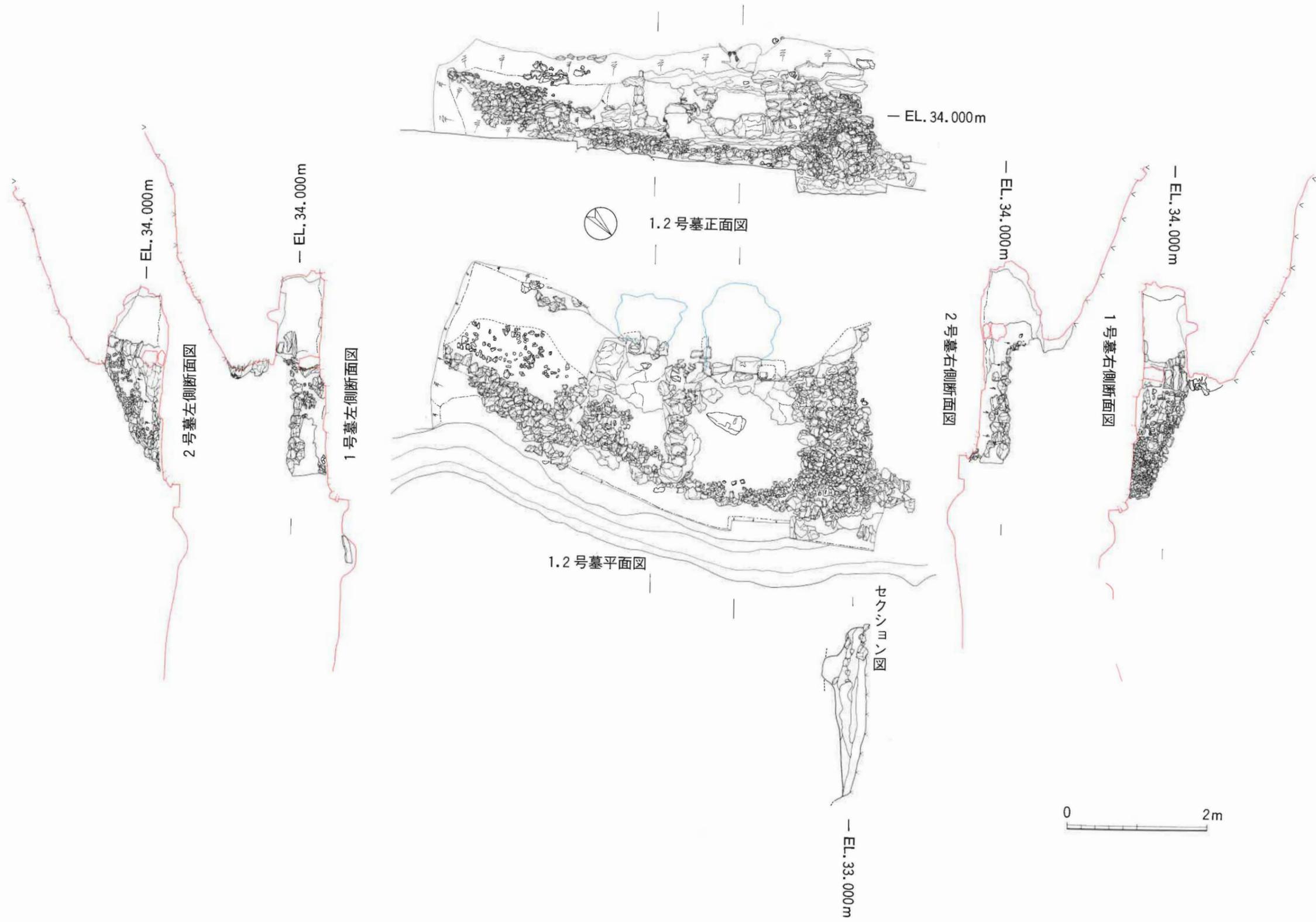
墓庭は、縦約2.3m、墓庭入り口で横約1.0m、墓口付近で約0.8m、面積は約2.5㎡である。墓口に向かって幅を狭くする。墓庭の入り口部分には土留めの石列がある。袖垣は、右側のみで1号墓と共有する。墓の左側には丘陵斜面が続き、斜面の縁にあたる部分に土留の石積が野面積みで積まれている。墓庭の前面には、1号墓と同様に2列の溝がはしっている。2本の溝は、丘陵の縁をなぞるように幅約60～80cm、深さ約30cmの溝と幅30cm、深さ約10cmの溝が確認できた。

墓口は右よりに開き、幅約0.4m、高さ約1.0mで墓口の左側縁のみに石が積まれる。墓口から石灰岩礫が検出されたことから、1号と同様に一段目に大きめの石灰岩を並べ、野面積みで墓口を塞いでいたと思われる。

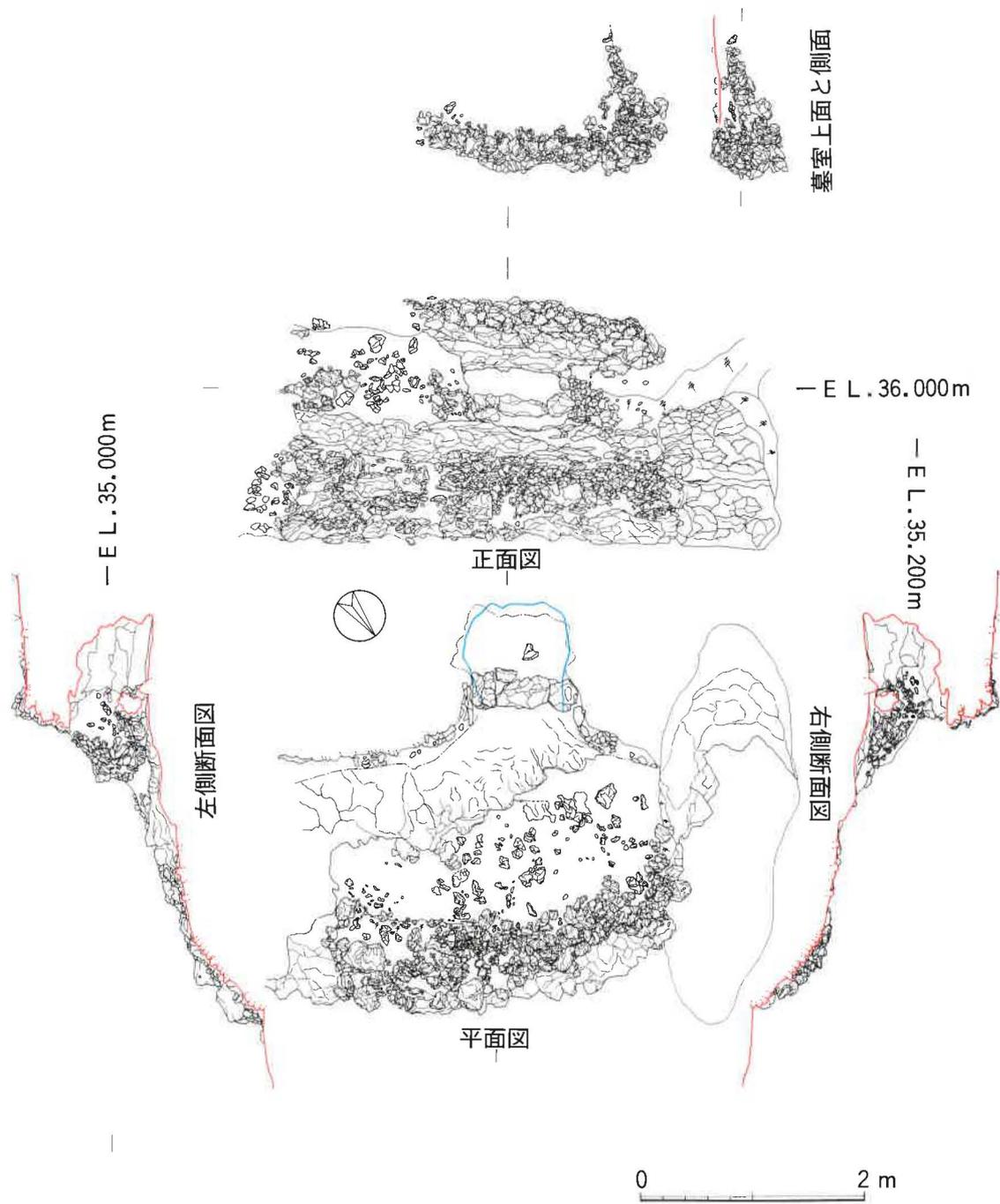
墓室は、幅約1.3m、奥行約1.0m、高さ約1.2m、奥壁高さ約0.7m、墓室面積は約1.1㎡である。

墓前面の溝は、聞き取り調査によると、土地の境界をはっきりさせるために溝を掘って目印にしたと言う。

伐採後、墓室内から、破碎されたマンガン掛け厨子甕（第21図1）、同蓋（第25図1）には「大正八年」「コスメ男カナ」の銘書がある。納骨器に転用されたと思われる油壺（アンダガーミ）（第19図16）が採集された。墓庭の覆土から施釉陶器碗（第18図9、18）施釉陶器小碗（第18図25）が採集された。墓庭中央部付近から、銅製キセル雁首（第28図21）、吸い口（第28図22）、銅製簪（第28図24）が出土し、1号と共有する袖垣下からは盃（第19図12）と寛永通寶（第28図29）が出土している。



第5図 東地域D地区1.2号墓実測図



第6图 東地域D地区3号墓実測図

D地区3号墓（第6図）

北谷町字上勢区伊礼伊森原879番地にある。斜面中腹に露頭した石灰岩の前面を掘削し、更に水平方向に石灰岩下を掘り込んだ棚をもたない墓である。石灰岩の岩陰部分の脆い部分を勘察されて、墓室を掘り込んでいる。

墓庭は、旧地表面から約1.2m上で斜面を掘削している。縦約2.0m、横幅4.0m、面積は約8.0㎡である。

墓口幅は約1.0m、高さは約1.0mである。他の墓と同様に墓口をふさぐのは大きめの石灰岩礫を積み上げて塞いでいる。

墓室は幅約1.3m、奥行約0.9mの墓室面積約1.0㎡で、石灰岩岩盤下の脆い部分に掘り込まれている。墓の天井部分の岩盤縁には、石灰岩礫を積みあげて成形している。

この墓の右側には、戦後の環境の変化に起因する雨水によって岩盤まで侵食された、滝壺状の大きな奥があり、侵食によって流れ込んだ土砂が墓庭前面に約1m堆積していた。墓室からは大正15年鑄造の5銭（第28図32）が出土した。

墓庭からは、施釉陶器小碗（第18図24）、墓庭前面から近代磁器の盃（第27図22）が出土した。聞き取りによって女子が葬られていたことが確認された。

西地域

西地域の墓は、北地域の丘陵から緩やかに南西方向に分かれて迫りだした丘陵の先端に露頭する石灰岩の岩盤には、1号、2号、3号、6号があり、3号以外は、燃料タンクを囲む土手に埋められていた。4号墓、5号墓は、東地域から緩やかに下りながら伸びる丘陵の縁に露頭する岩盤を利用している。

西地域1号（第7図）

北谷町下勢頭平安山伊森原1063番地にある。本墓は、貯油施設の管理用道路部分に埋められていた墓である。舌状の小丘陵を形成する琉球石灰岩の岩盤の前庭部を削平し、更に水平方向に石灰岩岩盤を掘り込んだ、棚を持たない墓である。

墓庭は縦5.5m、幅4.0m、面積13.8㎡で、縦に長く墓庭左側に入り口がある。墓庭前面部に土留として20～30cm前後の石灰岩礫を野面積みにし、墓庭を平坦に造成している。

墓口の羨道部分の左右両側床面から、墓面石の根石と思われる石灰岩礫が検出された。墓面は石積みで塞ぎ、墓口をもうけたものであると思われる。墓庭右側袖垣から厚さ約5cm、長さ約70cm、幅約50cmの石灰岩製蓋石が検出された。

墓室は幅約幅2.8m、墓室奥行き1.8m、面積約5.0㎡である。高さ約1.2mで墓口部分からほぼ水平に岩盤に掘り込まれている。袖垣は左右ともに隣の6号・2号墓と共有する。

本墓の墓室内左側から破碎された。マンガン掛厨子甕（第21図2）（第22図3）（第23図6、7）が出土した。墓庭前面の石垣外側から施釉陶器碗（第18図5、6）、鉢（第19図2）が出土した。墓庭の客土からは、プラスチック製櫛（第29図9）、骨製ハブラシ（第29図9）、プラスチック製ハブラシ（第29図8）とハブラシケース（第29図7、9）、ガラスビン（第29図11、13、15、18）等の現代遺物が出土している。墓の持主は不明であるが聞き取りで墓があったことは確認できた。

西地域2号墓（第8図）

北谷町下勢頭平安山伊森原1063番地にある。石灰岩岩盤の前面を掘削し、更に岩盤を水平方向に掘り込んだ墓で、墓室内にシルヒラシと棚がある。墓口左側には、袖墓がある。今回調査した掘り込み墓の中では、比較的大きい墓である。

墓庭前面は、貯油施設建設の際の造成によって削られ残存部は縦約3.6m、墓庭の横幅は約5.2mである。墓庭中央右側に露出する石灰岩の岩盤は平坦に削られ、2～10cm前後の石灰岩小礫を墓庭に敷き詰めて造成している。

墓口の幅は約0.6m、高さ約1.0mである。両脇の隅石（シミシ）は栗石が使われ、墓口上の棟石（ジョーカブヤー）は、石灰岩の切石を使っている。

墓室は奥行約2.0m、墓室幅約2.5m、面積約7㎡である。墓室はシルヒラシ部分で約1.6m、で最上段では約90cmである。左右に1段、奥に3段あり、棚の幅は、約50～60cmである。約20cmの各段差をもつ棚がつくられている。1段目は左右と連続し、シルヒラシを囲むように『コ』の字状になる。他の施設は認められない。

墓面は、亀甲墓と同様に、隅石（シミシ）と岩盤の間に脇隅石（ワチシミシ）を組む。さらに上部の空間に石灰岩切石を積み、隙間に土を込めて塞ぎ、合端を隠すようにセメントを部分的に施す。

墓に向かって左側の迫りだした岩盤に、墓口高さ0.5m、墓室幅0.6m、奥行き0.6m、面積約0.4㎡の袖墓がつくられている。墓口からは、蓋石と思われる石灰岩が検出された。

墓庭から、マンガン掛け厨子甕破片（第22図2）と、人名の「ウシ」と銘書が記された同蓋破片（第25図5）と御殿型厨子甕破片（第23図8）が出土した。また、施釉陶器碗破片（第18図14）が出土しているがいずれも覆土からの出土である。墓面のセメント化粧部分には、沖縄戦の際にうけたと思われる弾痕が確認できる。本墓の持主

は確認できた。

西地域3号(第9図)

北谷町字平安山伊森原1063番地に位置する。石灰岩岩盤の前面を僅かに掘削し、岩陰部分を掘り込んだ棚をもたない墓である。

本墓前面の斜面には、約5cm大の石灰岩小礫の集中がみられた。本墓は、明確な墓庭を形成せず旧地形の斜面を残していると思われる。墓面は石灰岩礫の合端に土を込め隙間を塞いで積み上げている。セメントによる補強を墓面上部と下部を中心に施す。墓口幅は約0.6m、墓口高さ約0.9mで、石灰岩礫を積み上げて墓口脇の隅石を築き、長さ約1.2m、幅0.5m、厚さ0.2mの石灰岩を棟石にして墓口をつくる。墓室は奥行1.7m、墓室幅1.6m、墓室面積約2.0㎡で墓室の高さ1.3m、墓室奥壁高0.9mで、墓室は岩陰状を呈す。

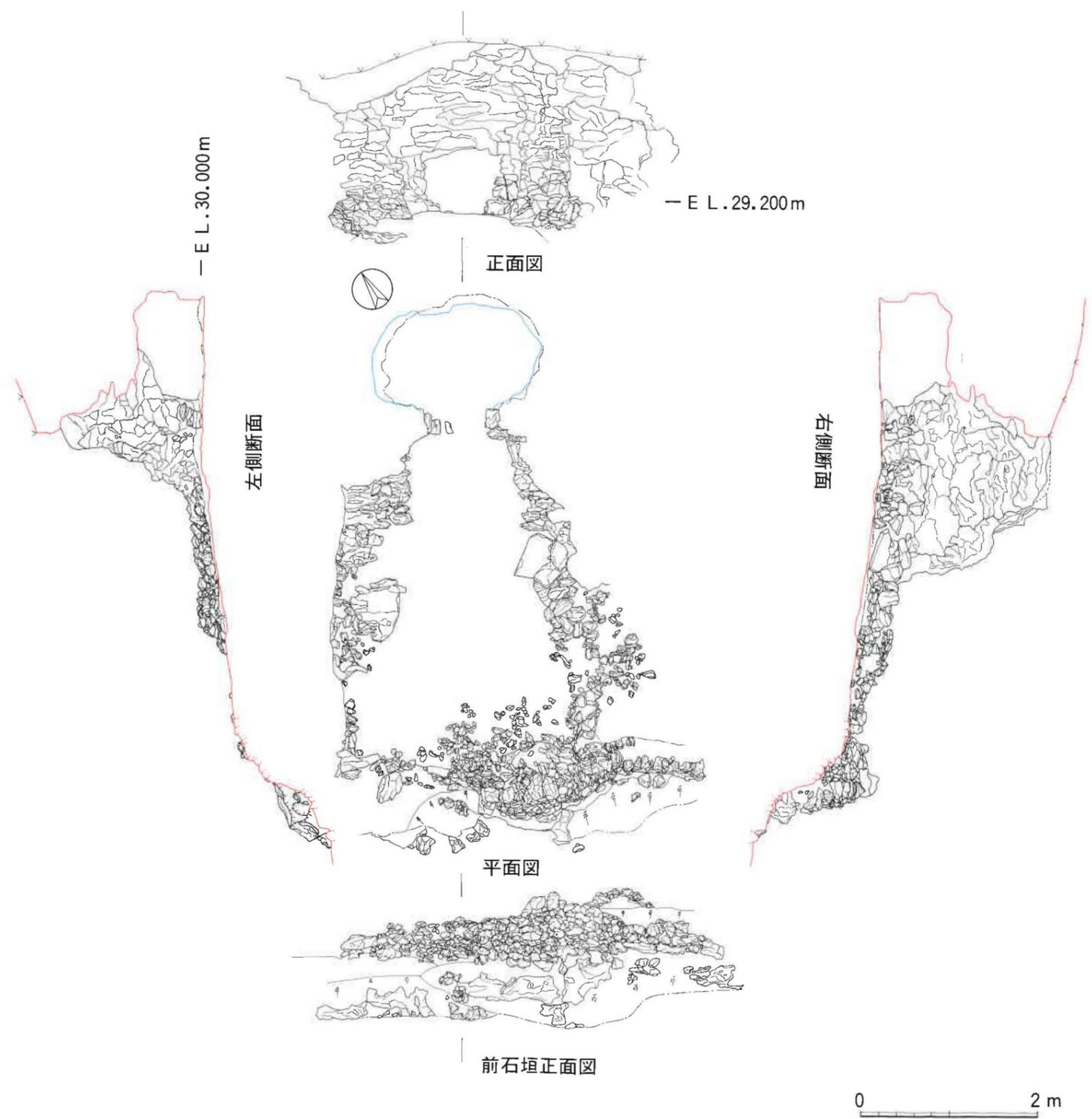
遺物は、墓前面から、プラスチック製ハブラシ(第29図6)・プラスチック製櫛(第29図4)・プラスチック製キセル筒(第29図5)、ガラス瓶(第29図12、14)が出土した。本墓の持主は確認できた。聞き取り調査によると、戦前に父親が急に亡くなったために急いで造ったということである。

西地域4号墓(第10図)

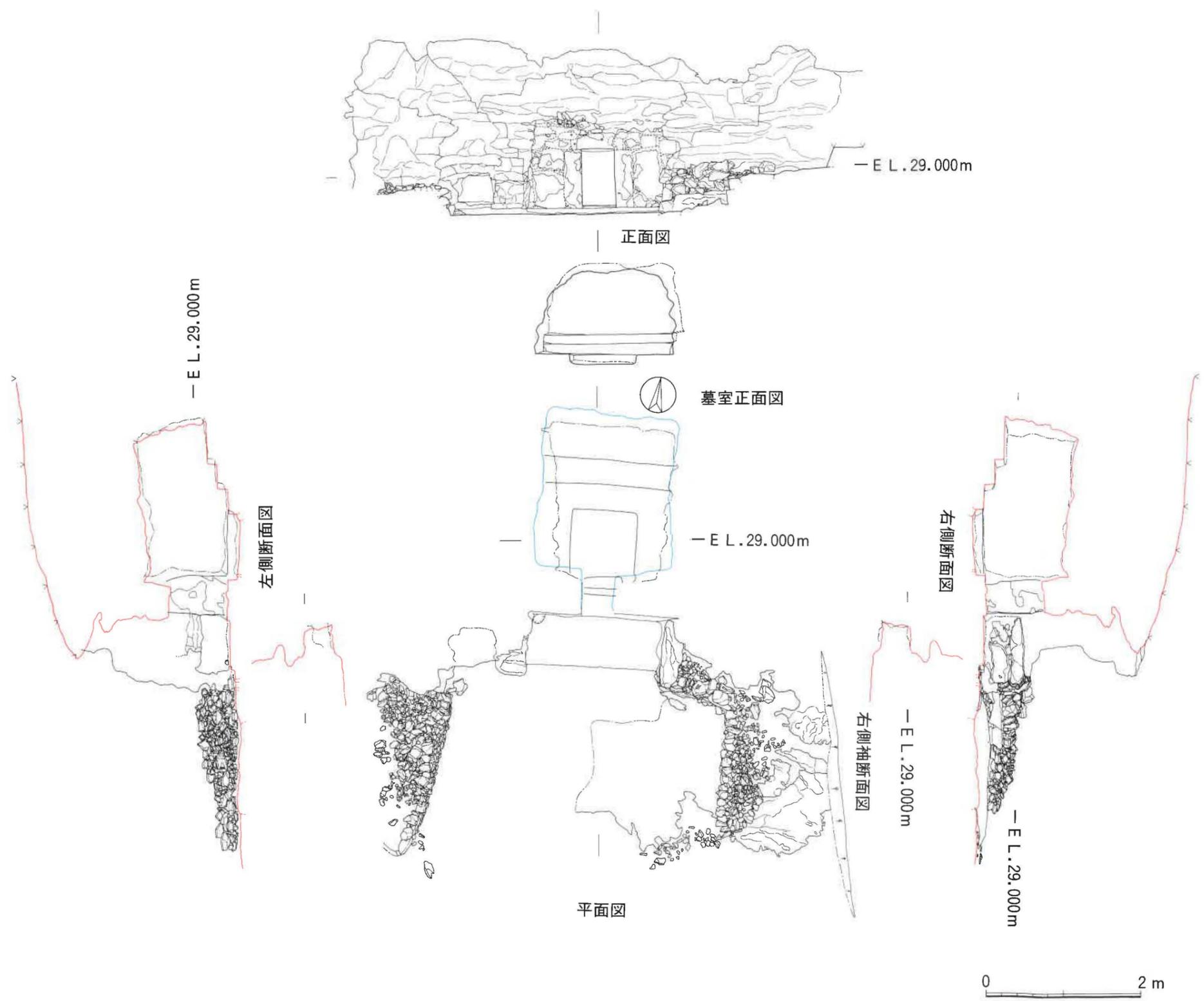
北谷町字伊礼伊森原862番地に位置する。今回調査した掘り込み墓では、最も規模の大きい墓である。丘陵斜面に露頭する石灰岩の前面を掘削し、さらに岩盤を水平方向に掘り込んだ棚をもつ墓である。墓庭の前面は破壊されており、検出された墓庭は縦4.0m、横幅3.6mで、約2~10cmの石灰岩小礫を敷き詰めて平坦に造成している。

墓庭を囲う左右両側ともに、袖垣は約50~70cm大の面取成形された石灰岩を1段目にし、30cm前後の面取された石灰岩を積む。裏込めには荒割した石灰岩礫を使う。右側袖垣は、墓面にすり合わせた部分以外は崩壊しており、荒割された石灰岩礫裏込めの中から脊椎動物遺骸が検出され、川島由次氏の同定の結果、ウシ・ブタ・ニワトリであった。左側袖垣も半分程失なわれている。

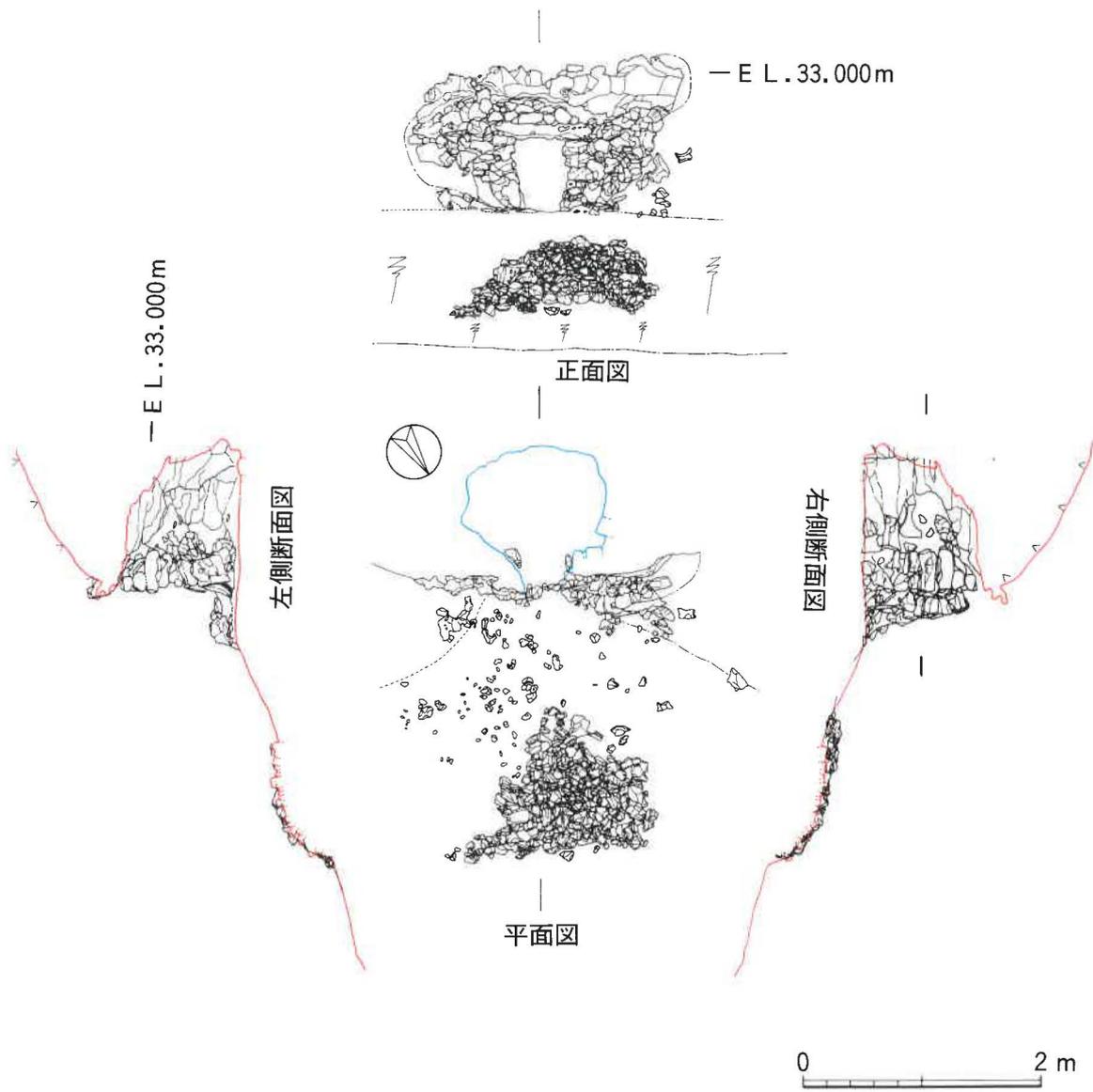
墓面は亀甲墓の作りと同様に、隅石(シミシ)、脇隅石(ワチシミシ)、棟石(ジョーカブイ)を大型の石灰岩切石を面取成形し積み上げ、岩盤との間に残る隙間を漆喰で塞いでいる。墓室を造るために掘り込んだ穴口上部は、弧を描くように丸みをもつ。墓面は、大型の石材10個で構成され墓を造った主の財力を伺わせる。



第7图 西地域1号墓实测图



第8图 西地域2号墓实测图



第9图 西地域3号墓实测图

墓口は墓室に対してやや右側に位置しており、横幅約0.64m、縦約1.0mで、墓口上部の隅は、丸みをつけて成形される。羨道部は奥行き約80cmである。墓室は、左右に1段、奥に3段の棚をもつ。1段目は左右と連続しておりシルヒラシを囲むように『コ』の字状を呈し、それぞれが約30cmの段差をもつ。墓口に対して、やや左よりにあるシルヒラシは、奥行き約1.2m、幅約1.5mで面積約1.8㎡である。

墓室は奥行約2.8m、墓室幅は墓口付近で約3.0m墓室奥で約2.1m、面積は約7.5㎡である。墓室高は、シルヒラシ部分で約1.7m、墓室奥で0.8mである。墓室内の壁は、墓面に比べて雑である。墓室成形時に作業量が勘案されたことを伺わせる。

本墓からは、納骨器（第21図4、第22図4～7、第23図1～5、第25図3、8～10、第24図、第26図）、施釉陶器碗（第18図7、13、24）、小碗（第23図23、26）、瓶（第19図17）、花瓶（第19図20）、浅鉢（第19図3）、壺（第19図8）、墓室内から古銭（第28図30）、大正9年鑄造の10銭貨幣（第28図31）が出土している。

本墓から、出土した納骨器はマンガン掛け厨子甕、同蓋と御殿型厨子甕、同蓋が出土しており、前者の蓋には「□清光緒十三年丁亥 次男仲村渠築登之春廣長女真蒲戸 □月十九日死去次女□・・・□ 二月十・・・二月十四・・・」、「次男仲村渠 築登之長女真蒲戸次女・・・三女真牛三人也」と銘書が記されている。

後者の納骨器の幅広な口唇部には「次男仲村渠・・・也」、「大清光緒十三年丁亥二月十八日次男仲村渠築登之春廣妻 死去同十二月十四日洗骨也 三男三良同二月九日死去十二月十四日洗骨」と銘書が記されている。

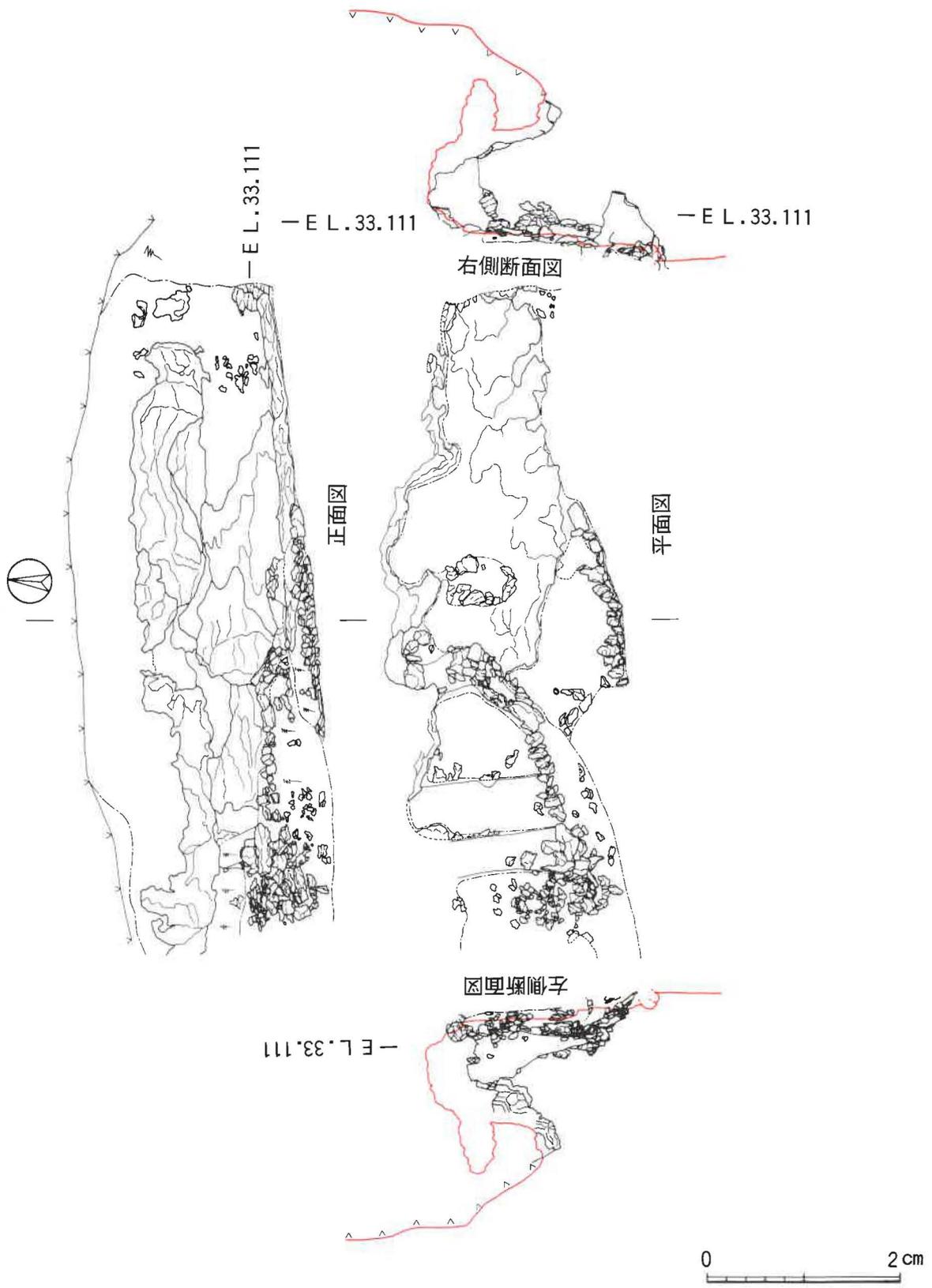
西地域5号墓（第11図）

北谷町字平安山伊森原1063番地に位置する。米軍基地内の管理用道路建設工事の際に埋められた台地の斜面に露頭する石灰岩岩盤の岩陰にある。岩陰の奥行きは約2.4m、高さ1.6m、幅約5mの岩陰である。岩陰の左側には自然堆積部分が見られるが、その縁に土留状の石列がある。岩陰の床面はほぼ平坦になっており、岩陰左側の堆積部との境目の前面に石列が約3mあり、25cm前後の石灰岩礫を土留状に並べている。岩陰面積約8.02㎡である。

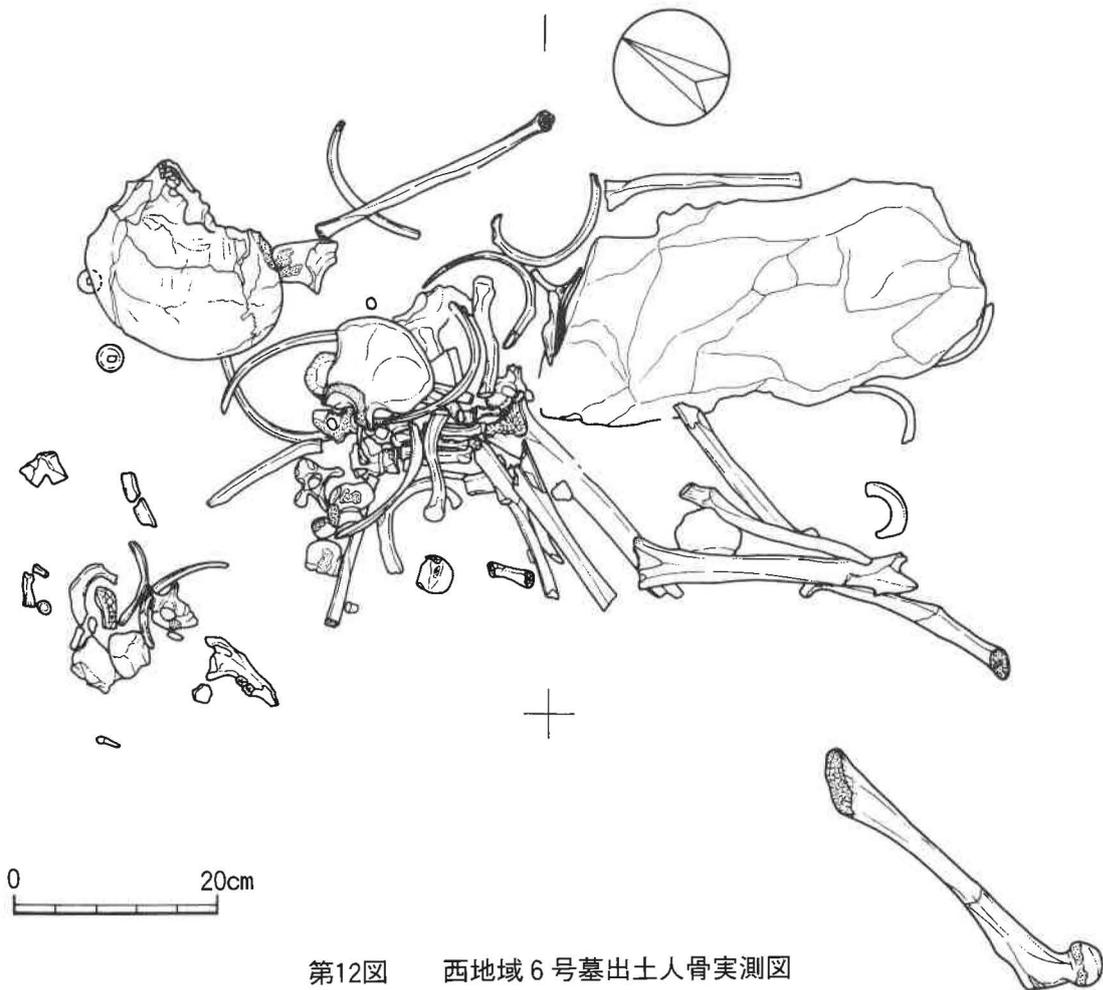
出土遺物は施釉陶器碗（第18図17、19、20）、褐釉壺（第19図6）、近代磁器（第27図3、16）が出土している。岩陰の前面には石列以外の遺構は確認されなかった。



第10图 西地域4号墓实测图



第11图 西地域5号墓实测图



第12図 西地域6号墓出土人骨実測図

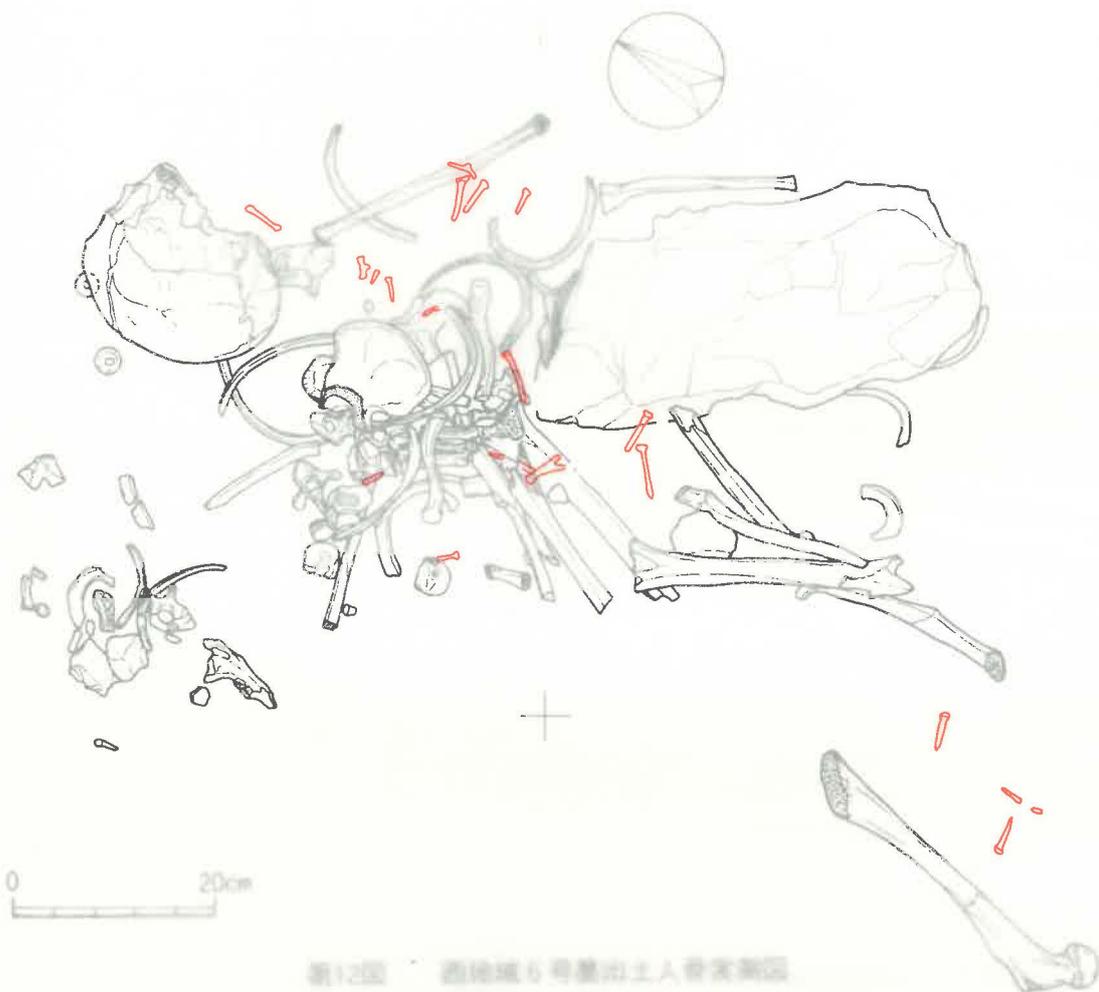
西地域6号墓（第13図）

北谷町字下勢頭平安山伊森原1063番地にある。本墓は丘陵先端部分に露頭する石灰岩岩盤の前面にある斜面を削平し、更に、石灰岩岩盤を掘り込んで造られた棚を持たない墓である。

墓庭外側には、旧地表面のクチャ（第三紀層泥灰岩）が露頭している平坦面があり、1号墓庭入口につながる。墓庭は縦約3.5m、横幅約4.5m、面積12.0㎡の隅丸方形を呈し、墓庭は周囲より一段上がる形で土留めの石灰岩礫を積んで造成される。

墓面は石灰岩礫と土を交互に積み上げて造られる。蓋石は長さ1m、幅0.64m、厚さ0.24mで墓口の外側に倒れた状態で検出された。墓口幅は約0.6mで墓口脇の左側隅石には長さ60cm前後の石灰岩を積んでいる。羨道は、奥行き約50cmで蓋石を止めるように幅0.6m、奥行き0.3m、厚さ0.14mの敷居石（スクバミ）がある。

墓室は奥行約1.3m、墓室幅約1.7m、墓室奥壁高約1.1m、墓室面積約1.91㎡である。墓室右側の半分は土と石灰岩の堆積で、墓面部分で土留状に石灰岩礫が積まれている。



第12図 西地域6号墓出土人骨実測図

西地域6号墓 (第13図)

北谷町字下勢頭平安山伊森原1063番地にある。本墓は丘陵先端部分に露頭する石灰岩岩盤の前面にある斜面を削平し、更に、石灰岩岩盤を掘り込んで造られた棚を持たない墓である。

墓庭外側には、旧地表面のクチャ（第三紀層泥灰岩）が露頭している平坦面があり、1号墓庭入口につながる。墓庭は縦約3.5m、横幅約4.5m、面積12.0㎡の隅丸方形状を呈し、墓庭は周囲より一段上がる形で土留めの石灰岩礫を積んで造成される。

墓面は石灰岩礫と土を交互に積み上げて造られる。蓋石は長さ1m、幅0.64m、厚さ0.24mで墓口の外側に倒れた状態で検出された。墓口幅は約0.6mで墓口脇の左側隅石には長さ60cm前後の石灰岩を積んでいる。羨道は、奥行き約50cmで蓋石を止めるように幅0.6m、奥行き0.3m、厚さ0.14mの敷居石（スクバミ）がある。

墓室は奥行き約1.3m、墓室幅約1.7m、墓室奥壁高約1.1m、墓室面積約1.91㎡である。墓室右側の半分は土と石灰岩の堆積で、墓室部分で土層状に石灰岩礫が積まれている。

— E L. 29,500 m

右側断面

2 m

本墓の墓室からは、人骨が一体検出された。人骨には寛永通寶3枚（第28図25、26、27）と鉄製丸釘20本（第28図1～20）が供伴し、厨子甕は出土していない。

人骨は墓室右側奥の石灰岩礫の周囲で検出された。（第12図）人骨は、頭骸骨が墓室左奥側、大腿骨が墓口側にあり、その他の骨が墓室のほぼ中央部に散乱する状態で検出された。頭骸骨のそばで、寛永通寶3枚（2枚は重なる）が検出され、鉄製丸釘は人骨の散乱状況と同様な位置で検出された。鎖骨や寛骨の下から、右足（足首から下）の部分が検出され、検出状況は攪乱を受けていない状態であった（註）。

出土遺物は、墓庭から施釉陶器碗（第18図10、12、15）、盃（第19図13）本土産磁器小碗（第27図17）、盃（第27図20）が出土している。

本墓は、終戦後の墓移転の際のリストにも記載されておらず、聞き取り調査でも存在を確認できなかった。

4. 字下勢頭・上原地区の亀甲墓

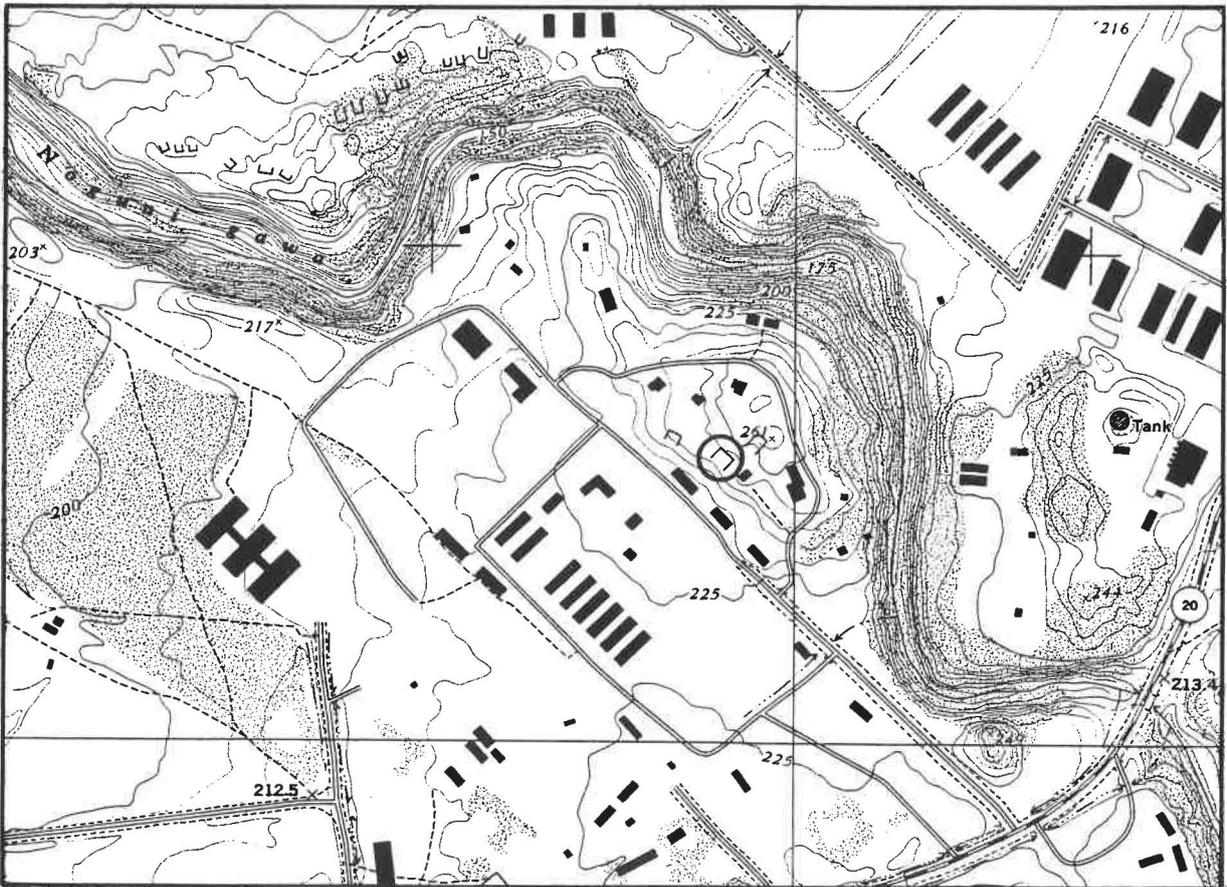
本墓は、貯油施設建設予定地内にある古墓群と併せて発掘調査を行い、平成8年1月16日から1月26日までの期間で解体調査を行い、主な石材を嘉手納基地内の上勢頭・下勢頭古墓群の保存地域に一時保管している。発掘調査の成果と解体調査の成果を併せて述べる。

北谷町字下勢頭上原1156・1166番地に位置する。旧下勢頭上原地区にあり、北谷町の北側、沖縄市と嘉手納町との境界にあたる野国川が後方に流れている。

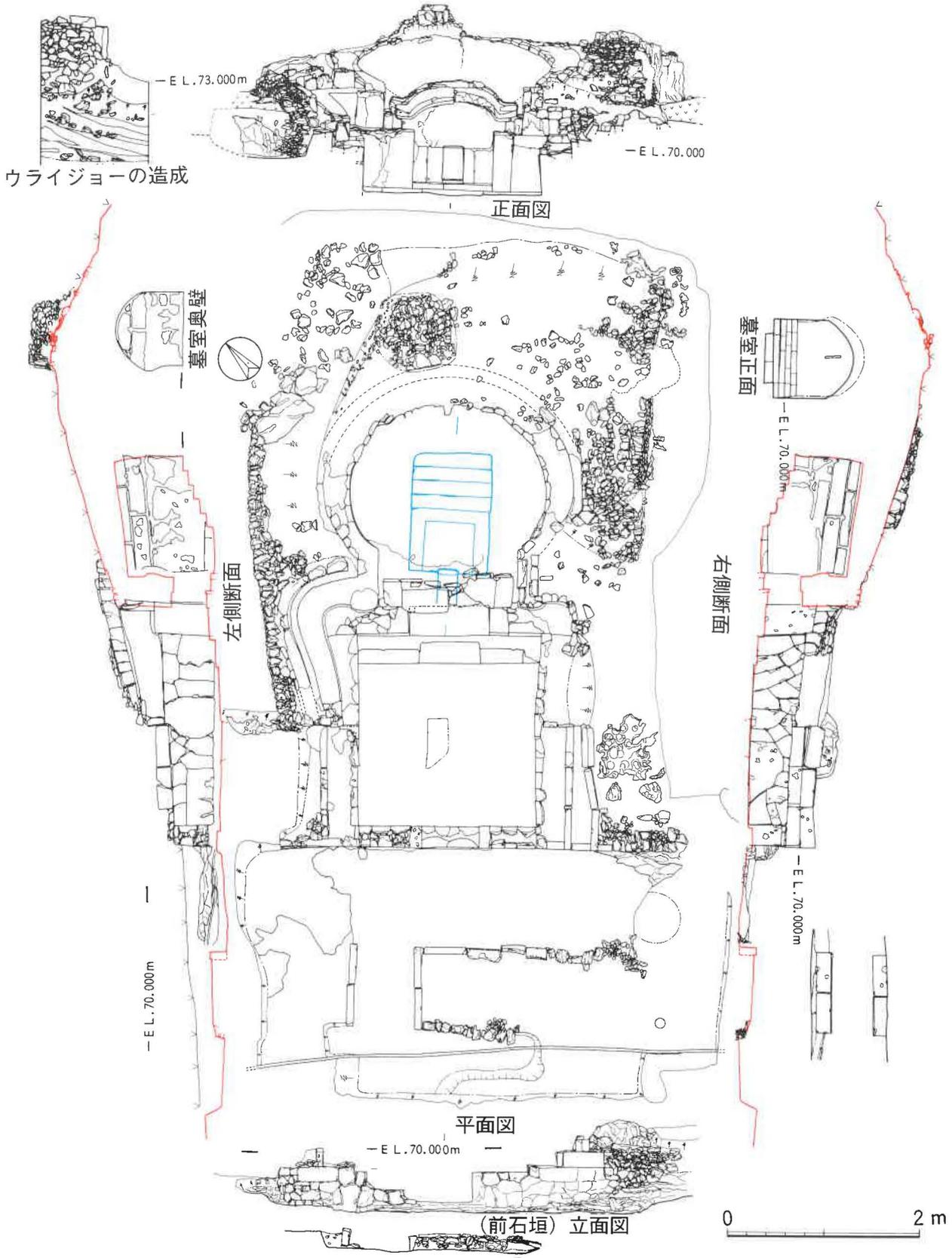
亀甲墓は、標高約70mの台地から南西方向に緩やかに下る斜面の石灰岩岩盤につくられた墓を改築したもので、墓室奥壁中央に「昭和十四年旧五月十一日」の改築年月日が墨書で記されており、墓庭入口を塞ぐようにヒンプン状の石列が造られている。

石列は、墓庭を塞ぐように、入口を左側にずらされている。墓庭入口と同じ約1.8mの幅で間口を設ける。石列は高さが47cm、長さ124cm、幅20cmの規格された石灰岩切石を、入り口の両側に並べる。他の部分は石灰岩切石と粗割りされた石灰岩礫、改築前の墓に使われていたと思われる石灰岩製香呂を再利用しており、石列囲いの中を造成土で埋める。

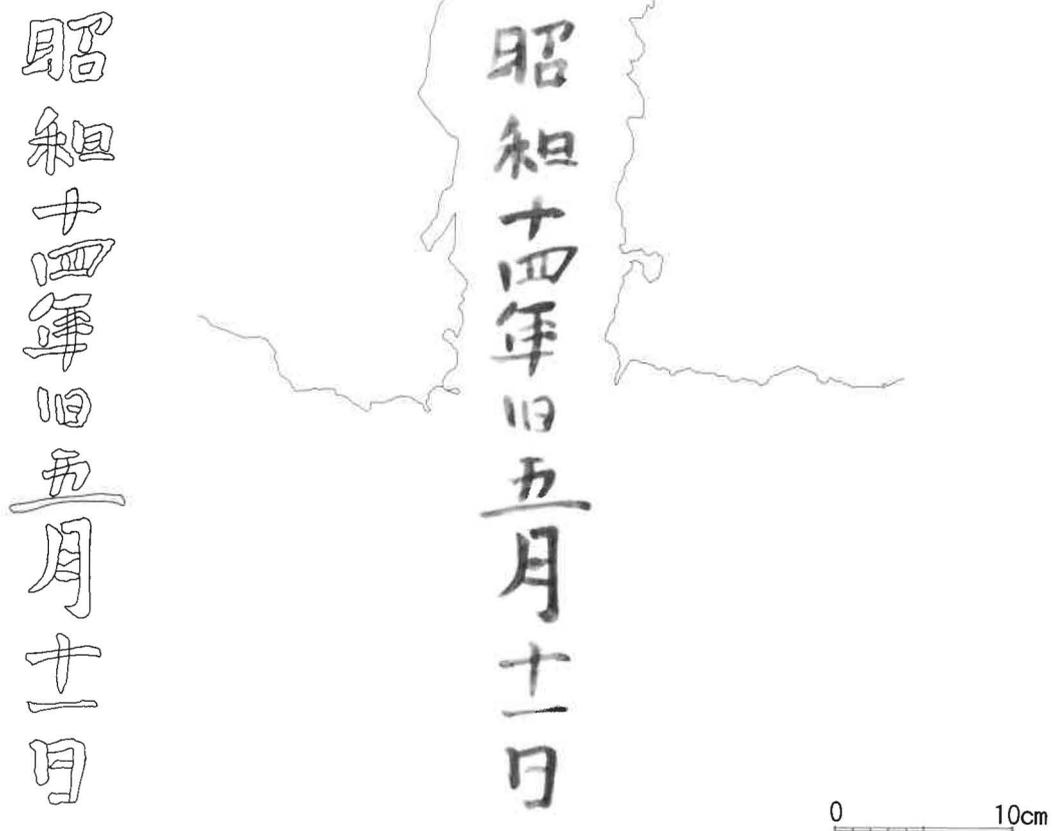
墓庭は、石灰岩岩盤の前面を掘削し、中央部から東側にかけて露頭する岩盤を削って庭床面を平坦にし、セメントを被覆している。墓庭は縦5.7m、横5.5m、面積約31㎡の方形状である。墓庭を囲む石垣（ウスディマーイ）は3段あり、一段目は大型の面取り加工された石灰岩切石を立て上部を小さめの石灰岩切石で高さを合わせる。2段目、3段目は高さ42cm、長さ124cm、幅20cmの規格された石灰岩切石をならべる。石垣と岩盤の間の裏込めは、粗割りした石灰岩礫入れ、土で覆っている。墓庭前石垣はウスディマーイより一段下げて造られており、左側前石垣の隅に墓庭の排水口が設けられている。



第14図 字下勢頭上原地区亀甲墓位置図 上
 第15図 米軍地形図(1945年) 下



第16図 字下勢頭上原地区亀冢墓実測図



第17図 墓室内奥壁墨書

サンミーデーは二段あり、一段目は袖石（ソデイシ）前に三枚の石灰岩切り石を並べ、その間を石灰岩小礫混じりの土で埋めセメントで被服する。二段目は、一枚の石灰岩切石で、墓面石を固定する様に置かれる。二段目の左隅にはカビアンジを配す。袖石は大型の石灰岩礫を角柱状に整形したものを、墓面を固定するように組まれている。

墓口は幅0.6m、高さ1.1mで、羨道部分は0.95mであるスクバミは中央部で分かれ、間に蓋石を止める石を挟む。ジョウカブイ（棟石）は一枚の石灰岩を面取り加工した大形の石材を使い上部を半円形にする。粗く加工された石灰岩のウチカブイ（内側棟石）が一段低くなって蓋石止めとなる。ウチカブイは、5個の粗割りされた石灰岩を積み上げ天井石材との隙間部分を石灰岩礫と土を混ぜたセメント（註2）を素手で撫で付けて塞ぎ、合端も同様に固定する。

昭和十四年旧五月十一日

昭和十四年旧五月十一日

0 10cm

第17図 墓室内奥壁墨書

サンミーデーは二段あり、一段目は袖石（ソデイシ）前に三枚の石灰岩切り石を並べ、その間を石灰岩小礫混じりの土で埋めセメントで被服する。二段目は、一枚の石灰岩切石で、墓面石を固定する様に置かれる。二段目の左隅にはカビアンジを配す。袖石は大型の石灰岩礫を角柱状に整形したものを、墓面を固定するように組まれている。

墓口は幅0.6m、高さ1.1mで、羨道部分は0.95mであるスクバミは中央部で分かれ、間に蓋石を止める石を挟む。ジョウカブイ（棟石）は一枚の石灰岩を面取り加工した大形の石材を使い上部を半円形にする。粗く加工された石灰岩のウチカブイ（内側棟石）が一段低くなって蓋石止めとなる。ウチカブイは、5個の粗割りされた石灰岩を積み上げ天井石材との隙間部分を石灰岩礫と土を混ぜたセメント（註2）を素手で撫で付けて塞ぎ、合端も同様に固定する。

墓室は、石灰岩岩盤を掘り込んだ半地下式で、幅約2.4m、奥行き約3.6m、面積8.6㎡である。左右に1段、奥に5段の棚をもつ。1段目は左右と連続しておりシルヒラシを囲むように『コ』の字状を呈している。段差は20cm～25cmで幅約42cmである。墓室高さは、シルヒラシ部分で約2.6m、奥壁部分で約2.0mで、天井は、棚にあわせて傾斜が付けられ奥壁にむかって高くなる。

奥壁は岩盤を削って面取りしその上に石灰岩切石を積み石灰岩礫を裏込めし、側壁には厚みのある石灰岩を立て、岩盤とのあいだに石灰岩礫を裏込めする。側壁と天井材の合端の仕口には滑り止めの段を削りたしている。墓室天井は、僅かに内湾させた厚みのある石灰岩切石を奥壁に向かって縦に並べ一段目3個、二段目2個を左右から立ちあげ、中央部で同様な2個の石材をのせてアーチ状にする。これらの石材の合端は、セメントによって固定させている。

マユは、ジョウカブイ（棟石）と天井材の隙間に粗削りで残した部分を組んでいる。墓室上のチジ部分は造成によって盛り上げセメントを被覆して整形する。その周囲は造成され野面積みの土留が積まれる。墓の主要な部分は、漆喰で化粧されている。

本墓の解体によって確認された主な石材は、451個であった。これには側面に積まれた土留の石灰岩礫は含まれていない。

この亀甲墓で最も特徴的な部分は、墓庭の外側に作られているヒンプン状の石列で、同様な施設を『ナガジョウ』と呼ばれるものがある（註2）との助言をいただいた。この墓の形態は、墓庭入口の前面に石垣をまわし、側面に入口を開ける形である。

聞き取りによると、完成当時はヒンプン状の石列左側には、松が生えた畦であったという。墓の前には畑が営まれ、そこを通り抜けるように一間半の未舗装の道が群道（現在の嘉手納基地第1ゲートから知花方面に抜ける道）まで続いていたようである。

（註）

1. 松下孝幸氏の精査による。
2. 崎原石材の崎原盛吉氏の助言によく。
3. 名嘉間宜勝氏の緒言による。

第IV章 出土遺物

出土遺物は中国、沖縄などの陶磁器類、鉄製丸釘、キセル、簪、古銭、近代磁器、近代遺物等の人工遺物と、人骨、脊椎動物遺骸の自然遺物にわけられる。

そのほとんどは陶磁器類で、中国産磁器2点、沖縄産陶器が124点、近代磁器が42点を得られ総数168点である。

これらの出土状況は第1表から第8表に示したとおりである。

第1節 出土遺物

1. 磁器（第1表）

a. 青磁

第18図1（図版18）が、旧下勢頭上原地区の亀甲墓から青磁が1点得られた。15世紀前半から中頃の内面に唐草文を施す皿である。ウライジョウ部分からの出土である。

b. 染付

第18図2（図版18）が東地域D地区1号墓から1点出土している。口縁部部内外面に圈線を施す小破片である。

c. 近代、現代磁器（第2表）（第27図）

近代磁器は貯油施設建設予定地内にある墓から盃や茶碗が出土しており、現代磁器のほとんどが亀甲墓からの出土である。

2. 陶器

(1) 沖縄産陶器（第3表）（第28図～26図）

無釉陶器は、納骨器である厨子甕と水甕、甕、搦鉢が、施釉陶器は、碗、小碗、盃、鉢、浅鉢、壺、花瓶、急須、火取が出土している。陶質土器は鍋が出土した。

厨子甕は、甕型厨子甕と家型厨子甕があり、前者はマンガン掛け厨子甕で、胴部の張りが弱くスマートなものと、胴部が張り頸部をすぼめるものがある。いずれも沈線による装飾を施す。第21図1は、低部に3個の足がつく。後者は、御殿型厨子甕、俗に「ソーページーシ」と称されるもので重ね焼きのためのツノを有するものである。同蓋の底（第26図6）には重ね焼きの窯着痕がのこり、型で造られた獅や鯨などの装飾は内側には粘土を玉状にしたものを詰めている。

3. 金属製品（第4表）（第28図1～24）

(1) 鉄釘

西地域6号墓の墓室内で鉄製丸釘20本が人骨に伴って検出された、釘は約4～5cmのもの約3cmのものがある。

(2) キセル

東地域D地区1号墓からはキセルの吸い口（第28図24）は、銅版が薄手のもので接合部がのこる。2号墓出土のキセルの雁首と吸い口は羅字部分が朽ちた状態で出土したが、両方ともに内部に羅字をのこしている。吸い口の孔は小さい。

(3) 簪

東地域D地区2号墓からキセルにともなって出土した簪（ジューファー）は竿の先端が角柱状になるもので欠損品である。

4. 銭貨（第5表）（第28図25～33）

(1) 古銭

西地域6号墓から人骨にともなった寛永通寶の内2枚には裏面に擦られたような痕がみられる。西地域4号墓からは寛永通寶と思われる小銭と大正9年鑄造の10銭が出土した。東地域D地区2号から出土した寛永通寶は、裏面の縁の段差がなく平坦になっている。

5. 骨製品（第6表）（第29図9）

(1) 歯刷子

柄の部分に『□□オン歯刷子、二號型』の文字がある。首里城（注1）で「昭和2年から24年まで製作…」の報告例があるもので、（第29図9）のプラスチック製歯刷子ケースに（第29図10）は収められていたものである。

6. プラスチック製品（第6表）（第29図）

プラスチック製歯刷子ケース（第29図7）の中に、プラスチック製歯刷子（第29図8）が入ったまま出土した。プラスチック製櫛（第29図1～4）、プラスチック製キセル筒が出土したが、いずれも覆土からの出土である。

7. ガラス製品（第7表）（第29図11～18）

ガラスを素材とする製品で、その器種の判別できるものは、牛乳の瓶、ビールの瓶、飲料水の瓶、薬品の瓶がある。これらの製品には、浮き文字が存在しその用途が判明

したものである。用途不明品も1点あるがアメリカ製の瓶とおもわれる。(第29図13)はキリンビールに問い合わせた結果、この瓶は、戦前に作られていたものであることまで確認できた。

8. 人 骨 (第12図) (図版13)

西地域6号墓の墓室から検出された人骨で、14歳～15歳ぐらいの男性(小年)である(註2)。

9. 脊椎動物遺骸 (図版35)

西地域4号墓右がほ袖垣のなかに、人為的に埋められた骨が検出され、獣骨(ウシ、ウマ、ブタ)と鳥骨(ニワトリ)が一括で出土した(註3)。

《註》

1. 沖縄県教育委員会「首里城 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査」『沖縄県文化財調査報告書第88集』
2. 松下孝幸氏の精査による。
3. 川島由次氏の同定による。

外国産磁器観察表一覽 (第1表)

挿図 番号 図版 番号	分 類	口 径 底 径 器 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第18 図1 1819	青 磁 皿	13.0 — —	淡 茶 色 細 粒 子	灰 青 色	有	内面に唐草文、口縁内側に2 条の沈線。 15c前半～中頃。	中 国	亀甲墓右側 ウライジョ —
図2 18 19	染 付 碗	— — —	乳 白 色 微 粒 子	淡 青 白 色	無	口縁内外面に圈線。 16c後半～17c中頃。	中 国	東D-1号 墓

近代磁器観察表一覧（第2表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第27 図1 31	茶碗	— 4.0 —	乳白色 微粒子混 入	薄い透明釉	無	外面に山、木の文様が見られ る。		亀甲墓
図2 32	小碗	6.2 3.1 4.2	灰白色 微粒子	薄い透明釉	無	腰部に波形文を施す。		亀甲墓前垣 攪乱
図3 32	小碗	7.4 3.4 4.6	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	畳付けに砂が付着。 高台から腰部へ丸みを持って 立ち上がる。		西-5号墓
図4 31	茶碗	7.7 2.9 4.5	灰白色	薄い透明釉	無	湯呑み茶碗で外面に文様が見 られる。		東D-1/ 2号墓間木 の下
図5 32	茶碗	— — —	灰白色 黒色微粒 子混入	緑色釉	無	クロム青磁で、文様は外面に 飛び鉤による刻文を施す。		東D-1号 墓
図6 31	茶碗	7.8 3.7 4.4	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	近代の茶碗で雀と竹の文様を 施す。		東-D号墓 表採
図7 31	茶碗	7.4 5.3 3.4	灰白色 微粒子混 入	淡緑色釉	無	外面腰部から高台まで菊文様 が廻る。		亀甲墓
図8 32	茶碗	7.6 — —	乳白色 微粒子	緑色釉	無	クロム青磁で文様は、外面に 飛び鉤による刻文を施す。		西-4号墓 東袖石垣
図9 32	茶碗	7.7 — —	乳白色 微粒子	淡緑色釉	無	外面上部に鋸歯状の文様を施 す。		不明
図10 32	茶碗	7.9 — —	乳白色 微粒子	淡緑色釉	無	外面上部に鋸歯状の文様を施 す。		亀甲墓左袖 垣
図11 31	茶碗 の蓋	(口径) 外径9.4 内径7.0 —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	つまみが欠落。 蓋甲に線彫りの圏線と花文を 描き、鉄釉を施す。		亀甲墓
図12 32	急須	— 6.8 —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	碁笥底。		東D-1号 墓右石垣
図13 32	小碗	9.5 — —	灰白色 黒色微粒 子混入	薄い透明釉	無	4重の菱形文を口縁付近に施 す。		西-4号墓 東袖

近代磁器観察表一覧（第2表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第27 図14 32	小碗	8.0 — —	灰白色 微粒子	緑色釉	無	クロム青磁である。 細い縦位の沈線文を施す。		西-4号墓 東袖石垣
図15 32	小碗	9.8 — —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	口縁部は外反する。 外面口縁直下に篆字文を施す		東D-1号 号墓西側
図16 32	小碗	8.9 — —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	口縁部は若干外反する。		西-5号墓 左岩下埋土
図17 32	小碗	7.4 — —	灰白色 微粒子	緑色釉	無	クロム青磁。 縦位の削り出しで文様構成を 成す。		西-6号墓
図18 32	盃	6.2 2.3 2.5	乳白色 微粒子	緑色釉	無	口縁部若干外反する。 高台を浅く造る。 丁寧に仕上げる。		東D-1号 墓西側
図19 31	盃 (白磁)	6.5 2.5 2.9	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	口縁部は外反する。 丁寧に仕上げる。		東D-1号 墓西側
図20 32	盃	7.1 2.6 2.7	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	口縁部は直口する。 外面は轆轤痕が見られる。 内面に花文を施す。		西-6号墓 墓庭
図21 32	小碗	— 3.2 —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	高台を浅く造る。 腰部は丸味を持って立ち上がる。		西-1号墓
図22 31	盃 (白磁)	7.0 2.6 2.6	乳白色 微粒子	薄い透明釉,	無	口縁部は緩やかに外反する。 丁寧に仕上げる。		東-3号墓 墓庭外東側
図23 31	盃	5.8 2.5 2.9		緑色釉	無	内底に「壽」の字と鶴、亀、 松の文様が見られる。		西-2号墓 墓庭
図24 31	盃	5.0 1.9 3.0	乳白色 微粒子	緑色釉	無	口縁部は直口する。 外面にすずらの文様が描か れる。		西-2号墓 墓庭
図25 32	盃	6.8 — —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	口縁部破片。 口縁部は僅かに外反する。		西-1号墓
図26 32	碗	11.4 — —	灰白色 黒色微粒 子混入	薄い透明釉	無	内面口縁部上部に釉垂れが見 られる。		亀甲墓ウラ イジョー

近代磁器観察表一覧（第2表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第27 図27 31	どんぶり	14.5 5.6 7.0	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	外側口縁上部に銀色の圈線が1条廻る。		亀甲墓
図28 31	どんぶり	15.4 6.0 6.9	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	外面に蓮葉文様と胴下部に線彫りの圈線が廻る。		亀甲墓左側 帯部覆土
図29 31	小皿	9.4 4.4 2.4	灰白色 微粒子混入	薄い透明釉	無	口縁部には圈線と蓮華文見込みは格子文		東D-1号 墓庭堀下げ
図30 31	皿	— — —	乳白色 微粒子	薄い透明釉	無	縁取りの線を金色で施す。		亀甲墓左袖 垣

陶器観察表一覧（第3表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第18 図3 18 19	湧田系 碗	— 7.2 —	高台部が 淡茶色 胴部は 黄白色 細粒子	暗緑色釉 見込み及び高 台脇以下は 露胎	有	底部破片で、腰部からストレットに立ち上がる。	沖 縄	亀甲墓
図4 18 19	湧田系 碗	— 6.2 —	灰白色 細粒子	濃灰色 見込み及び高 台脇以下は 露胎	有	見込みに目砂が付着。	沖 縄	東D-1号 墓墓庭
図5 18 19	碗	13.4 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で微弱に外反する。	沖 縄	西-1号墓
図6 18 19	碗	— — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で微弱に外反する。	沖 縄	西-1号墓
図7 18 19	碗	13.8 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 白化粧土、透明釉ともに薄い 焼成不良。	沖 縄	西-4号墓
図8 18 19	碗	14.8 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 焼成不良である。	沖 縄	不明
図9 18 19	碗	14.5 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 見込みに蛇の目釉剥きが見ら れる。	沖 縄	東D-2号 墓西アゼ
図10 18 19	碗	12.5 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 見込みに蛇の目釉剥きが見ら れ目砂が見られる。	沖 縄	西-6号墓 墓庭

陶器観察表一覧 (第3表)

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第18 図11 18 19	碗	14.4 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	僅かに外反し、口唇部が弱く 肥厚する。 透明釉の艶があまりなく、轆 轤痕を明瞭に残す。	沖繩	西-5号墓
図12 18 19	碗	15.1 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	外面に呉須と飴釉による染花 文を施す。 口縁部内側に飴釉の釉垂れ。	沖繩	西-6号墓 墓庭
図13 18 19	碗	15.0 — —	淡灰白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	外面に呉須と飴釉を用いた染 花文を施す。	沖繩	西-4号墓 表採
図14 18 19	碗	13.6 — —	黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 両面に呉須による菊花文を施 す。	沖繩	西-2号墓 前庭
図15 18 19	碗	14.8 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	外面に呉須による文様を施す	沖繩	西-6号墓 墓庭
図16 18 19	碗	15.0 6.4 6.0	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 焼成不良である。	沖繩	東D-1号 墓前庭表土
図17 18 19	碗	— 6.6 —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	見込みに蛇の目釉剥ぎが見ら れる。 重ね焼きの際の溶着が見込み と高台に残る。	沖繩	西-5号墓 表土
図18 18 19	碗	— 6.7 —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	口縁部で僅かに外反する。 見込みに蛇の目釉剥ぎが見ら れる。	沖繩	東D-2号 墓アゼ
図19 18 19	碗	— 6.6 —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	見込みに蛇の目釉剥ぎが見ら れ、重ね焼きの際の白土が畳 付に残る。	沖繩	西-5号墓 表採
図20 18 19	碗	— 6.2 —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	同上。 畳付には施釉されない。	沖繩	西-5号墓
図21 18 19	碗	— 6.2 —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	見込みに蛇の目釉剥ぎが見ら れる。	沖繩	西-4号墓 表採
図22 18 19	碗	— 6.6 —	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	見込みに蛇の目釉剥ぎがあり 重ね焼きの痕が残る。 畳付けには釉はかからない。	沖繩	西-4号墓

陶器観察表一覧（第3表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第18 図23 1819	小碗	8.5 4.0 4.25	黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	畳付及び見込みに白土が付着 する。	沖繩	西-4号墓 東袖石垣
図24 18 19	碗	- 3.9 -	淡黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	見込みに白土が付着する。	沖繩	東D-3号 墓庭
図25 18 19	碗	- 3.7 -	淡灰色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	見込みに蛇の目釉剥ぎが見ら れ、重ね焼きの際の溶着痕が 残る。	沖繩	東D-2号 墓アゼ
図26 18 19	小碗	- 4.2 -	黄白色 細粒子	白化粧土の上 に透明釉	有	畳付に白土が付着する。	沖繩	西-4号墓 東袖石垣
図27 18 19	碗	14.6 - -	淡黄白色 細粒子	褐色釉	有	口縁部の破片で微弱に外反す る。	沖繩	表採
図28 18 19	碗	12.2 5.8 6.0	淡黄白色 細粒子	外面、暗褐色 内面、灰色	有	畳付及び見込みに白土が付着 する。	沖繩	東D-1号 墓袖垣右側 中
図29 18 19	碗	- 6.1 -	黄白色 細粒子	褐色釉	有	内面胴部に鉄釉による圈線。 見込みに鉄釉による丸文を施 す。	沖繩	西-4号墓 東袖石垣

陶器観察表一覧（第3表）

挿図 番号 図版 番号	分類 ()内は 方言名	口 径 底 器 器 高 (cm)	素 地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第19 図 1 20	鉢 (リンブ)	— 9.3 —	黄 白 色 粗 粒 子	外面は黒釉 内面は白化粧 畳付除き総釉	有	底部破片。 見込みに蛇の目釉剥ぎ。	沖 縄	亀甲墓ウラ イジョー
図 2 20	鉢 (リンブ)	— 10.4 —	淡黄白色 細 粒 子	外面は黒釉 内面は白化粧 の上に透明釉 畳付除き施釉	有	底部破片。 見込みに蛇の目釉剥ぎ。 高台に直径5mmの穴を1個穿 つ。	沖 縄	西-1号墓 前垣
図 3 20	浅 鉢	12.4 6.4 4.8	黄 白 色 細 粒 子	内面は白化粧 の上に透明釉 外面は黒釉	有	腰部より緩やかな曲線を描き ながら、口縁部で開く器形。 口縁部は稜花状。	沖 縄	西-4号墓 袖石垣
図 4 20	水 注	— 10.6 —	黄 白 色 細 粒 子	白化粧の後に 足の付根部ま で透明釉	有	べた底に脚をつけた器形。 胴部に呉須と飴釉を施す。	沖 縄	亀甲墓
図 5 20	水注の 蓋	口径6.9 口径5.7 — —	淡黄白色 細 粒 子	外面のみ白化 粧の上に透明 釉	有	蓋表に呉須を施す。	沖 縄	東-D1号 墓右石垣表 採
図 6 20	褐 釉 小 壺	— — —	黄 白 色 細 粒 子	外面に鉄釉	有	肩部破片。	沖 縄	西-5号墓 表土
図 7 20	薄手壺	— — —	茶 褐 色 微 粒 子	外面は白化粧 無釉	有	胴部の小破片。	沖 縄	西-4号墓
図 8 20	壺	— — —	淡 茶 色 細 粒 子	外面に淡褐色 の鉄釉	有	丸味を持つ肩部の破片。 沈線を2条横走させている。	沖 縄	西-4号墓 墓庭表採
図 9 20	壺	— 6.8 —	淡黄白色 細 粒 子	外面と高台内 は鉄釉	有	底部から斜めに立ち上がる。	沖 縄	西-4号墓 東袖石垣
図10 20	酒 器 (カカウ)	5.0 — —	灰 色 細 粒 子	白化粧の上に 透明釉	有	口縁部を受け口状に垂直に立 ち上がらせる。	沖 縄	東D-1号 墓右表採
図11 20	酒 器 (カカウ)	5.3 — —	黄 白 色 細 粒 子	白化粧の上に 透明釉 受け口の上に 濃い呉須	有	口縁部を受け口状に垂直に立 ち上がる。	沖 縄	不明
図12 20	盃	3.5 1.9 2.0	灰 白 色 微 粒 子	白化粧の上に 透明釉	無	腰部よりストレートに立ち上 がり、口縁部で外反する。	沖 縄	東-D2号 墓前庭部覆 土

陶器観察表一覧（第3表）

挿図 番号 図版 番号	分類 ()内は 方言名	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第19 図13 20	盃	3.5 1.7 1.8	灰白色 微粒子	白化粧の上に 透明釉	無	腰部よりストレートに立ち上 がり口縁部で外反する。 腰部以下は露胎。	沖繩	西-6号墓 墓庭
図14 20	盃	3.8 2.0 2.0	灰白色 微粒子	白化粧の上に 透明釉	無	腰部は緩く丸味を帯びて立ち 上がり、口縁部は外反する。 高台脇以下は露胎。	沖繩	東-1号墓 右表採
図15 20	酒壺 (ヤツガ ー)	3.6 7.5 12.6	淡黄白色 細粒子	口縁部から頸 部は白化粧の 上に透明釉 以下、畳付を 除き黒釉	有	胴部は球体状。 高台部に一对の孔を穿つ。	沖繩	亀甲墓前垣
図16 20	油壺 (アツガ ミ)	11.6 10.9 23.2	淡黄白色 細粒子	畳付を除き黒 釉	有	腰部より緩やかに丸味を持っ て立ち上がる。 肩部に縦位の耳を四個持ち、 二条の沈線を廻らす。	沖繩	東D-2号 墓墓室
図17 20	瓶	2.0 3.2 9.8	淡黄白色 細粒子	外面の腰部ま で、白化粧の 上に透明釉	無	腰部に指痕が残る。 焼成不良。	沖繩	西-4号墓 前庭部埋土
図18 20	瓶	2.2 4.6 12.1	淡黄白色 細粒子	畳付を除き、 白化粧の上に 透明釉	有	長頸の瓶。 胴部中央より口縁部まで呉須 を施す。	沖繩	東-D3号 墓墓庭
図19 20	火入 (ヒトウイ)	10.4 - -	黄褐色 細粒子	外面は白化粧 の上に透明釉	有	口縁部のみに呉須を施す。 *煙草の火種入れのこと である。	沖繩	亀甲墓
図20 20	花瓶	7.1 - -	黄白色 細粒子	畳付を除き白 化粧の上に透 明釉	有	高台を「ハ」の字状に仕上げ て安定させる。 高台内に重ね焼きの溶着。	沖繩	西-4号墓 東袖石垣
図21 20	花瓶	4.6 7.2 17.2	淡黄白色 細粒子	畳付を除き白 化粧の上に透 明釉	有	口縁部に呉須を施す。 胴部には同じく呉須による花 文を描く。	沖繩	1号墓右袖 石垣中

陶質土器／陶器観察表一覧（第3表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	器形・文様・その他の特徴	出土地点
第20 図 1 22	播鉢	— 13.2 —	赤褐色 粗粒子	底部破片。 櫛目の幅は1.5cmで、一単位の溝数は10本である。 外面に轆轤痕が見られ、一部指で撫でた跡が認められる。 色調は内面が赤褐色、外面が暗褐色である。	西-5号墓 左岩下埋土
図 2 22	播鉢	— — —	赤褐色 粗粒子	小破片。 櫛目の幅は2cmで、一単位の溝数は10本である。	西-4号墓 東石垣
図 3 22	播鉢	— — —	赤褐色 粗粒子	小破片。 破片のため櫛目の幅及び一単位の溝数は明確でない。	西-4号墓
図 4 22	鉢	— 11.7 —	茶褐色 粗粒子	底部破片。 色調は内外面とも暗褐色だが、外面は部分的に黄褐色の 自然釉がかかる。 見込みに細かい剥離痕が見られる。	西-4号墓 墓庭表採
図 5 22	甕	19.7 — —	赤茶色 粗粒子	口縁部を玉縁状に肥厚させる。 内面に轆轤痕を残す。	西-4号墓 墓庭表採
図 6 22	甕	— 15.0 —	暗褐色 粗粒子	底部破片。 内面に輪積みによる成形痕が見られる。 色調は外面が暗褐色だが、底部に黄褐色の自然釉がかかる。	西-4号墓
図 7 22	水甕	— 14.6 —	赤褐色 粗砂粒子	底部破片。 器面調整は雑である。	西-5号墓 左岩下埋土
図 8 22	土鍋	22.0 — —	淡赤褐色 微砂粒子	口縁部破片。 口縁が「く」の字状に折れ曲がる。 全体的に丁寧に仕上げる。	西-5号墓 表採

納骨器観察表一覧（第4表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	窓数 底穴数	文様・その他の特徴	出土地点
第21 図1 23	甕型 厨子甕	29.2 18.4 59.4	茶褐色	マンガン釉 つやなし	3 三牀14	中央正面は位牌型。 沈線による圏線、蓮葉文、波状 文を施す。 底部に脚を付ける。	東D-2号 墓墓室
図2 23	甕型 厨子甕	27.0 19.2 55.0	赤褐色	マンガン釉 つやなし	不明 円状10	沈線による圏線、蓮葉文、波状 文を施す。 内面に墨で「志」の逆字が記され ている。	西-1号墓 墓庭
図3 23	甕型 厨子甕	27.0 18.5 49.9	茶褐色 断面中央 灰色	マンガン釉 つやなし	3 三牀13	中央正面は位牌型。 沈線による圏線、蓮華文、波状 文を施す。 胴部には割れ目を漆喰で補修し ている箇所がある。	東D-2号 墓墓室
図4 2627	甕型 厨子甕	27.4 - -	赤褐色	マンガン釉 つやなし	- -	口縁部破片。 沈線による圏線と蓮葉文を施す	西-4号墓
第22 図1 24	甕型 厨子甕	24.9 16.6 48.3	黒褐色	マンガン釉 つやなし	4 円状11	中央正面は位牌型。 沈線による圏線、蓮華文、波状 文を施す。 胴下半部に9個の穴がある。	東D-2号 墓墓室内床 面
図2 25	甕型 厨子甕	28.4 - -	赤褐色	薄いマンガン 釉 つやなし	- -	口縁部と胴部の破片。 中央正面は位牌型。 沈線による蓮華文を施す。	西-2号墓 埋土
図3 24	甕型 厨子甕	35.2 23.2 73.8	赤褐色	マンガン釉 つやなし	不明 -	沈線による圏線と蓮華文を施す 口縁部直下に墨書の印がある。	西-1号墓 墓室
図4 26 27	甕型 厨子甕	- - -	赤褐色	マンガン釉 つやなし	- -	口縁部破片。 沈線文が施される。	西-4号墓
図5 26 27	甕型 厨子甕	19.0 - -	赤褐色 断面中央 黒褐色	マンガン釉 つやなし	- -	口縁部破片。 沈線文が施される。	亀甲墓右石 垣
図6 26 27	甕型 厨子甕	- - -	茶褐色	マンガン釉 つやなし	- -	口縁部破片。 沈線文が施される。	西-4号墓
図7 26 27	甕型 厨子甕	- - -	赤褐色	マンガン釉 つやなし	- -	胴部破片。 蓮華文と思われる沈線が施され る。	西-4号墓
図8 26 27	甕型 厨子甕	- - -	内・外面 赤褐色 断面中央 茶褐色	マンガン釉 つやなし	- -	底部破片。	亀甲墓

納骨器観察表一覧（第4表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色・施釉	窓数 底穴数 (個)	文様・その他の特徴	出土地点
第23 図1 25	甕型 厨子甕	31.2 — —	茶褐色	マンガン釉 つやなし	3 —	中央正面は家型。 沈線による圏線と蓮華文を施す	西-4号墓
図2 26 27	甕型 厨子甕	— — —	茶褐色	マンガン釉 つやなし	— —	胴部破片。 沈線による圏線、蓮華文、波状 文を施す。	西-4号墓
図3 26 27	甕型 厨子甕	— — —	赤褐色	マンガン釉 つやなし	— —	胴部破片。 沈線による圏線、蓮華文、波状 文を施す。	西-4号墓
図4 26 27	甕型 厨子甕	— — —	赤褐色	マンガン釉 つやなし	— —	胴部破片。 沈線による蓮華文を施す。	西-4号墓
図5 26 27	甕型 厨子甕	— — —	赤褐色	マンガン釉 つやなし	— —	胴部破片。 沈線による圏線、蓮華文、波状 文を施す。	西-4号墓
図6 25	甕型 厨子甕	— 18.0 —	赤褐色	マンガン釉 つやなし	— 三田狀13	上部を半分程破損する。 沈線による蓮華文を施す。 底面に貝殻圧痕が残る	西-1号墓
図7 25	御殿型 厨子甕	— — —	赤褐色 砂粒混入 粗粒子	白化粧の上に 透明釉 縁と文様には 鉛釉を施釉	— —	口縁部破片。 貼付けによる蓮華文と合掌法師 像を施す。	西-1号墓
図8 25	御殿型 厨子甕	— — —	赤褐色 砂粒混入 粗粒子	白化粧の上に 透明釉 文様には鉛釉 を施釉	— —	胴部破片。 蓮華に乗った合掌座像を貼り付 ける。	西-2号墓 埋土
第24 28	御殿型 厨子甕	(口径) 45.7 × 33.6 (底径) 39×27 (器高) 44.5 (脚) 6.0	淡黄白色 鈳物混入 粗粒子	白化粧の上に 透明釉 文様には鉛釉 や呉須、緑釉 を施す	5 円状 9	(正面) 正面中央は家型。 蓮華文が貼り付けられ、呉須や 鉛釉が施釉されている。 (側面) 蓮華に乗った合掌座像に呉須や 鉛釉で施釉する。 口縁部と底の間の文様は呉須と 緑釉を施す。 (全体) 底の四隅には獅子頭をそれぞれ 貼り付けている。 四隅はL字形の脚を有す。	西-4号墓

納骨器（蓋）観察表一覧（第4表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 (内径) (外径) (器高) (cm)	素地	釉色・施釉	文様・その他の特徴	出土地点
第25 図 1 29	厨子甕 の蓋	22.6 28.4 13.0	赤褐色	外面はマンガン 釉 内面はなし	整形は丁寧である。 つまみは宝珠状を呈する。 つまみの上面に墨書で「廿」の文字が記 される。 (銘書) 蓋内 「大正八年」 「コメス男カナ」	東-D 2号 墓
図 2 29	厨子甕 の蓋	22.7 29.4 12.5	濃い赤褐色	外面はマンガン 釉	整形は比較的丁寧である。 つまみは宝珠状を程する。 かかりを有す。 頂上部には直径5mmの小孔を穿つ。 (銘書) 蓋内 「大正四年□日八□」 「米□□□. . . .」	東D-1号 墓
図 3 29	厨子甕 の蓋	24.4 29.8 -	茶褐色	外面はマンガン 釉 内面はなし	つまみの根元に細い圈線を1条廻らす。 かかりを有す。 (銘書) 蓋内「大清光緒十三年丁亥」 「次男仲村渠筑登之」 「春廣長女真蒲戸」 「□□十九日死去」 「次女□□二月十四□」 「次男仲村渠□□」 「筑登之長女真蒲戸」 「次女□□」 「三女真牛三人也」	西-4号墓
図 4 30	厨子甕 の蓋	- 20.2 26.4	濃い赤褐色	外面から底の 内面までマン ガン釉 内面上部はな し	表面と底の裏側に気泡がある。 かかりは無い。 (銘書) 蓋内 「カマド女」 「□」判読不可能	東D-2号 墓墓室内床 面
図 5 30	厨子甕 の蓋	- 19.6 25.6	赤褐色	外面はマンガン 釉	かかりを有す。 (銘書) 蓋内 「□ウシ」	西-2号墓 埋土
図 6 30	厨子甕 の蓋	19.0 26.6 -	濃い赤褐色	外面はマンガン 釉 内面はなし	かかりを有する。	亀甲墓左袖 垣
図 7 30	厨子甕 の蓋	26.1 33.4 -	赤褐色	外面はマンガン 釉	底部分に施釉の際、ついた指痕が残る。 かかりは無し。 (銘書) 蓋内 「死亡日」	西-1号墓 墓室
図 8 30	厨子甕 の蓋	20.6 26.6 -	濃い赤褐色	内外面ともに マンガン釉	底の表面部分に気泡がある。 かかりを僅かに有する。	西-4号墓

納骨器（蓋）観察表一覧（第4表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 (内径) (外径) 器高 (cm)	素地	釉色・施釉	文様・その他の特徴	出土地点
第25 図 9 30	厨子甕 の蓋	— — —	茶褐色	外面はマンガ ン釉 内面はなし	蓋の小破片 第25図3と同一個体 (銘書) 蓋内 「真牛二」	西-4号墓
図10 30	甕型 厨子甕 の蓋	— — —	茶褐色	外面はマンガ ン釉	胴部と鐙部分の小破片 第25図1と同一個体 (銘書) 蓋内 「□□□」判読不可能	西-4号墓
第26 図 1 28	御殿型 厨子甕 の蓋	下 42.0 上 45.6 35.6	淡黄白色 黒色鉍物 混入 粗粒子	内面マンガ ン釉、外面コバ ルトや鉛釉緑 釉	瓦屋根を模して、棟の頂上に鯨を置く。 庇の四隅の先端に重ね焼き用のツノをも つ獅子を配する。	西-4号墓
図 2	御殿型 厨子甕 の蓋	— — —	淡黄白色 黒色鉍物 混入 粗粒子	コバルト 鉛 釉 緑 釉	獅子を貼り付けている。	西-4号墓
図 3	御殿型 厨子甕 の蓋	— — —	淡黄白色 黒色鉍物 混入 粗粒子	コバルト 鉛 釉 緑 釉	棟端に付く鯨の尾びれ部分である。	西-4号墓
図 4	御殿型 厨子甕 の蓋	— — —	淡黄白色 黒色鉍物 混入 粗粒子	コバルト 鉛 釉 緑 釉	龍の顔(装飾の一部)瓦屋根の降棟、先 頭に付く獅子	西-4号墓
図 5	御殿型 厨子甕 の蓋	— — —	淡黄白色 黒色鉍物 混入 粗粒子	コバルト 鉛 釉 緑 釉	屋根部の上に乗る獅子の顔である。 両サイドに重ね焼きの際の溶着が見られ る。	西-4号墓
図 6	御殿型 厨子甕 の蓋	— — —	淡黄白色 黒色鉍物 混入 粗粒子	コバルト 鉛 釉 緑 釉	重層な屋根の一部で重ね焼きの跡が残る	西-4号墓

金属製品観察表一覧（第5表）

挿図 番号 図版 番号	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地点
第28 図 1	鉄 釘	2.0	0.2		0.31	頭部が欠損。全体的にヒビ割れが生じている。	西-6号墓
図 2 33	鉄 釘	1.9	0.3		0.32	上端を欠く。	西-6号墓
図 3 33	鉄 釘	1.4	0.2		0.21	先端部が欠損している。 頭部は丸い。	西-6号墓
図 4 33	鉄 釘	2.7	0.25		0.45	丸い頭部の下に木片が付着している。	西-6号墓
図 5 33	鉄 釘	2.3	0.3		0.27	「く」の字に折れ曲がっている。	西-6号墓
図 6 33	鉄 釘	2.4	0.4		0.40	欠損品。 木片が付着している。	西-6号墓
図 7 33	鉄 釘	2.5	0.45		0.76	欠損品。	西-6号墓
図 8 33	鉄 釘	2.8	0.4		0.99	欠損品。 木片が付着している。	西-6号墓
図 9 33	鉄 釘	3.2	0.3		0.59	欠損品。 木片が付着している。	西-6号墓
図10 33	鉄 釘	3.8	0.35		0.87	頭部が欠損。 木片が付着している。	西-6号墓
図11 33	鉄 釘	3.9	0.5		1.60	先端部が欠損。 木片が付着している。	西-6号墓
図12 33	鉄 釘	3.4	0.35		1.39	先端部を欠損。 先端付近で曲がる。 木片が付着している。	西-6号墓
図13 33	鉄 釘	長3.9 幅2.8	0.4 0.35		1.89	2本の釘が「ト」の字につく。 二種類とも頭部は丸い。	西-6号墓
図14 33	鉄 釘	3.7	0.35		1.33	先端部が欠損。 多くの木片が付着している。	西-6号墓
図15 33	鉄 釘	4.7	0.35		1.70	ほぼ完形品。 頭部は丸い。	西-6号墓
図16 33	鉄 釘	5.0	0.4		1.92	ほぼ完形品。	西-6号墓
図17 33	鉄 釘	4.9	0.5		1.75	完形品。 頭部の約1cm下に木片が付着。	西-6号墓

金属製品観察表一覧（第5表）

挿図 番号 図版 番号	文 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	観 察 事 項	出土地点
第28 図18	鉄 釘	5.0	0.5		2.07	完形品。 木片が付着する。	西-6号墓
図19 33	鉄 釘	5.0	0.4		1.90	完形品。 木片が付着する。	西-6号墓
図20 33	鉄 釘	5.4	0.4		2.07	完形品。 木片が付着する。	西-6号墓
図21 33	キセル 吸い口	3.3	1.2	9	5.54	図22とセット。 内部に木の管が残る。	東D-2号 墓墓庭
図22 33	キセル 雁首	4.5	0.7	7	6.30	図21とセット。 内部に木の管が残る。	東D-2号 墓墓室
図23 33	キセル 吸い口	4.7	0.7 1.1	8		羅宇接続部から中央に向かって、約2cmの煙管の 合わせ目が認められる。	東D-1号 墓
図24 33	簪 (ジ-7ア)	-	0.35	35	2.13	飾り部分が欠損。 竿の断面は方形を呈し、先の方へしだいに太く なり、先端は角錐状になる。 中央部は細く、最厚部でも3.5cmしかない。 錆化が進み、全面青色を呈している。	東D-2号 墓墓庭

貨錢觀察表一覽（第6表）

挿図 番号 図版 番号	貨 錢 名	年 代	初鑄造年 (西曆)	直径 厚さ (mm)	残存 重量 (g)	観 察 事 項	出土地点
第28 図25 33	寛永通寶	江 戸	1624年	23.9 1.2	3.09	完形品。 孔の大きさは6mm×6mm。 裏面に擦られたような痕がある。	西-6号 墓 頭骨 の下
図26 33	寛永通寶	江 戸	1624年	25.0 1.1	3.39	完形品。 孔の大きさは6mm×6mm。 やや湾曲している。	西-6号 墓
図27 33	寛永通寶	江 戸	1624年	23.7 1.0	2.16	完形品。 孔の大きさは7mm×6.5mm。 裏面に擦られたような痕がある。	西-6号 墓
図28 33	寛永通寶	江 戸	1624年	22.5	2.29	完形品。 かなりの青錆で被われるが、文字 は判読できる。 孔の大きさは6mm×6mm。	東-D1 号墓右側 石垣周辺
図29 33	寛永通寶	江 戸	1624年	22.3 0.8	1.74	一部破損する。 表裏面ともに擦られた痕があり、 裏面は縁がない。 孔の大きさは6mm×6mm。	東D-2 号墓西側 石積み中
図30 33	不 明	不 明	不 明	23.0 0.9	0.51	※破損し、青錆で両面被っている ため文字は確認できない。	西-4号 墓
図31 33	10 銭	大正9年	1920年	21.1	2.94	表に菊文様と文字が、裏面にも花 文と文字が確認できる。	西-4号 墓墓室内
図32 33	5 銭	大正15年	1940年	18.5 1.5	1.18	表には鳩と文字が入り、裏には菊 文様と文字が確認できる。 縁に刻みを入れている。	東D-3 号墓墓室 内
図33 33	10 銭	昭和19年	1944年	19.0	2.39	表に文字が入り、裏面には菊文様 と文字が確認できる。	東D-3 号墓墓室 内

現代製品観察表一覧（第7表）

挿図 番号 図版 番号	分 類	最 長 最 幅 最 厚 (cm)	素 地	色	観 察 事 項	産	出土地点
第29 図 1 34	く し	15.9 3.5 0.7	プラス チック	黒 色	「特撰」の文字。		不 明
図 2 34	く し	15.8 3.1 0.4	プラス チック	黄 色	「TOMO」の文字。		西-1号墓
図 3 34	く し	12.7 2.9 0.6	プラス チック	肌 色	「Pro-phy-loc-tic」 の英字。		亀甲墓前石 垣
図 4 34	く し	16.0 2.85 0.6	プラス チック	ベッコウの 黄色	左端が熱により茶色に変色したと思 われる。 STRONG.COMB. 190の字		西-3号墓
第29 図 5 34	キセル 入れ	20.3 2.6 -	プラス チック	こげ茶色	外面に2条1組の波状模様。		西-3号墓 墓前庭客土
第29 図 6 34	歯 ブラシ	14.4 1.2 0.5	プラス チック	クリーム色	柄の部分に「銀盃歯刷子」の文字。 柄の下部に止め金のような金具が付 いている。		西-3号墓
図 7 34	歯 ブラシ ケース	16.3 3.4 -	プラス チック		横に黄色と黒のマーブル状が見られ る。		西1号墓墓 庭流れ込み 土
図 8 34	歯 ブラシ	14.75 1.1 0.6	プラス チック	ベッコウの 黄色	柄の部分「特製」の文字がある。		西1号墓墓 庭流れ込み 土
図 9 34	歯 ブラシ ケース	16.5 3.0 -	プラス チック		横にピンクや黒色を主としたマーブ ル状が見られる。		西1号墓墓 庭流れ込み 土
図10 34	歯 ブラシ	15.4 1.1 0.5	牛 骨	柄の下部分 青味を帯び る	柄の部分に「ライオン歯刷子. 二號 形」の文字がある。昭和2年~24 年大阪で製造。	大 阪	西1号墓墓 庭流れ込み 土

現代製品観察表一覧（第7表）

挿図 番号 図版 番号	分類	口径 底器 高 (cm)	素地	釉色・施釉	観察事項	産	出土地点
第29 図11 34	瓶	4.9 3.7 12.5	ガラス	無色透明	消毒全乳、「九〇瓦入」という浮文字が造られてある。		西-1号墓
図12 34	瓶	2.8 5.5 16.7	ガラス	無色透明	消毒全乳、「二デシリットル本日詰」と上部に「二筋」の浮文字。		西-3号墓
図13 34	瓶	2.7 6.2 24.0	ガラス	茶色	登録商標「キリンビール」の文字。		西-1号墓
図14 34	瓶	2.5 6.1 23.0	ガラス	グリーン 透明	登録商標と「株式会社布引礦泉醸造」の文字。 肩部と底面に浮文様。		西-3号墓
図15 34	瓶	2.6 6.8 23.3	ガラス	グリーン	登録商標「大日本麥酒株式会社製造」文字。		西-1号墓
図16 34	瓶	2.6 5.1 8.8	ガラス	無色透明	Horick's Malted Milk Lunch Tabletsの英字。		亀甲墓
図17 34	瓶	1.8 5.0 8.8	ガラス	無色透明	底面にFitch'sの英字。 正面、裏面に隆起を付け装飾を施してある。		亀甲墓
図18 34	瓶	2.6 6.6 18.7	ガラス	茶色	Polytaminの英字。		西-1号墓 右側石垣

第V章 まとめ

以上、発掘調査の成果について述べたが、若干の考察を行いまとめとしたい。

上勢頭古墓群は、町の北側の複雑に伸びる微高地にあり、駐留米軍嘉手納基地の南側にある貯油施設地域にあり、丘陵上や谷間には道路や施設がみられる。

基地内の墓は、戦後に移転が行われそのほとんどが空墓となっている。今回、調査対象となったのは北地域1基、東地域D地区3基、西地域6基、旧下勢頭 字上原の亀甲墓の合わせて11基である。

墓は大きくは2つの丘陵に作られており、北地域1号と西地域1号、2号、3号、6号の5基は南西方向に伸びる同じ丘陵の南側斜面にあり、後者は部分的に迫り出した丘陵の先端にあり、東地域D地区1号、2号、3号と西地域4号、5号の5基は西方向に伸びる丘陵に作られている。

これらの墓は、掘り込み墓（8基）と、亀甲墓（1基）、岩陰囲い込み墓と思われるもの（1基）の3種であった。掘り込み墓のうち、西地域2号墓のみに岩盤を掘り込んだ小さな袖墓がつくられている。

掘り込み墓は、石灰岩岩盤の前面を削平し、さらに水平方向に岩盤を掘り込んでい。墓室に棚を有するものは2基（西地域2号墓、西地域4号墓）、その他は棚を持たない墓である。墓は、粗割りした石灰岩礫と土をつかって積み上げ墓口をつくるものが4基（東地域D地区1号墓、2号墓、西地域3号墓、6号墓）あるが、西地域1号もこれに属すると思われる。西地域4号墓は規模が他の墓と異なり、面取り加工された石灰岩切石を使用して亀甲墓と類似する造りで墓口と羨道をもつ。東D地区3号墓は、石灰岩切り石を積んで全密閉して間口を塞いだようである。墓庭は、前面を土留の石積みで区面し、造成によって平坦にする。東地区D地区3号墓、西地域3号墓の2基は墓庭を区面する袖垣をもたないものである。西地域5号墓は、往時の形態をほとんどのこしていないが、検出状況から岩陰囲い込み墓の可能性があるのである。

出土遺物は、厨子甕などの納骨器、陶磁器、近代磁器、人骨、脊椎動物遺骸、古銭、キセル雁石と吸い口、簪、近代遺物が出土した。納骨器はいずれも陶器製で、甕型厨子甕 家型厨子甕、日用品である油壺を転用したものが得られた。甕型厨子甕は、マンガン掛け厨子甕のみである。家型厨子甕は、俗にソーベージシと称さるものである。16世紀後半から17世紀中頃の中国産染付が1点出土し、納骨器を含めた陶磁器は沖縄産陶器の出土が多い。陶質土器は壺屋で「サークー」と呼ばれている把手付き土鍋である。金属製品は東地域D地区1号墓からキセルの吸い口と寛永通寶、2号墓からキセルの雁首と吸い口、簪（ジーファー）、寛永通寶が出土し、東地域D地区3号

墓からは大正15年の5銭と昭和19年の10銭が出土している。近代磁器や近代遺物はそのほとんどが墓庭や周辺の覆土からの出土である。

墓から出土した納骨器の蓋や身に記される銘書のかで、特に、西地域4号墓から出土した厨子甕蓋には「□清光緒13年丁亥 次男仲村梁築登之春廣長女真蒲戸 □月十九日死去次女・・・二月十日・・・二月十四・・・」、「次男仲村梁 筑登之長女真蒲戸次女・・・三女真牛三人也」とあり、御殿型厨子甕の口縁部に「次男仲村梁・・・也」「大清光緒十三年丁亥二月十八日次男仲村梁築登之春廣妻 死去同十二月十四日洗骨也 三男三良同二月九日死去十二月十四日洗骨」の銘書がある。同じ年に家族が5人亡くなっており、2人については10ヶ月後に先骨したことがえる。納骨器の銘書に記された、光緒13年（1887年）明治20年には、前年に続いて天然痘が流行している（註1）ために家族が同じ時期に死亡した可能性が考えられる。本墓の右側袖垣内に意図的に置かれた脊椎動物遺骸（獣骨）は、ウシ、ウマ、ブタ、ニワトリの骨が出土した。

西地域6号墓から検出された人骨は、一時葬のみで終焉し木棺に使われたと思われる鉄製丸釘と寛永通寶を伴っており、14歳～15歳ぐらいの男性（少年）と推定された。

これらの墓は、18～19世紀に北谷の微高地に入って来た屋取（都落ち）集落（註2）の方々の墓と考えられ、下限は近代までであることが確認された。

当時の屋取（都落ち）の人々が、人植後かなり厳しい生活をしいれられていたことが、伺われ、苛酷な生活であった近世史の一旦を垣間見せている。

《註》

1. 又吉真三編著「沖縄県歴史総合年表」那覇出版社
2. 北谷町史編集委員会『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』
3. 松下孝幸氏の精査による。

《参考文献》

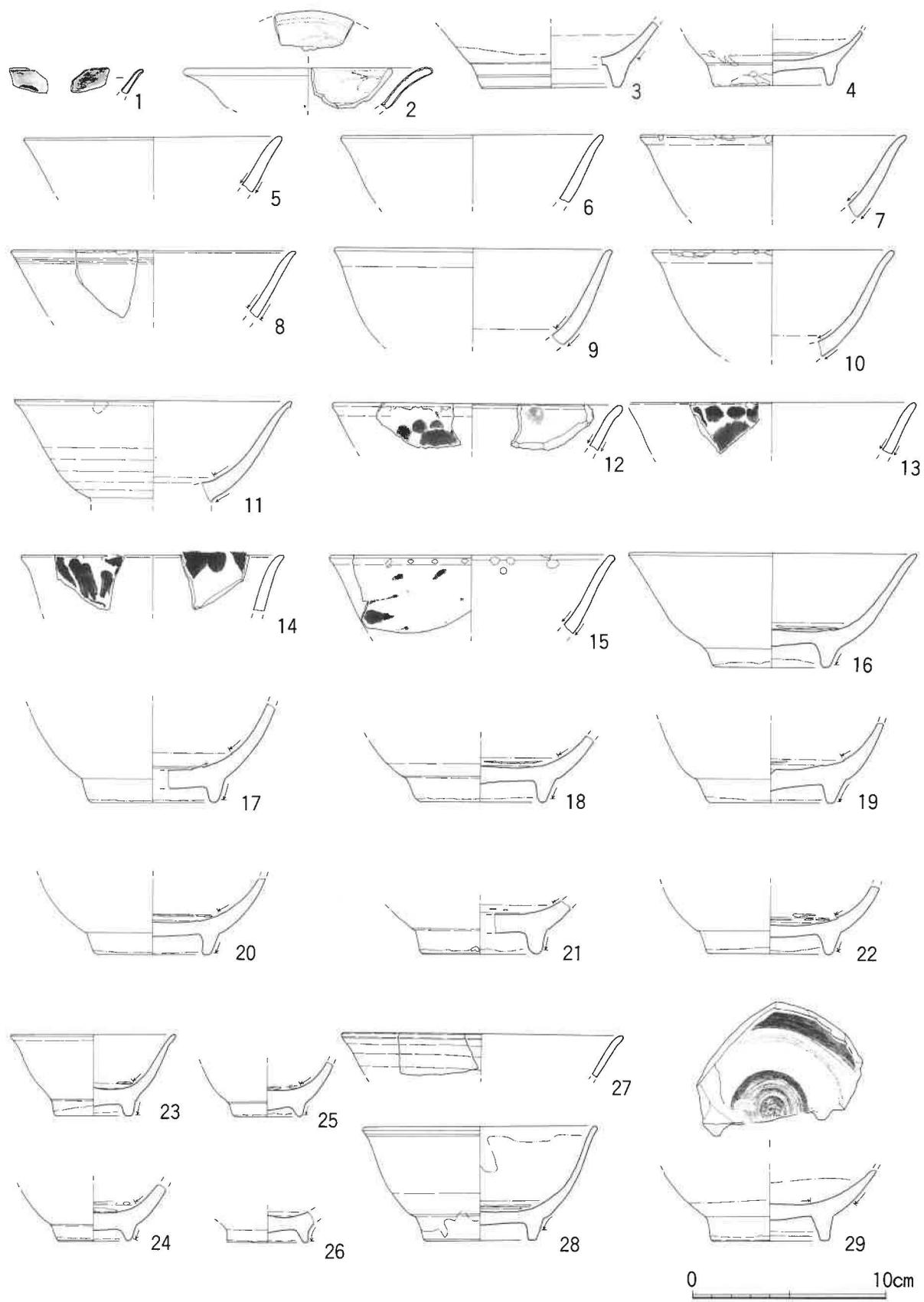
北谷町史編集委員会『北谷町史第3巻資料編2 民俗上』

沖縄県北谷町『北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－』北谷町文化財調査報告書

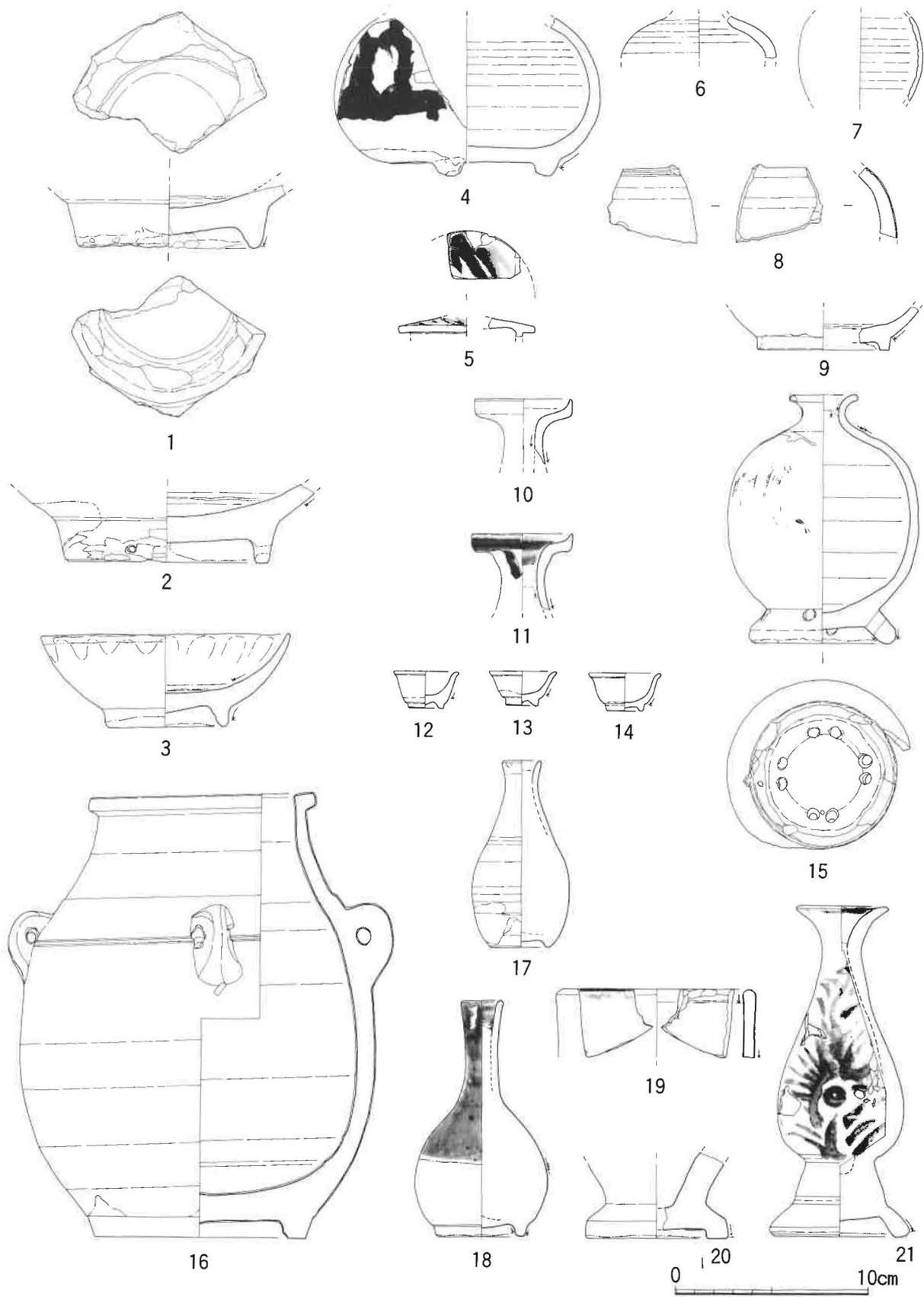
那覇市教育委員会『壺屋古窯群Ⅰ－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査－』

浦添市文化財調査報告書『城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書』

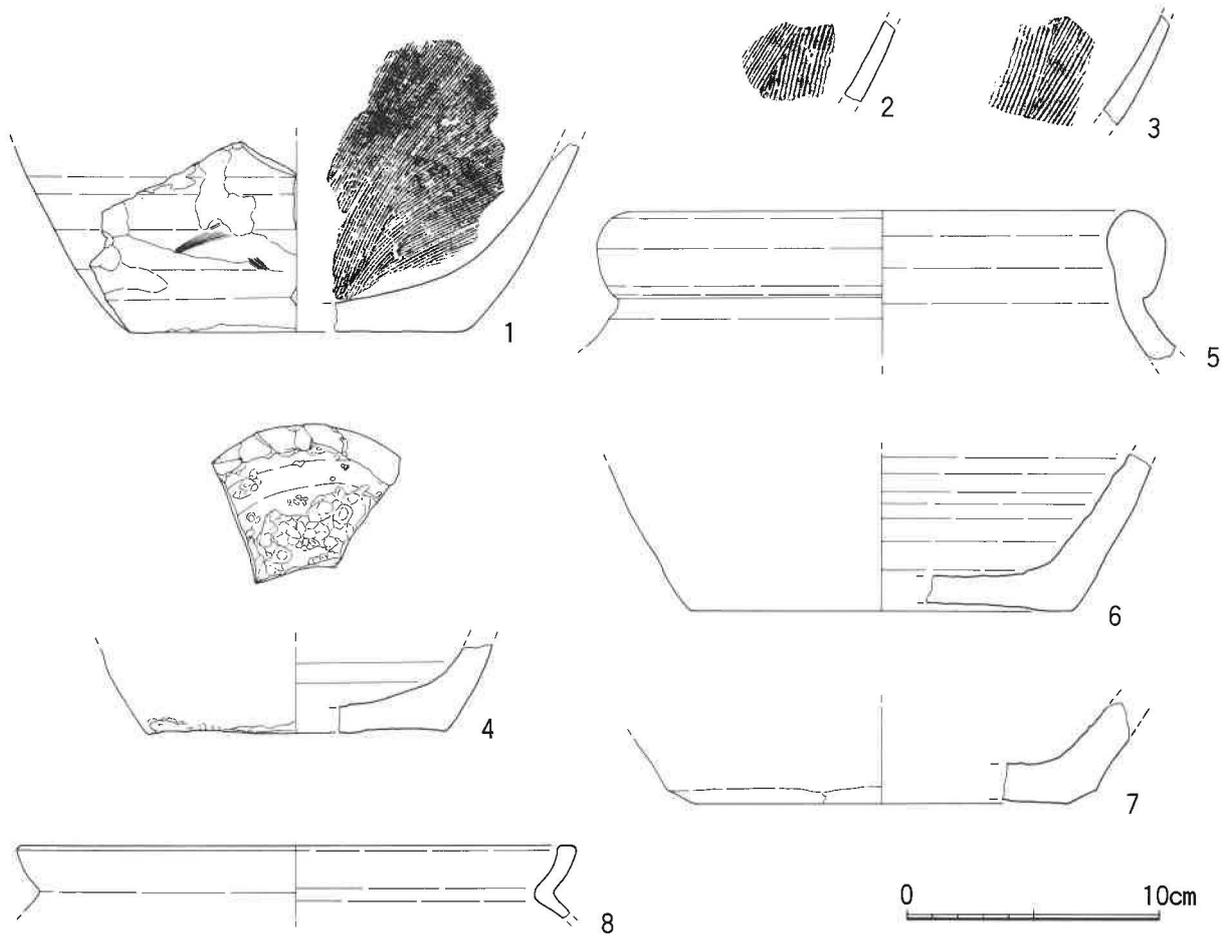
第14集



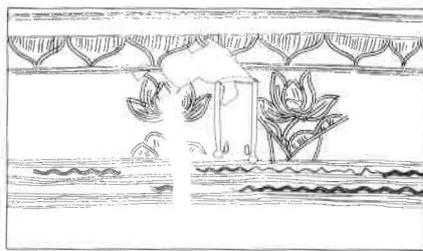
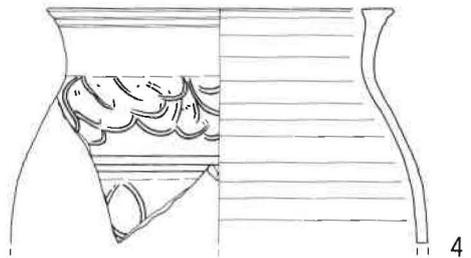
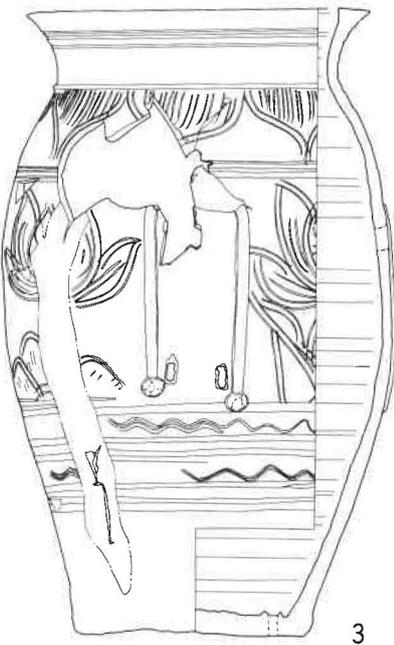
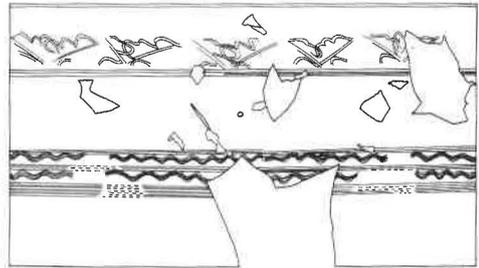
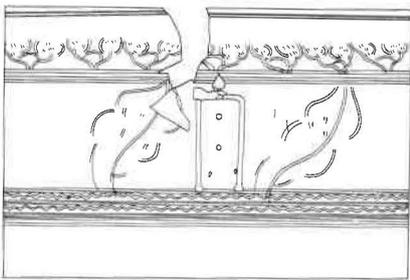
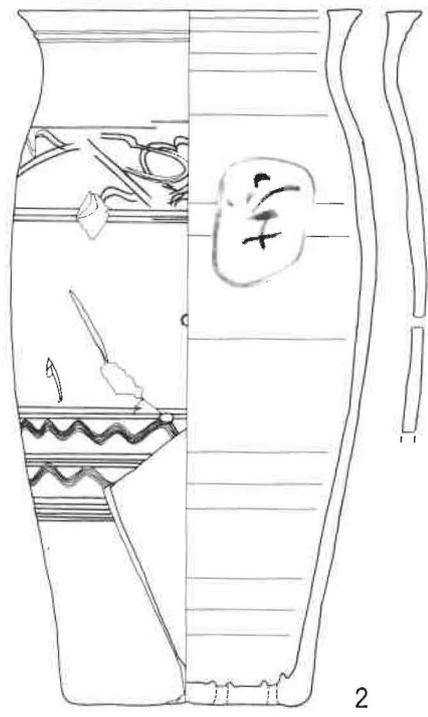
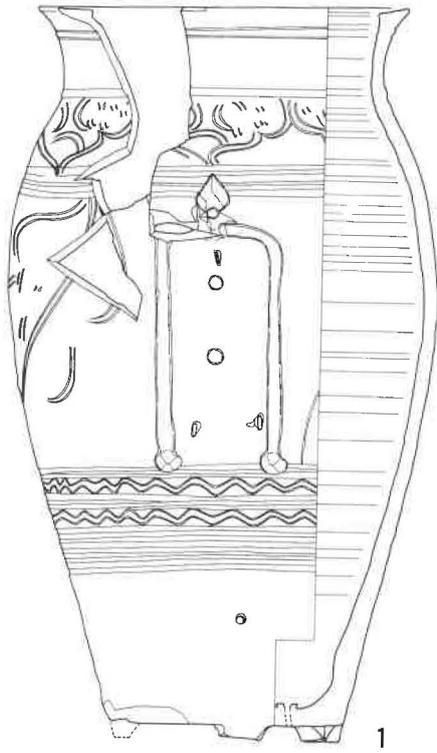
第18图 青磁・染付・陶器



第19图 陶器

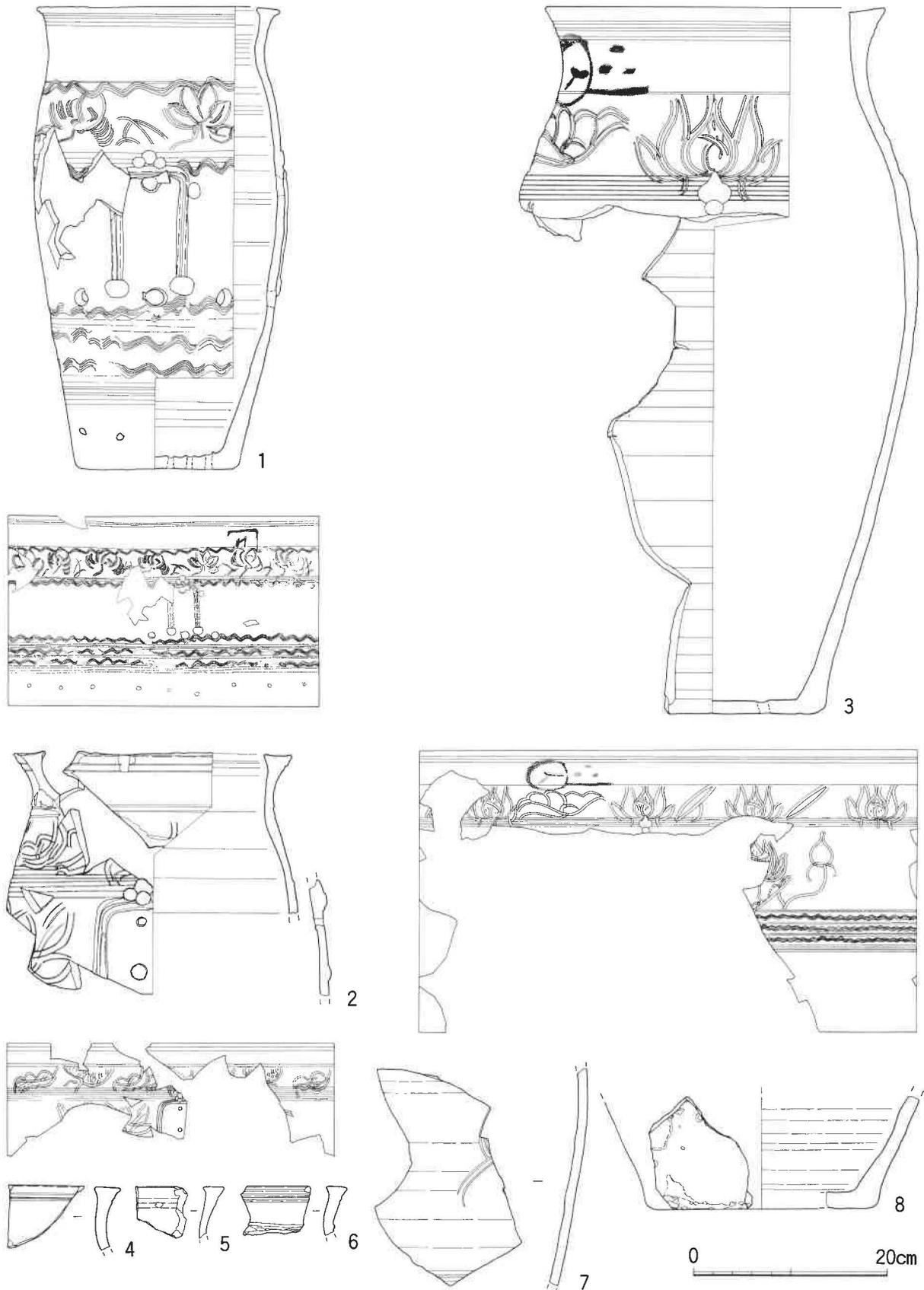


第20图 陶器



0 20cm

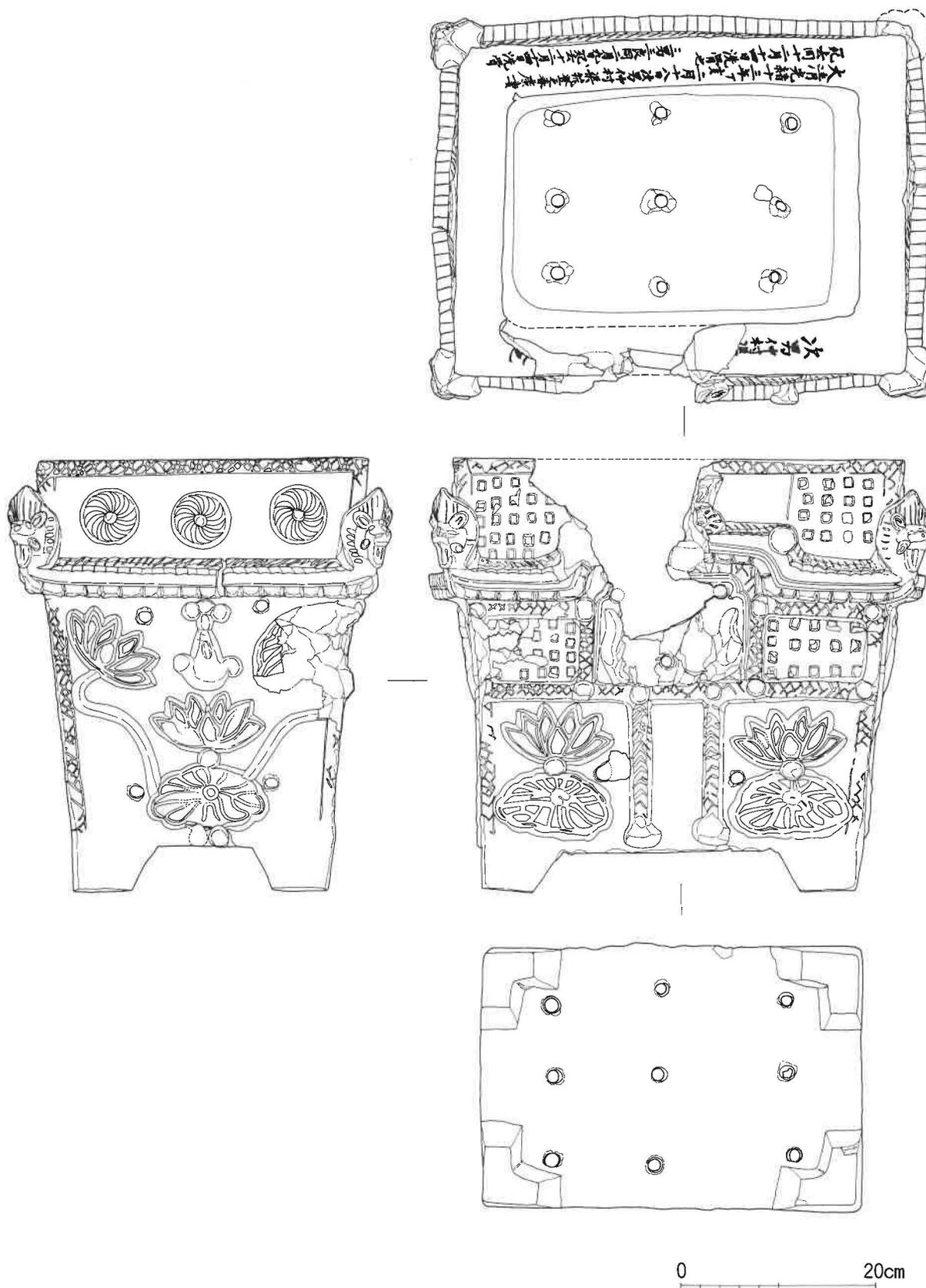
第21图 纳骨器



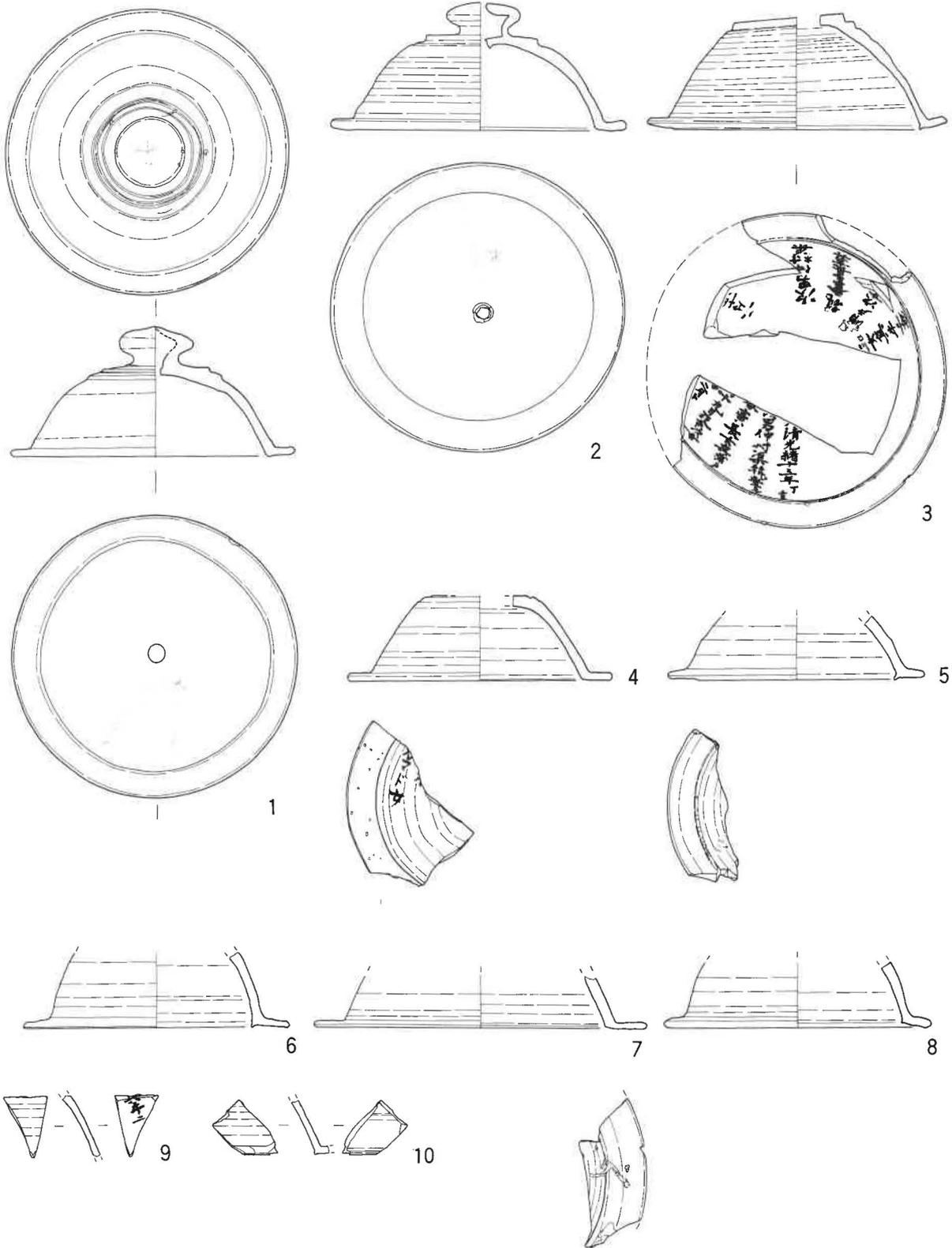
第22図 納骨器



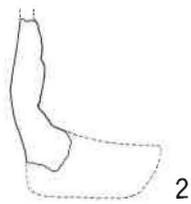
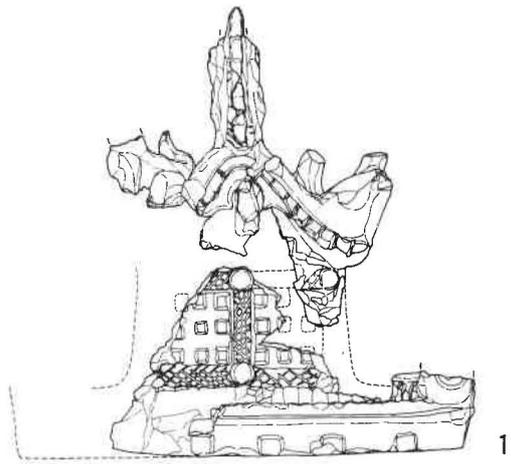
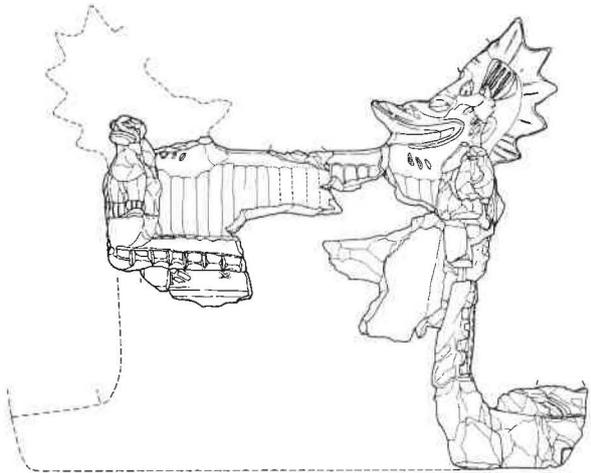
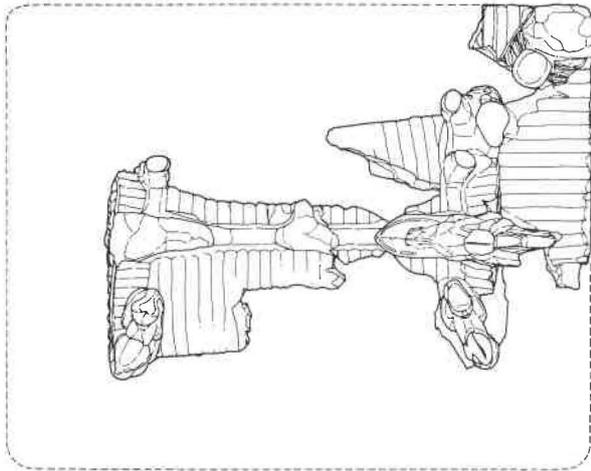
第23図 納骨器



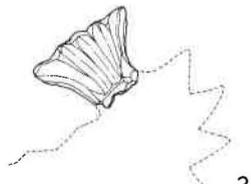
第24図 納骨器



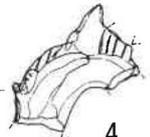
第25図 納骨器



2



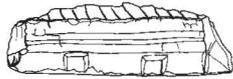
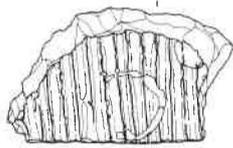
3



4



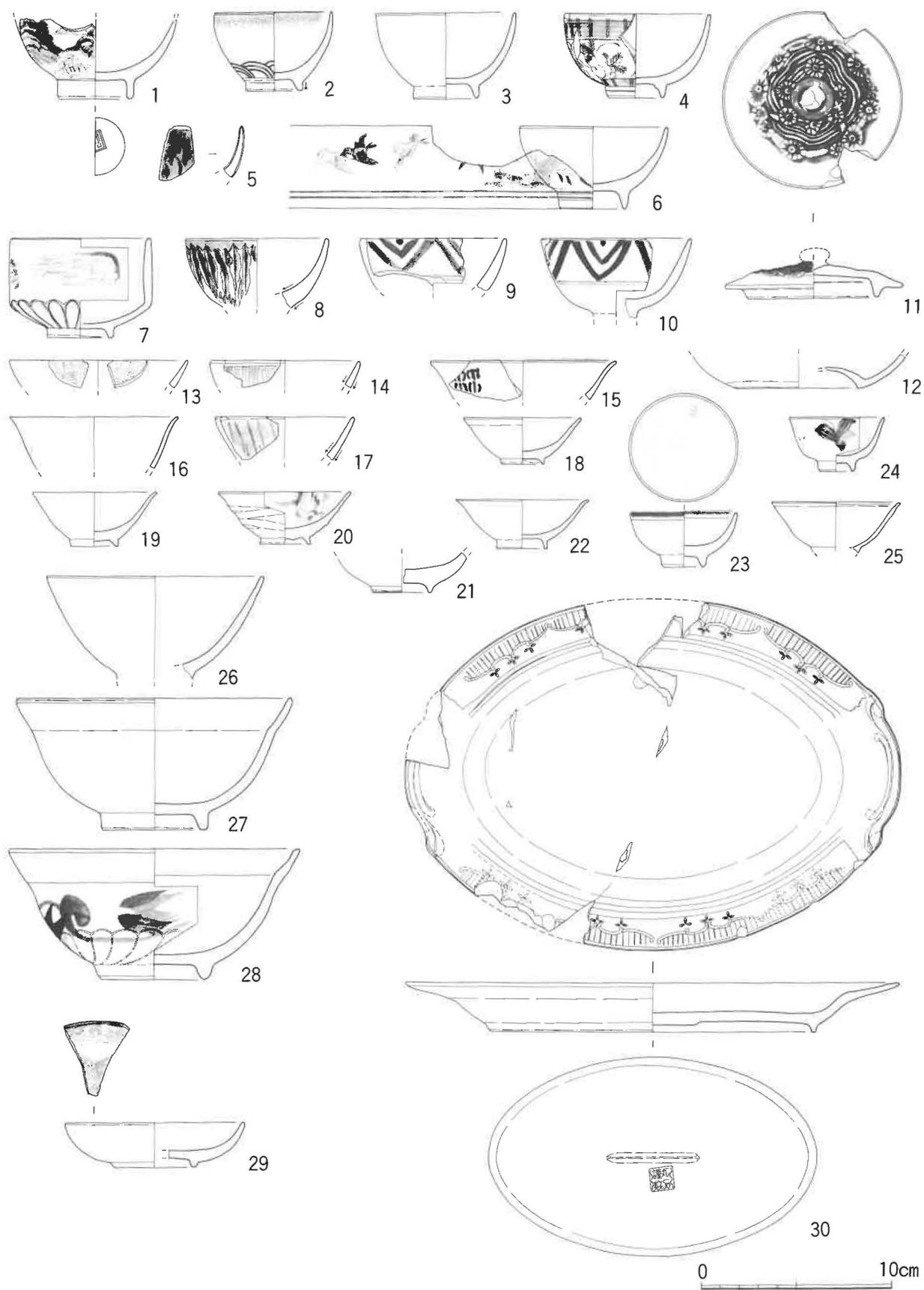
5



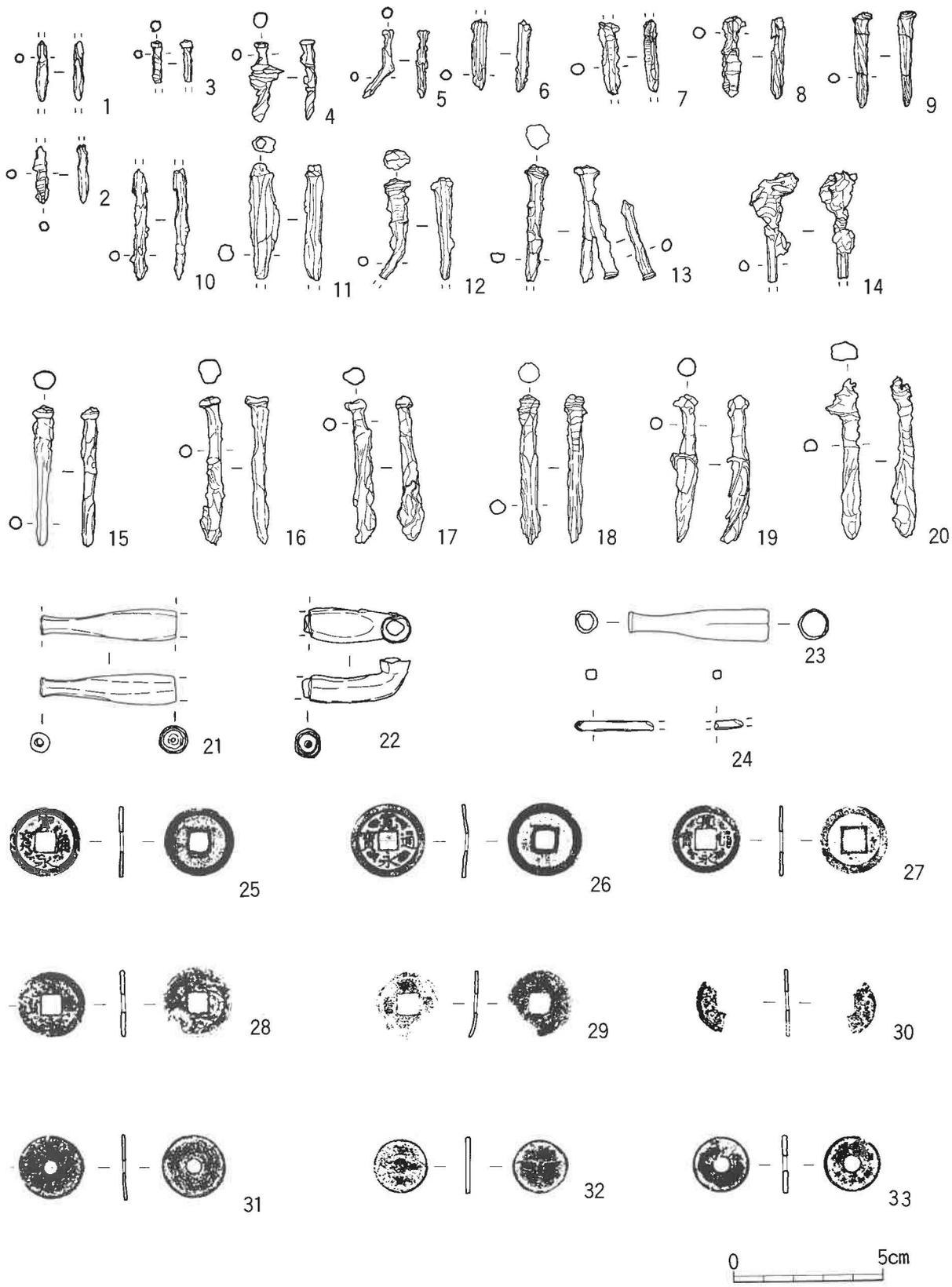
6



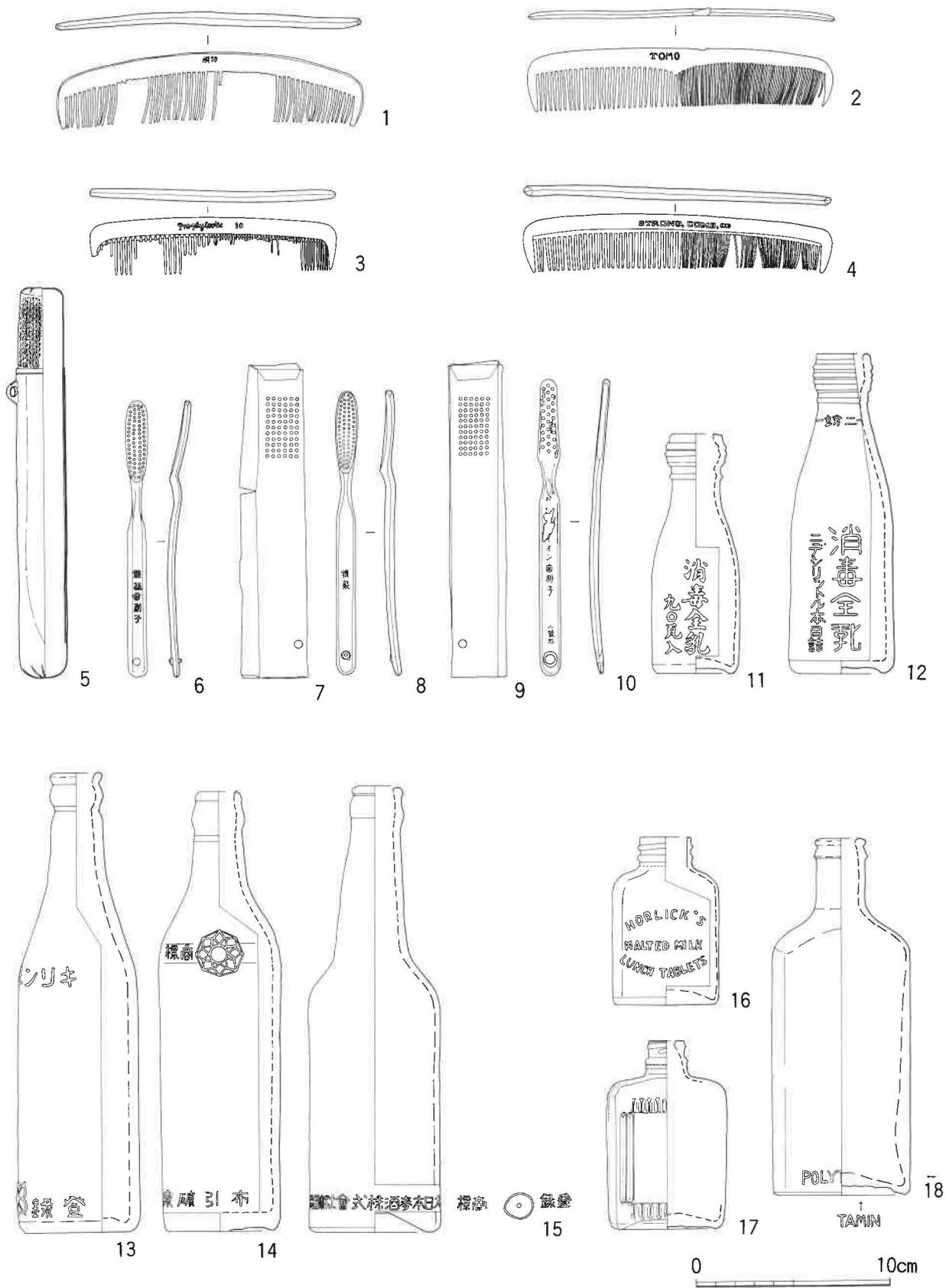
第26図 納骨器



第27図 近代・現代



第28図 金属製品



第29図 近現代製品

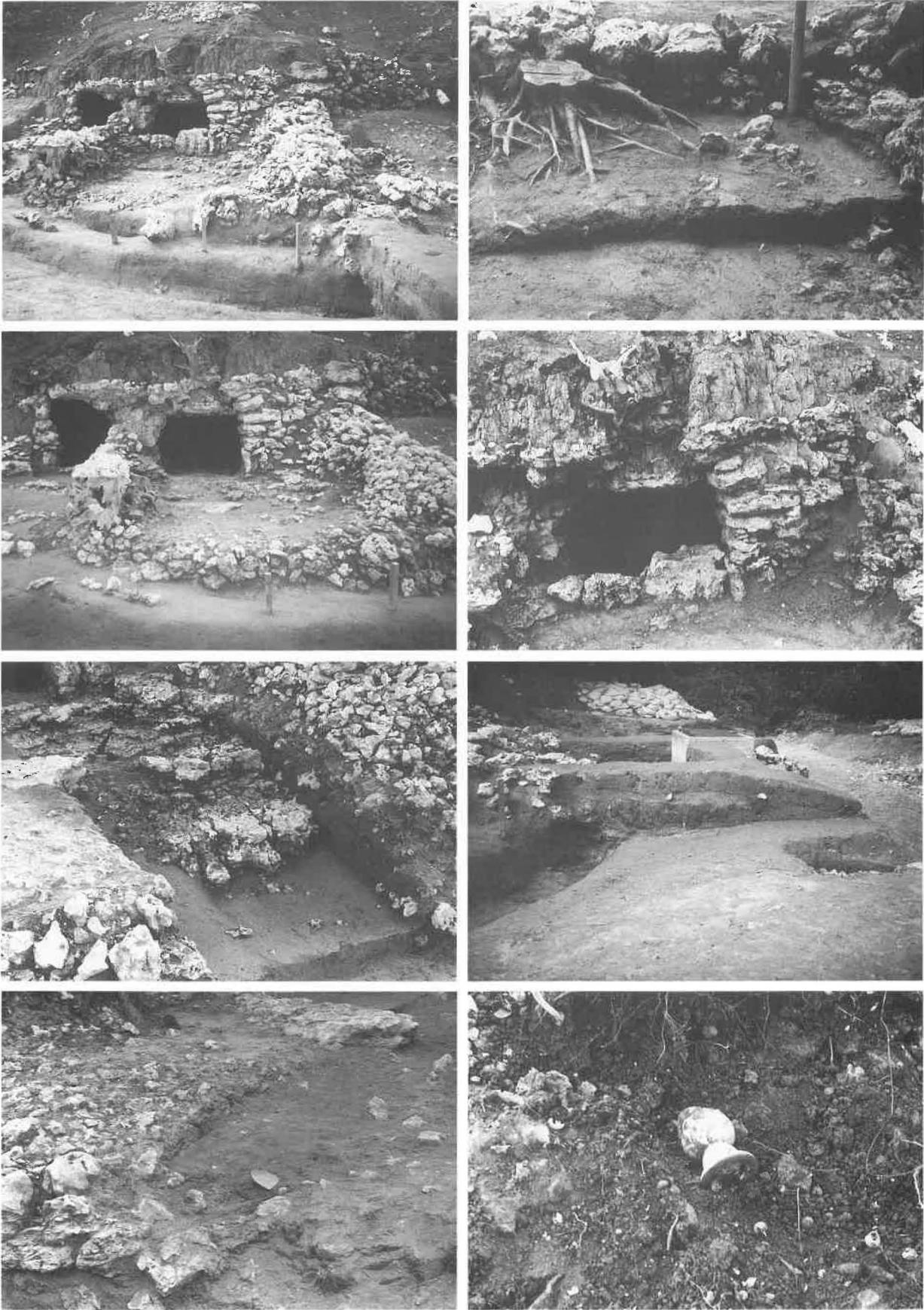
版 圖



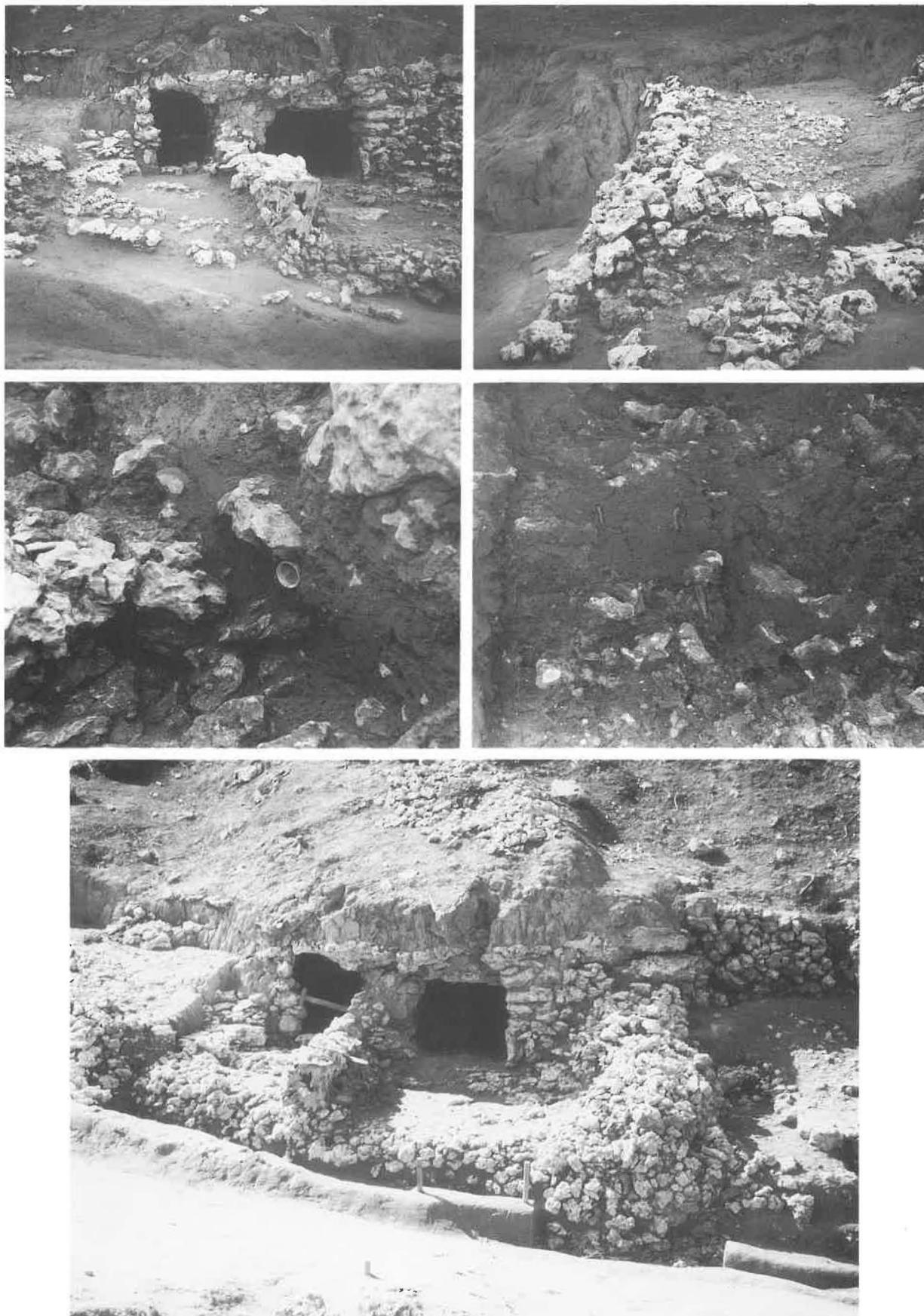
図版1 北地域1号墓 (一段左) 伐採後近景 (一段右) 伐採後遠景
 (二段左) 伐採後近景 (二段右) 伐採後近景
 (三段左) 発掘後 (三段右) 墓面
 (四段左) 墓右側袖垣 (四段右) 墓庭平面



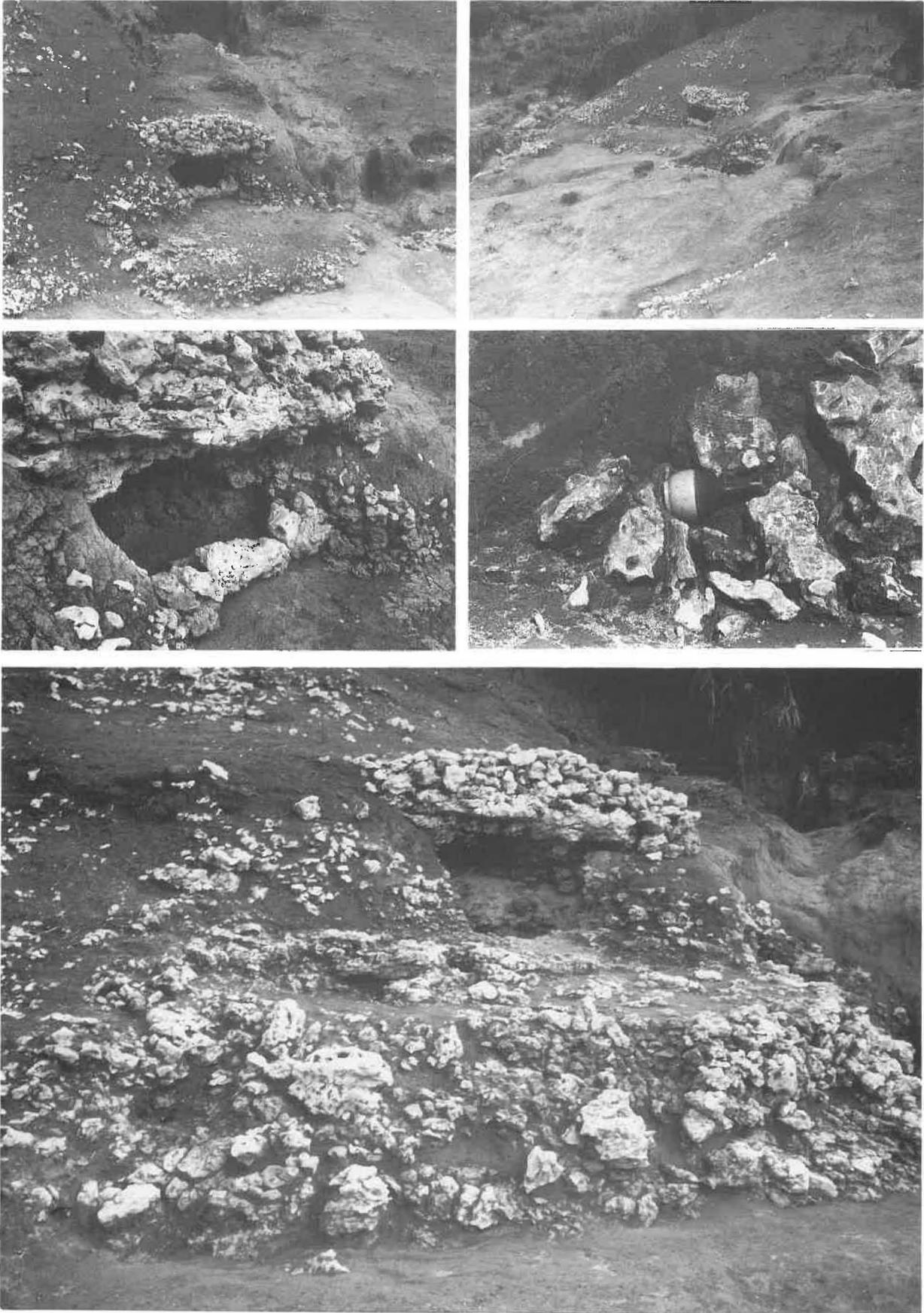
図版2 東地域D地区 (一段左) 伐採前(東北東より) (一段右) 伐採後(北東より)
 (二段左) 1・2・3号墓伐採後遠景(北西より) (二段右) 1・2号墓伐採後近景(北西より)
 (三段左) 1・2号墓露出状況 (三段右) 1・2号墓近景
 (四段左) 3号墓露出状況 (四段右) 3号墓近景



図版3 東地域D地区1号墓 (一段左) 1号墓近景 (一段右) 1号墓庭右侧発掘状況
 (二段左) 1号墓正面 (二段右) 1号墓墓口
 (三段左) 墓庭発掘状況 (三段右) 1号墓右袖畦土層断面
 (四段左) 灰釉碗出土状況 (四段右) 1号墓右侧袖垣検出遺物



図版 4 東地域D地区 2号墓 (一段左) 2号墓正面 (一段右) 2号墓左側 検出土状況
 (二段左) 2号墓袖垣下盃出土状況 (二段右) 2号墓墓庭キセル・簀 出土状況
 (三 段) 1・2号墓検出土状況



図版5 東地域D地区3号墓 (一段左) 3号墓近景(北より) (一段右) 3号墓遠景
 (二段左) 3号墓墓口 (二段右) 3号墓左前庭部遺物出土状況
 (三段) 完掘状況



図版6 東地域D地区1・2号墓 (上) 1号墓 墓庭半截状況
(下) 2号墓 完掘状況



図版7 西地域 (一段左) 遠景(西より) (一段右) 遠景(南東より)
 (二段左) 遠景(南より) (二段右) 4号墓付近遠景(南西より)
 (三段左) 1・2号墓荒掘後 (三段右) 3号墓伐採後
 (四段左) 4号墓荒掘後 (四段右) 5号墓荒掘後



図版 8 西地域 1 号墓 (一段左) 伐採前近景
 (二段左) 検出状況
 (三段左) 墓室
 (四段左) 発掘状況(南西より)

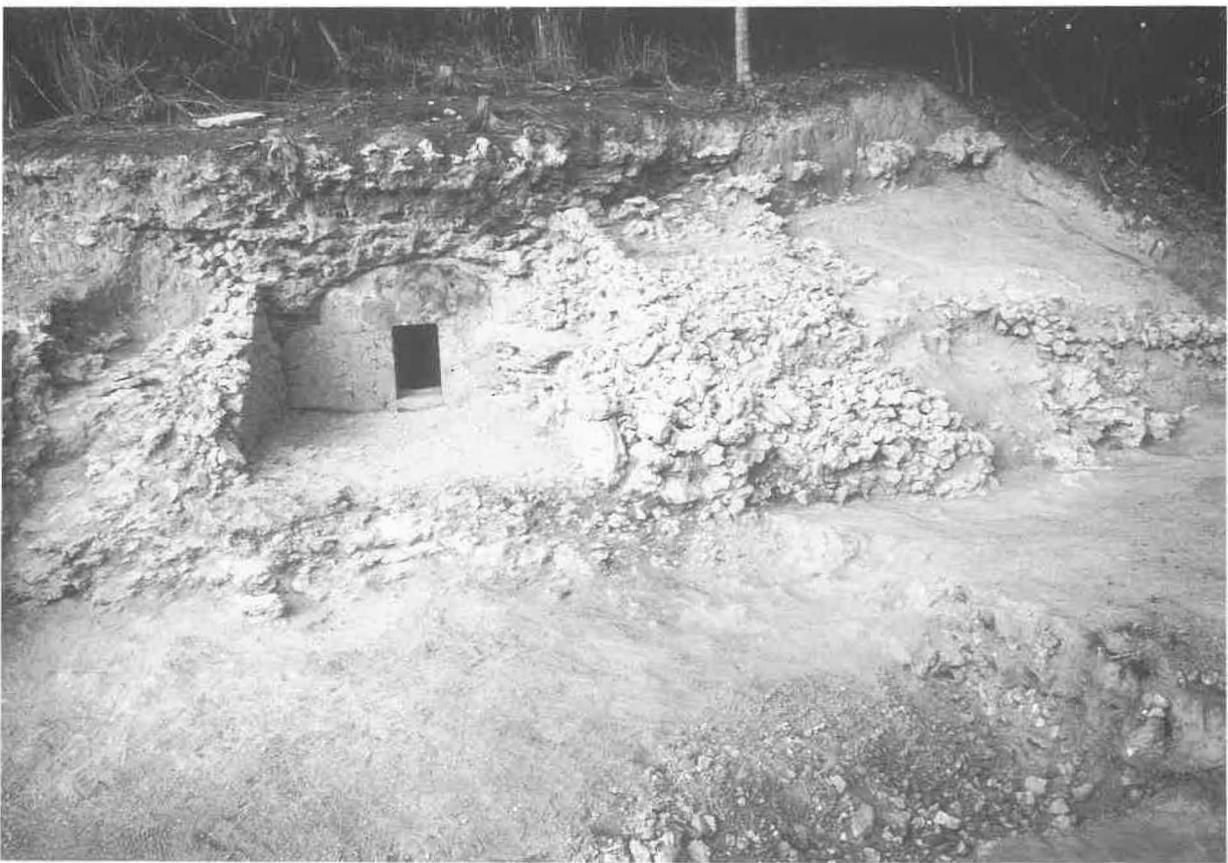
(一段右) 荒堀後遠景
 (二段右) 墓正面
 (三段右) 墓室内厨子甕出土状況
 (四段右) 発掘状況(南より)



図版9 西地域2号墓 (一段左) 荒掘後 (一段右) 墓口正面
(二段左) 袖墓墓口 (二段左) 袖墓
(三段) 墓正面 (南西より)



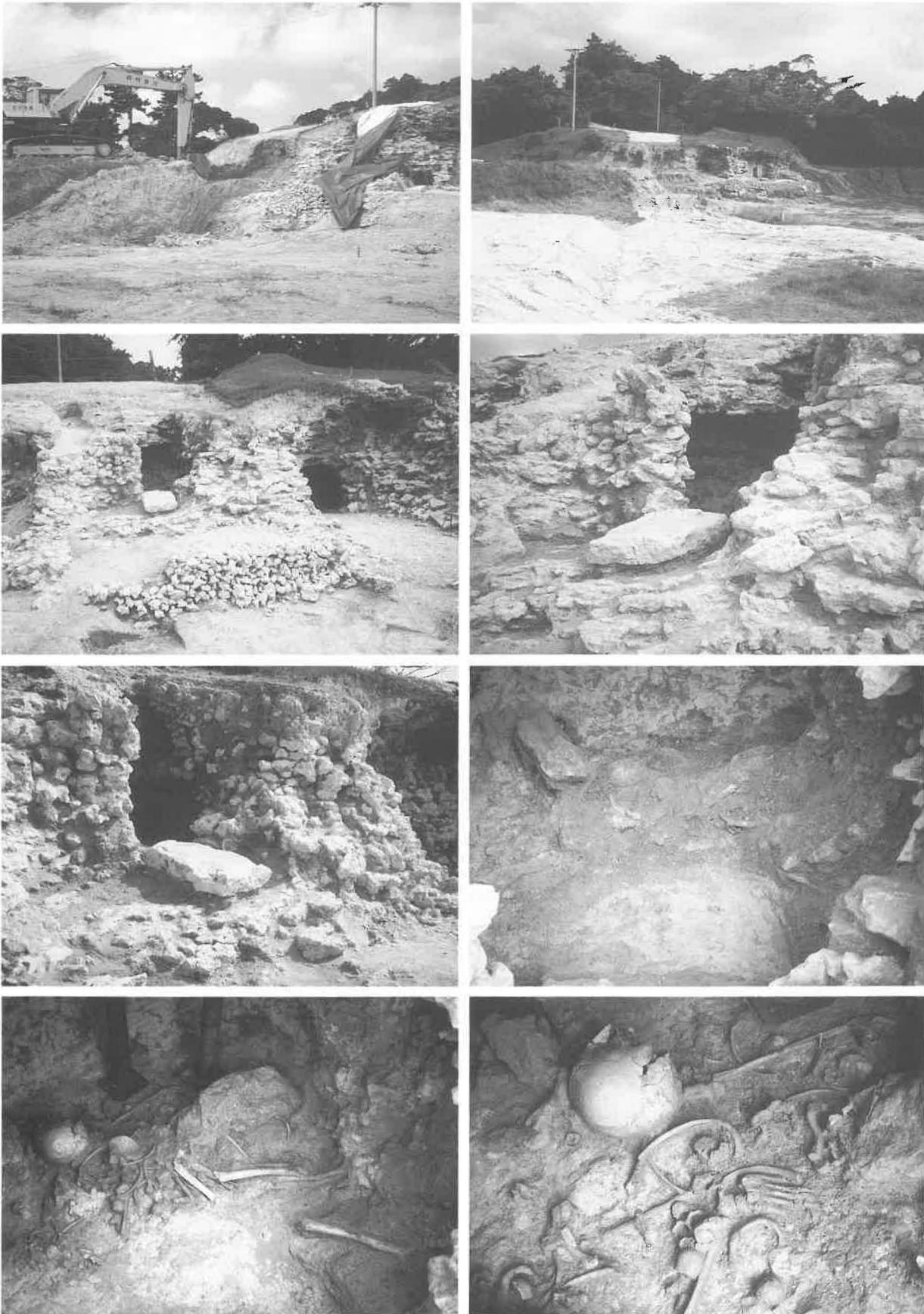
図版10 西地域3号墓 (一段左) 伐採状況 (一段右) 伐採後
 (二段左) 正面 (二段右) 墓面
 (三段左) 墓室内検出状況 (三段右) 墓面(南より)
 (四段左) 墓面(右)内側 (四段右) 墓面(左)内側



図版11 西地域4号墓 (一段左) 伐採前遠景 (一段右) 荒掘後
(二段左) 近景(東より) (二段右) 遠景(南東より)
(三段) 墓正面(南西より)



図版12 西地域5号墓 (一段左) 伐採前 (一段右) 荒掘後(南東より)
 (二段左) 荒掘後(南西より) (二段右) 遠景(南東より)
 (三段左) 発掘後(南東より) (三段右) 石列部分
 (四段左) 完掘後(正面)



図版13 西地域6号墓 (一段左) 6号墓遠景(南東) (一段右) 6号墓遠景(南西より)
 (二段左) 6号正面 (二段右) 6号墓墓口(東より)
 (三段左) 6号墓口(西より) (三段右) 6号墓墓室内被葬者
 (四段左) 墓室内被葬者検出状況 (四段右) 古銭・鉄釘・検出状況



図版14 亀冢墓 (一段左) 発掘前 (一段右) 発掘状況
 (二段左) 墓室奥壁 (二段右) 奥壁改築終了月日墨書
 (三段左) 発掘後近景 (三段右) 発掘後遠景
 (四段左) 墓庭・外門 (四段右) 中門・外門



図版15 亀甲墓 上 近景
下 墓庭・外門

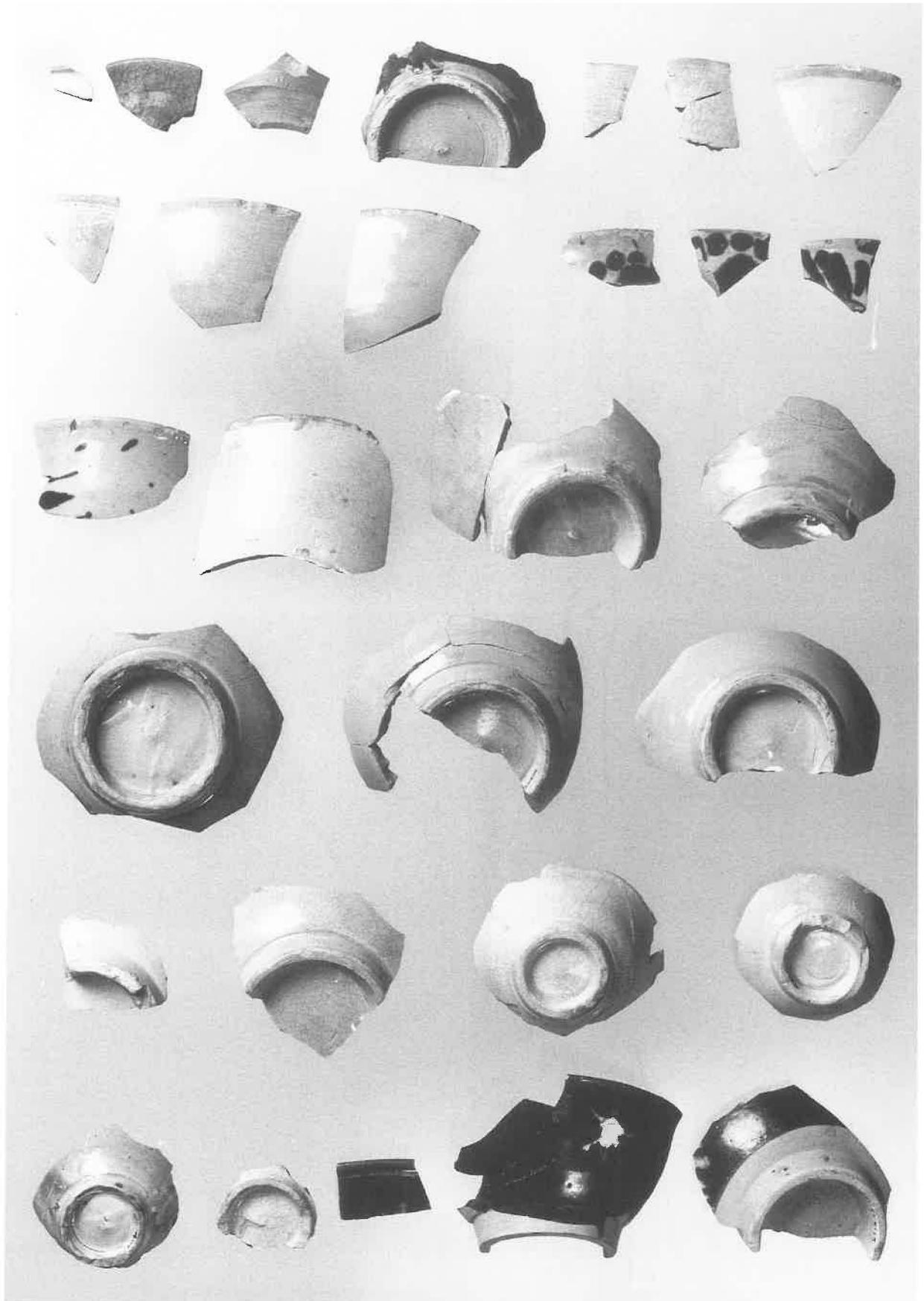


図版16 亀甲墓 (一段左) 漆喰除去後 (一段右) 石積解体作業状況
 (二段左) 袖垣石材番号付け (二段右) 袖垣石材除去裏込
 (三段左) サンミディ一部石材検出 (三段右) 袖石材解体
 (四段左) 屋根部断面 (四段右) 眉部解体

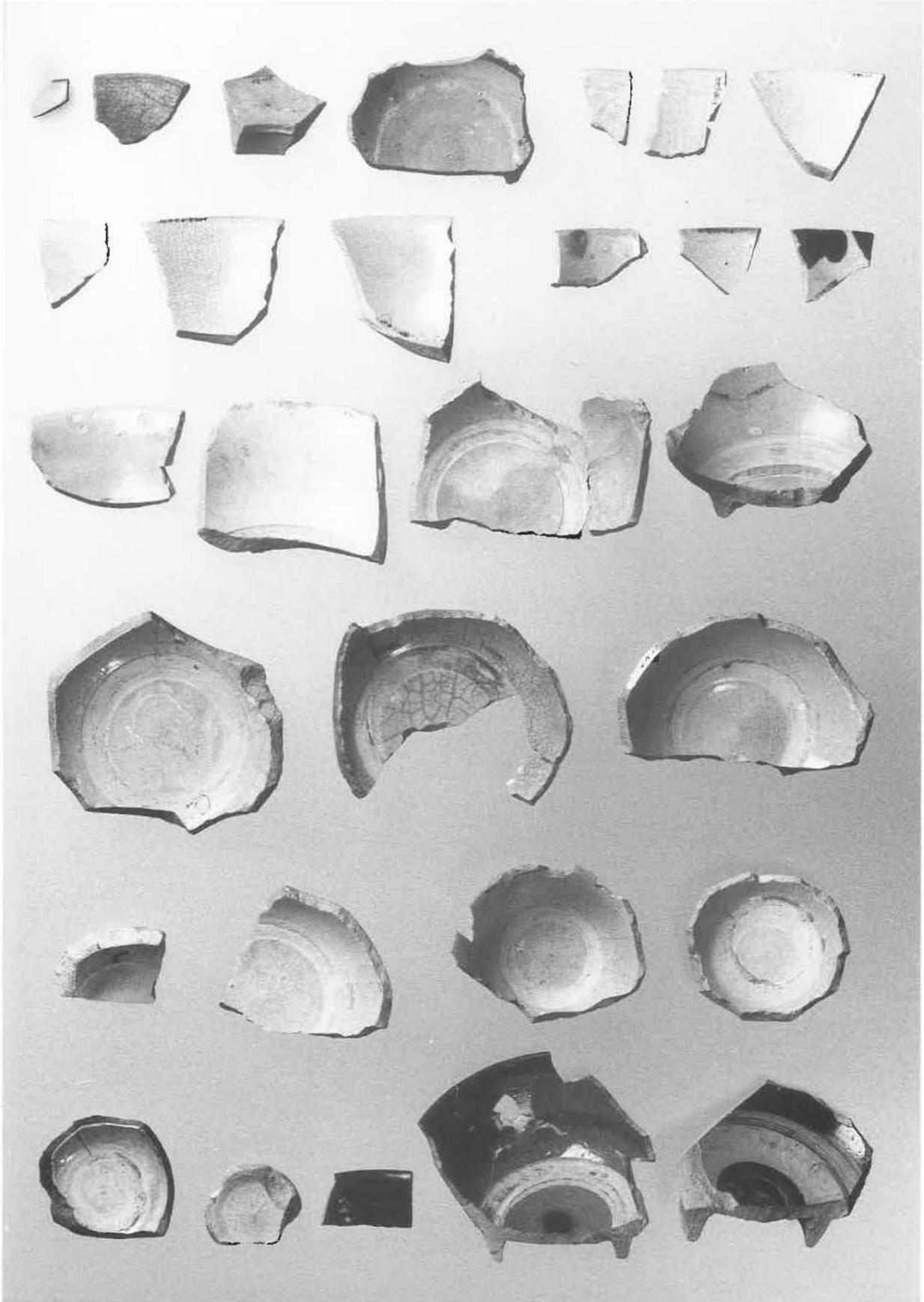


図版17 亀甲墓 (一段左) 墓室検出状況
 (二段左) 墓室天井解体
 (三段左) 墓室(棚を残す)
 (四段左) 墓室(岩盤検出状況)

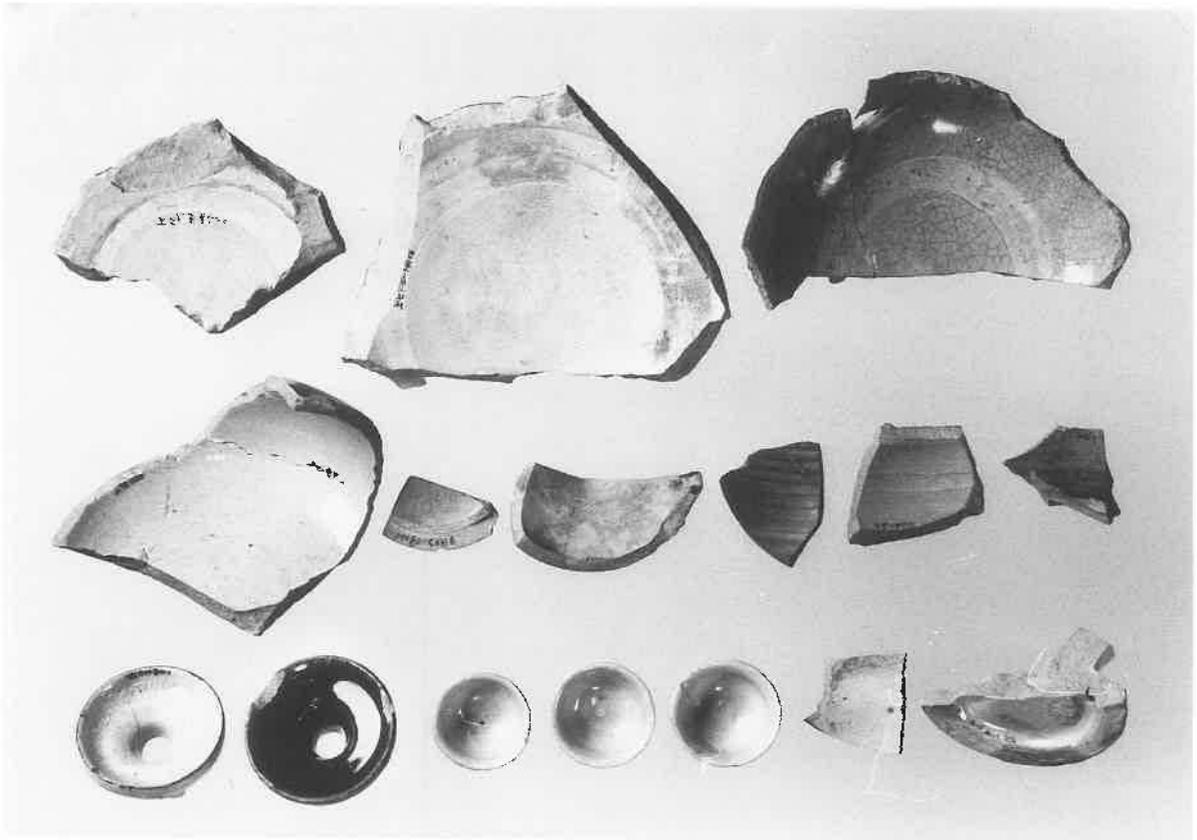
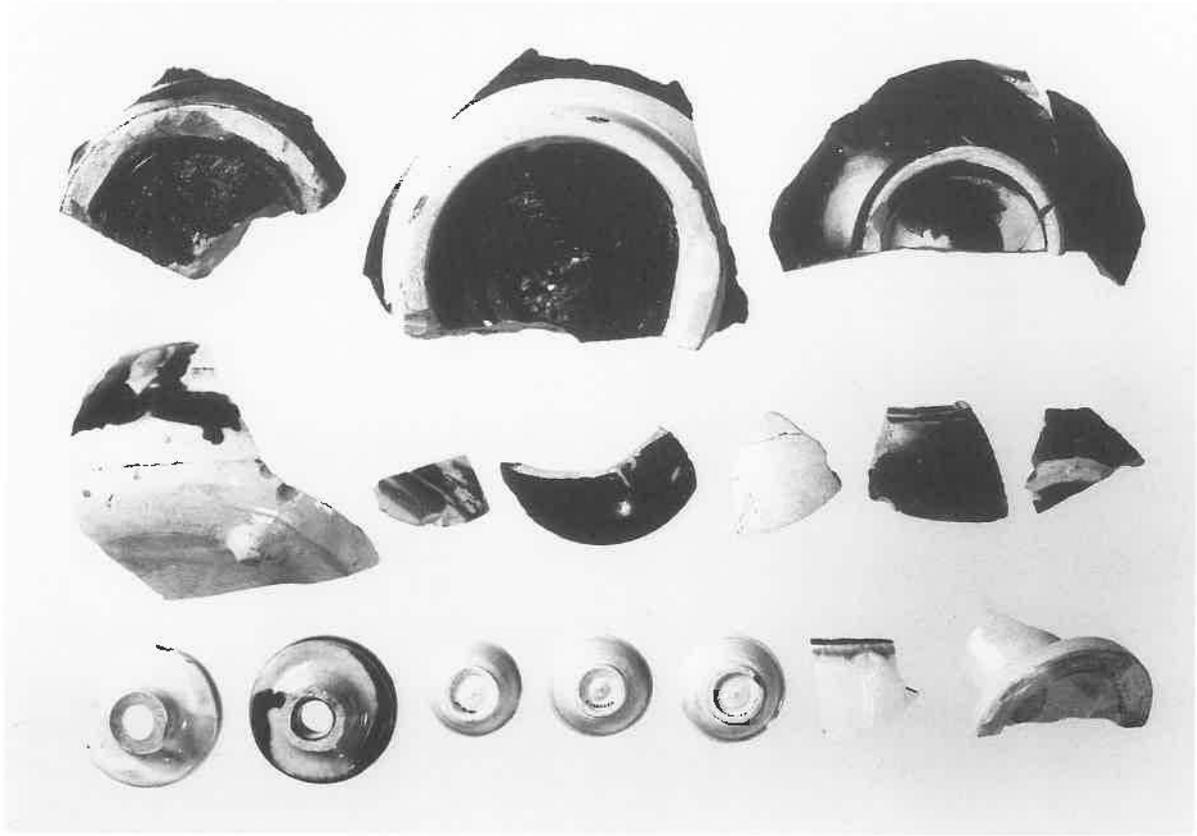
(一段右) 墓面石材除去後
 (二段右) 墓室(墓口を残す)
 (三段右) 墓室石材除去後
 (四段右) ウライジョー一部横断面



图版18 青磁 染付 陶器外面
86



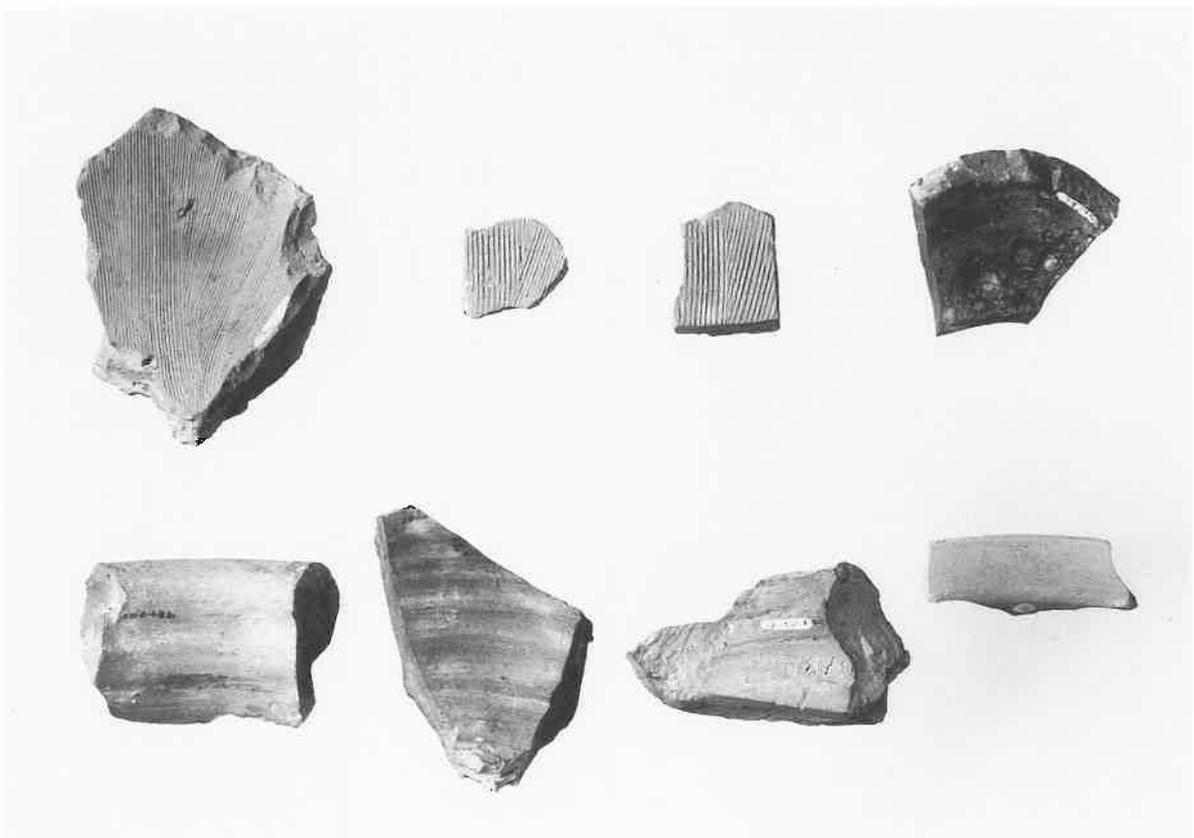
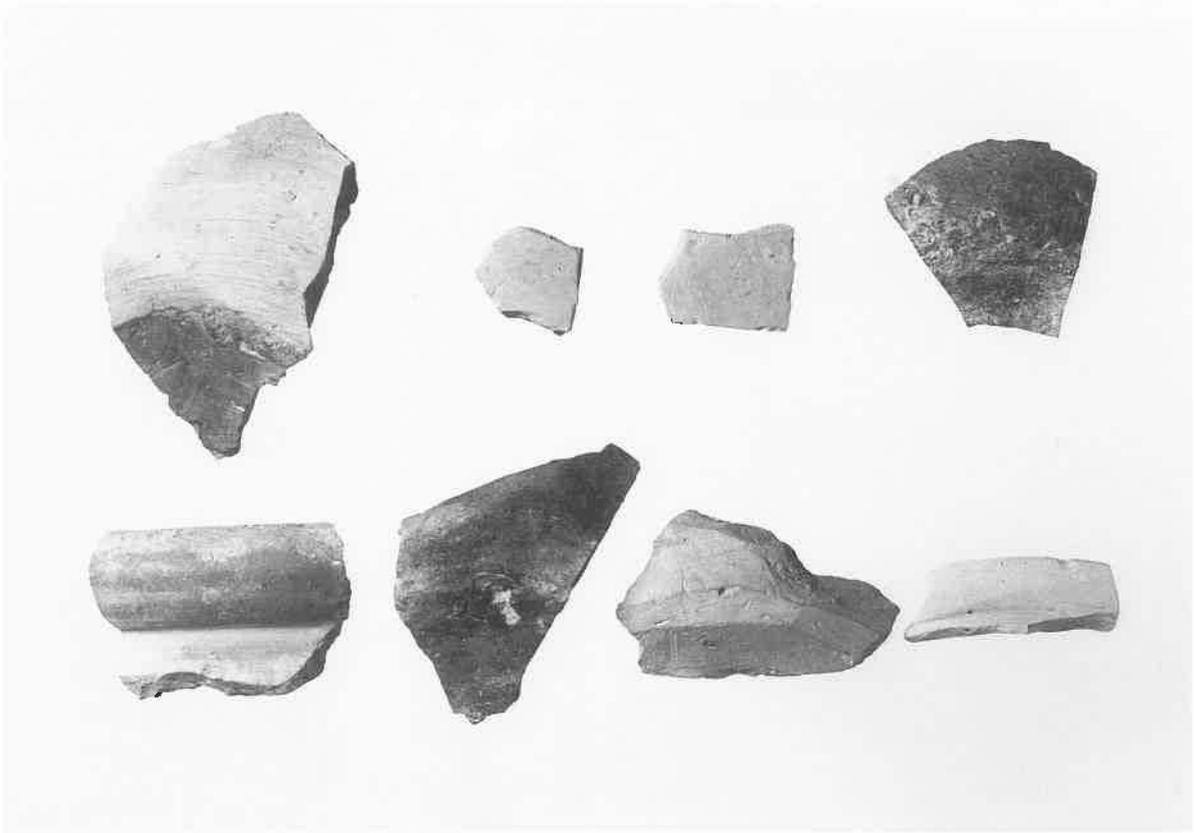
图版19 青磁染付陶器内面



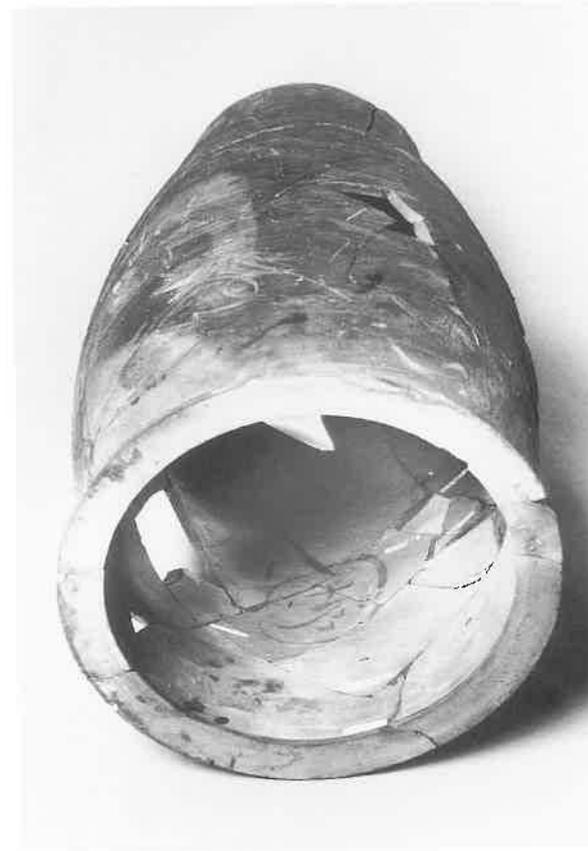
図版20 陶器 外面・内面



図版21 陶器（花瓶・壺・甕）



图版22 陶器 外面·内面



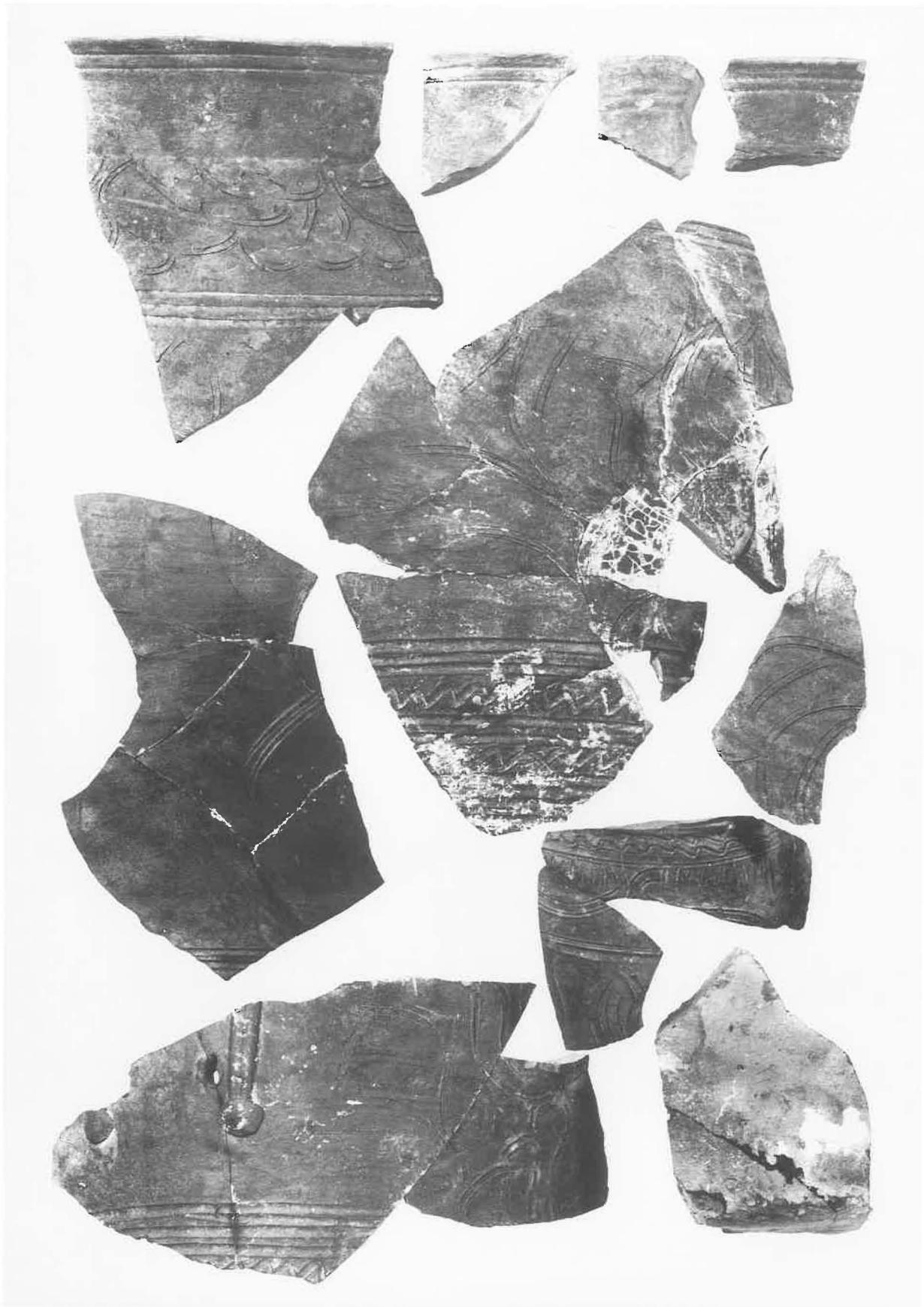
图版23 纳骨器（甕型厨子甕）



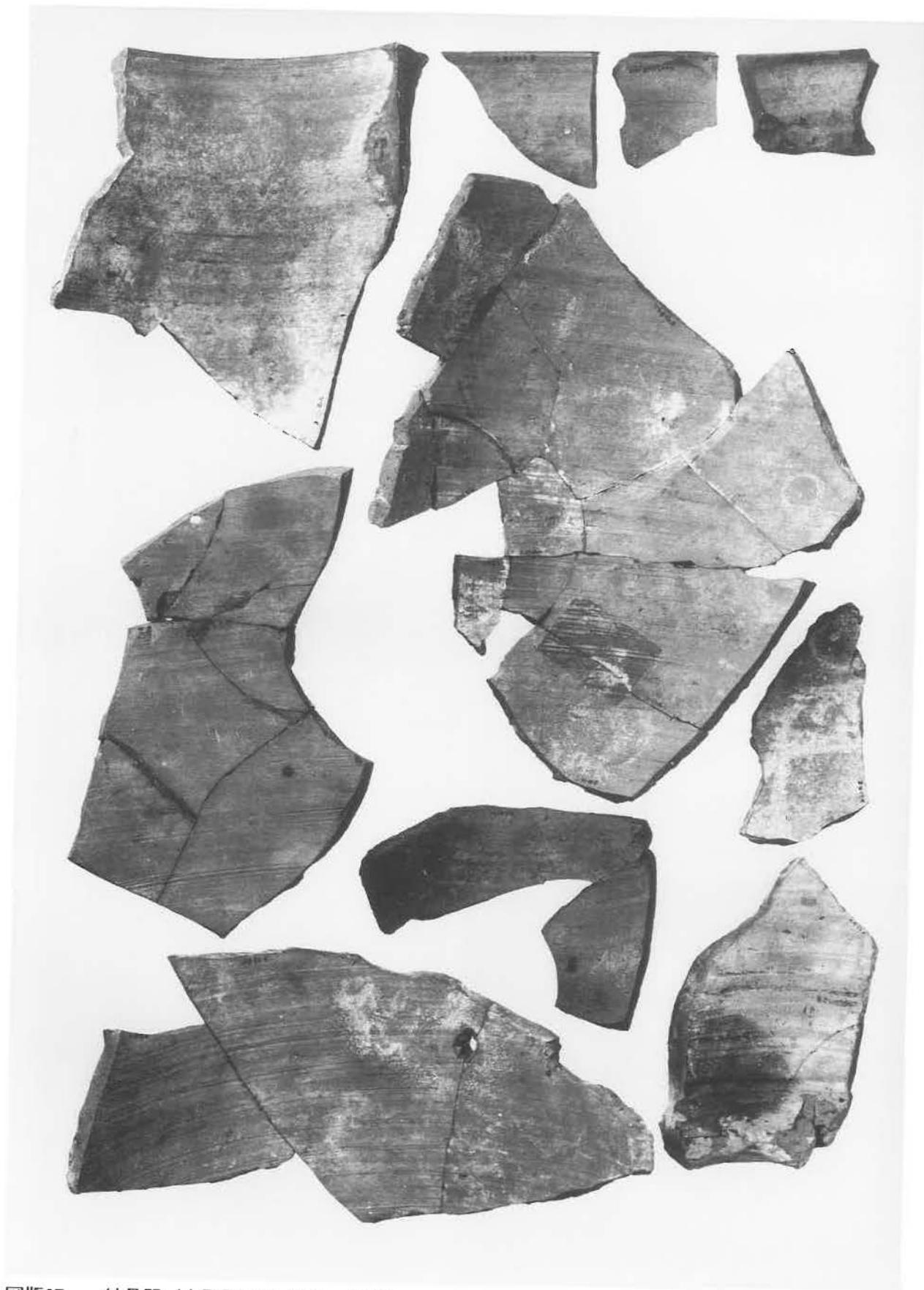
图版24 纳骨器（甕型厨子甕）



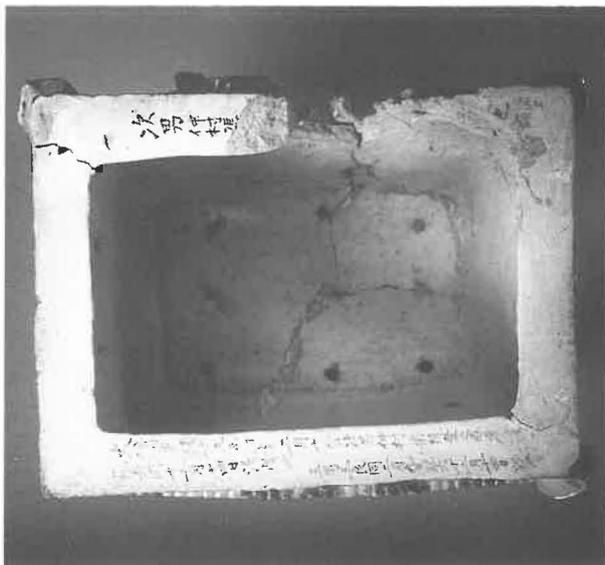
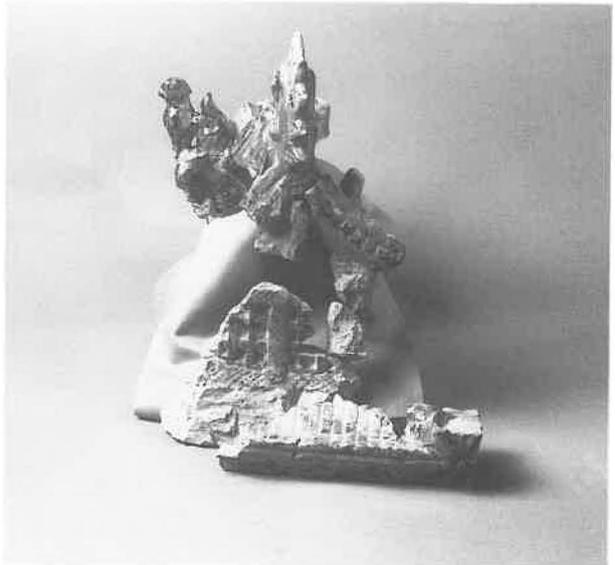
図版25 納骨器 (左上) (右上) (左中) 甕型厨子甕
(右中) 御殿型厨子甕
(左下) 御殿型厨子甕 正面 (右下) 側面



图版26 纳骨器（甕型厨子甕 破片 外面）



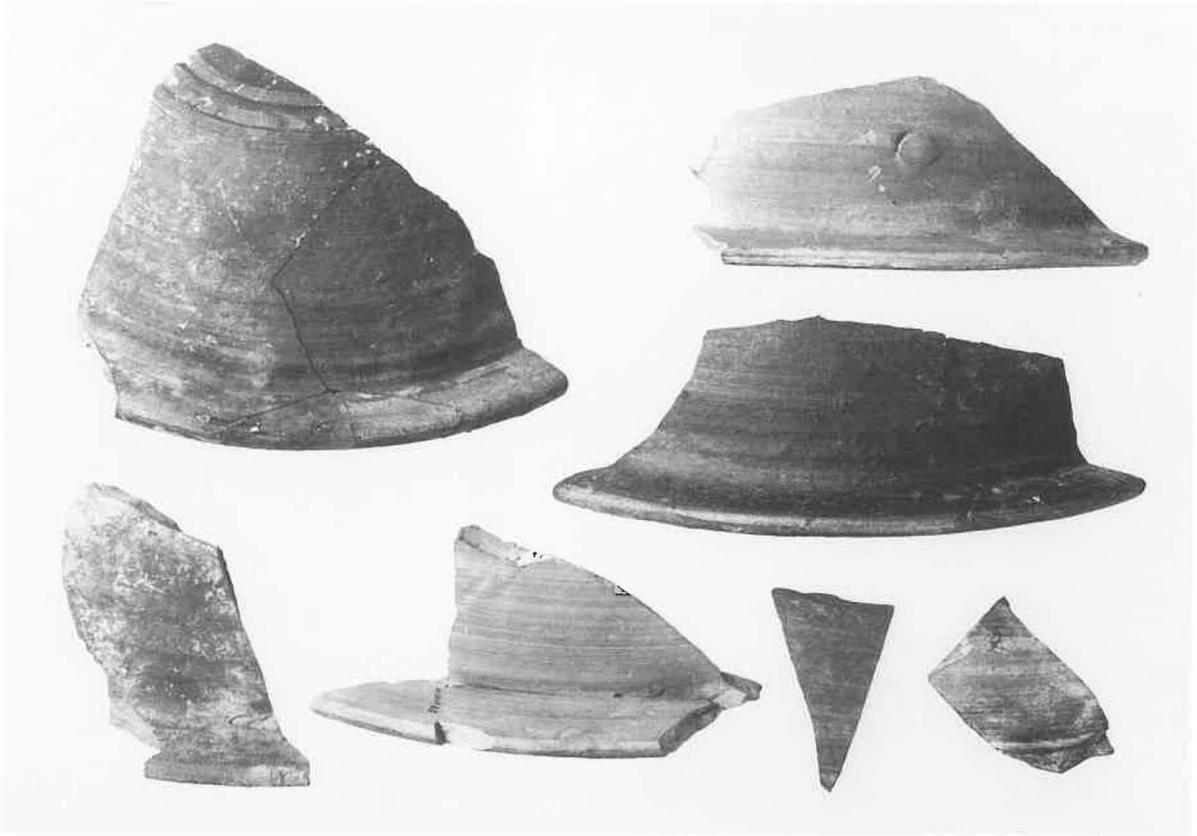
图版27 纳骨器（甕型厨子甕 破片 内面）



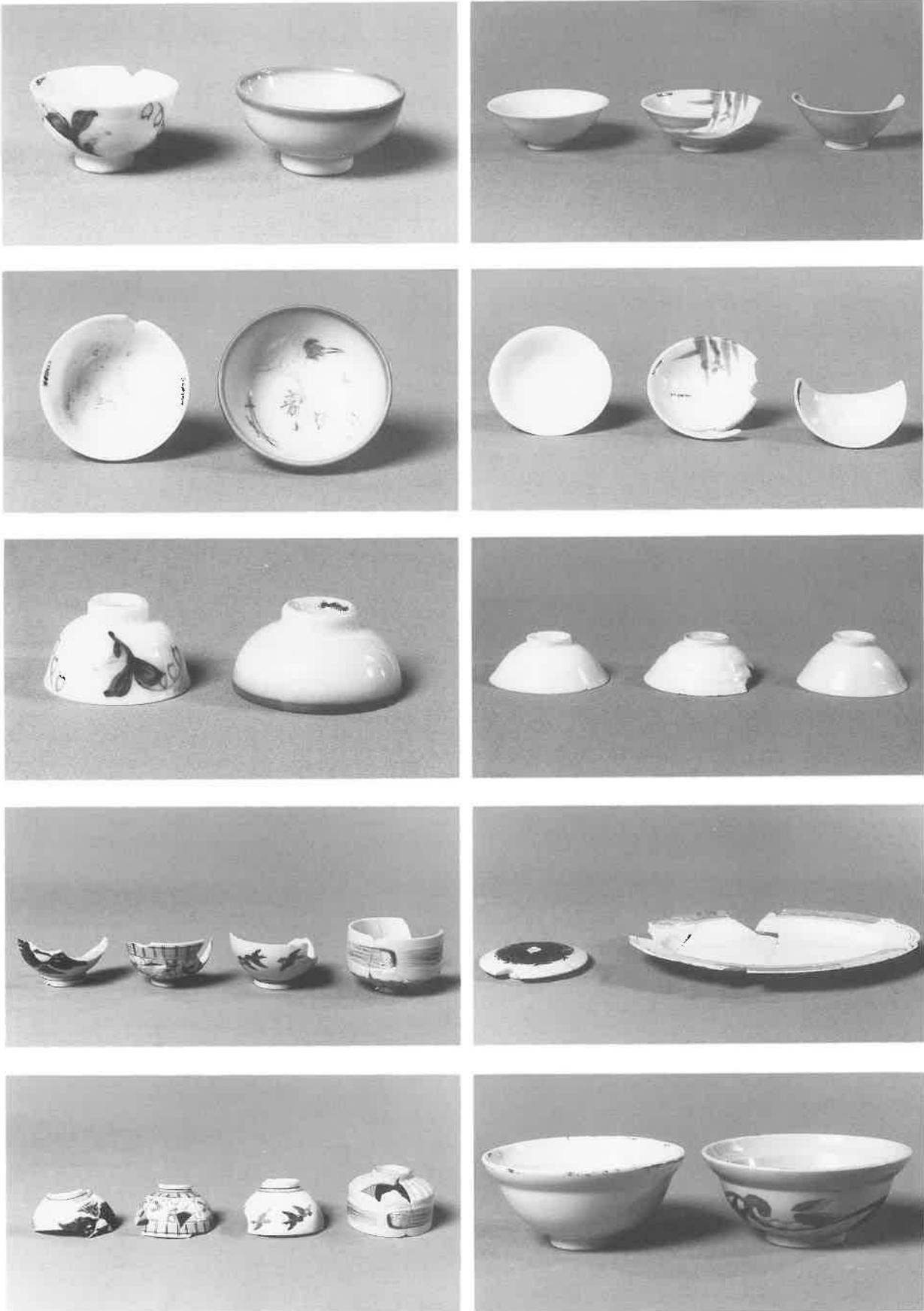
図版28 納骨器 (左上) 御殿型厨子甕 蓋 正面 (右上) 御殿型厨子甕 蓋 側面
 (左中) 御殿型厨子甕 正面 (右中) 御殿型厨子甕 側面
 (左下) 御殿型厨子甕 上面



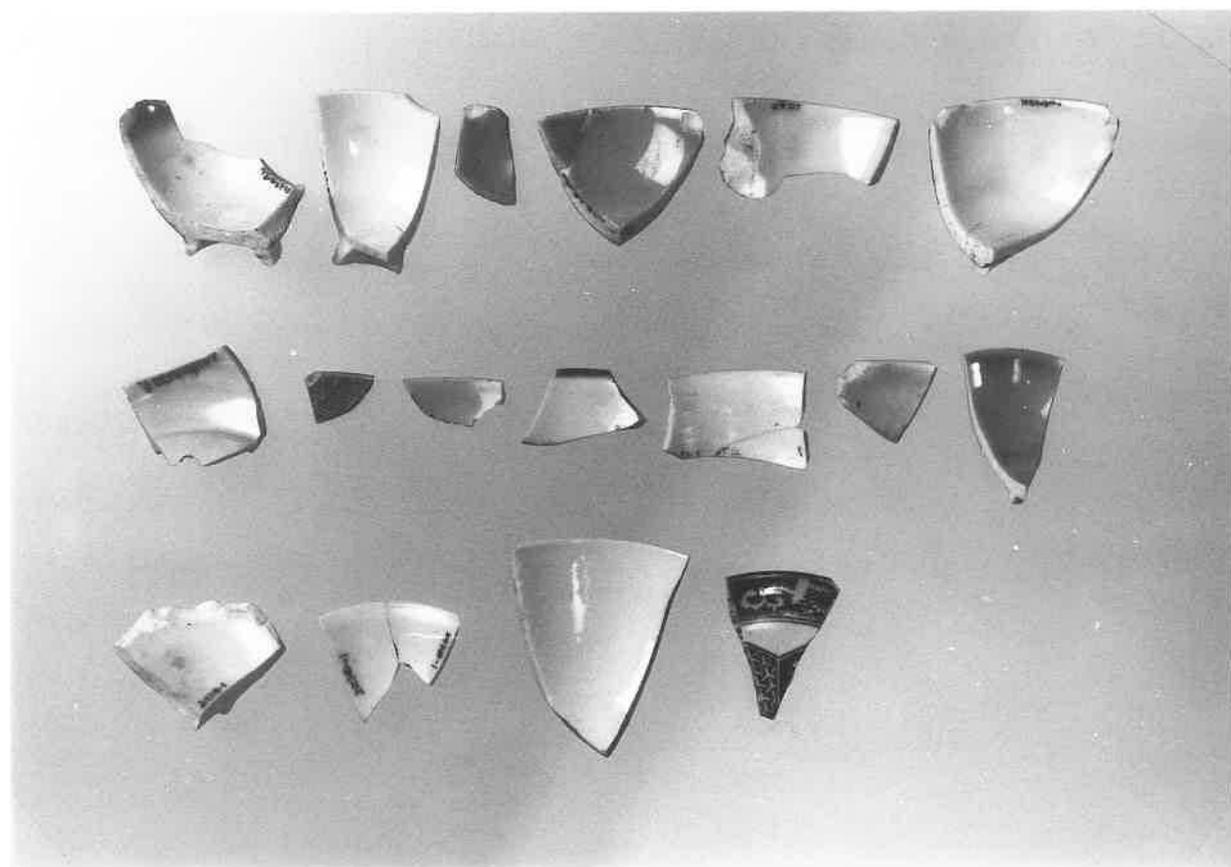
图版29 甗型厨子甗 盖



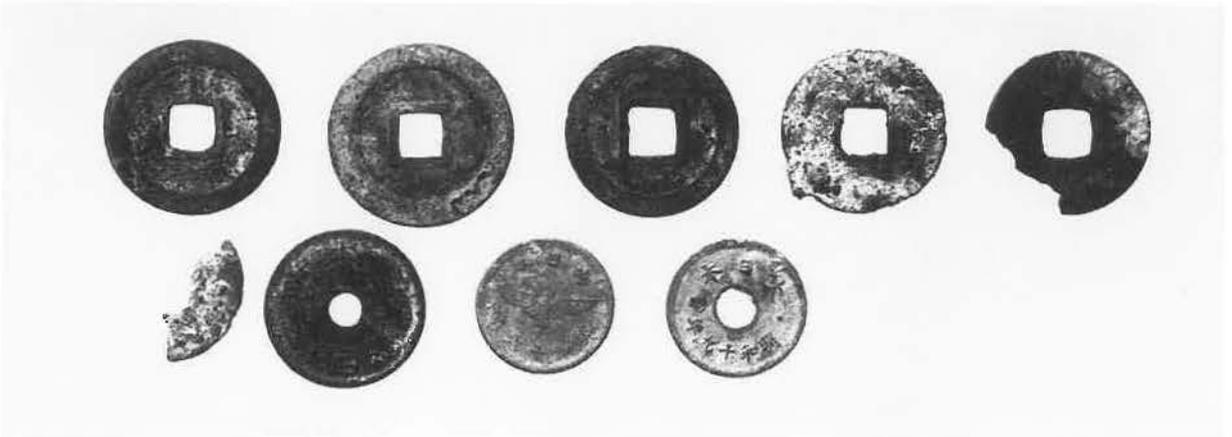
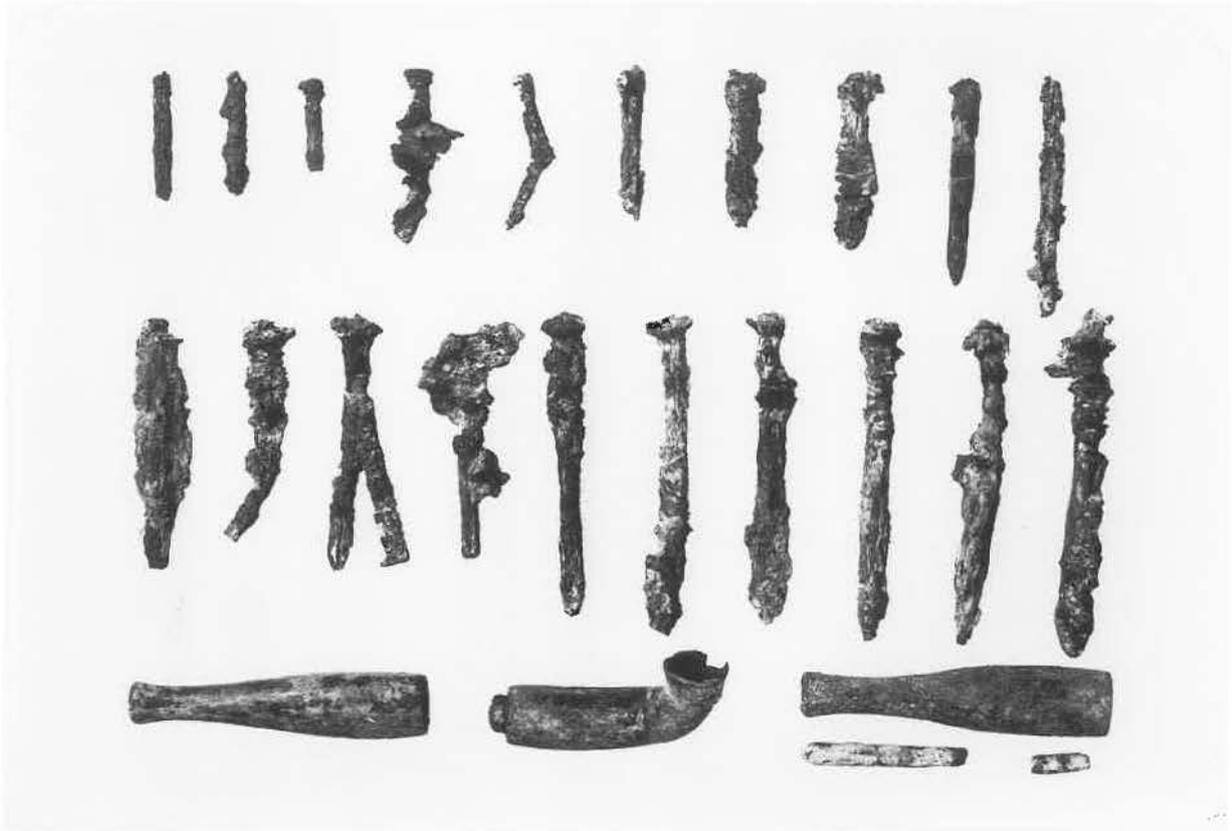
图版30 甕型厨子甕 盖 破片 外面·内面



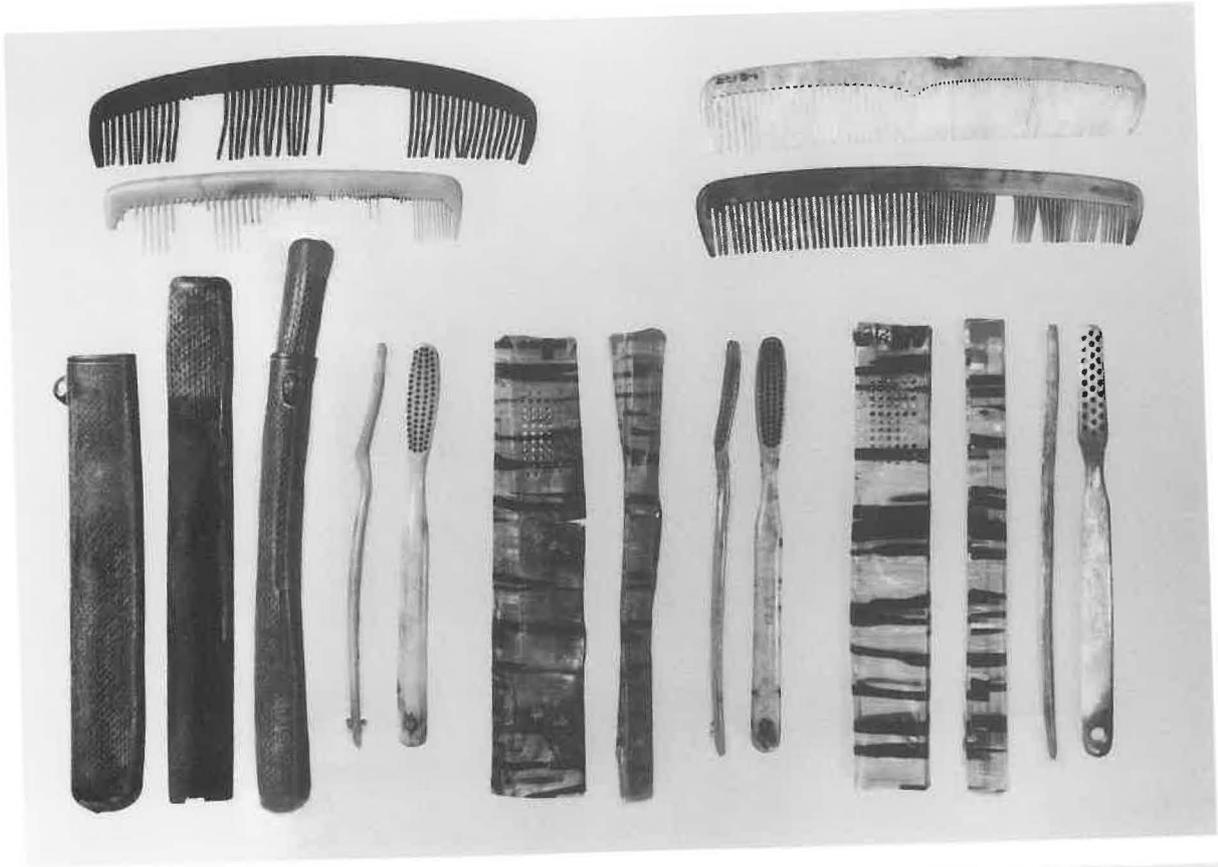
図版31 近代磁器



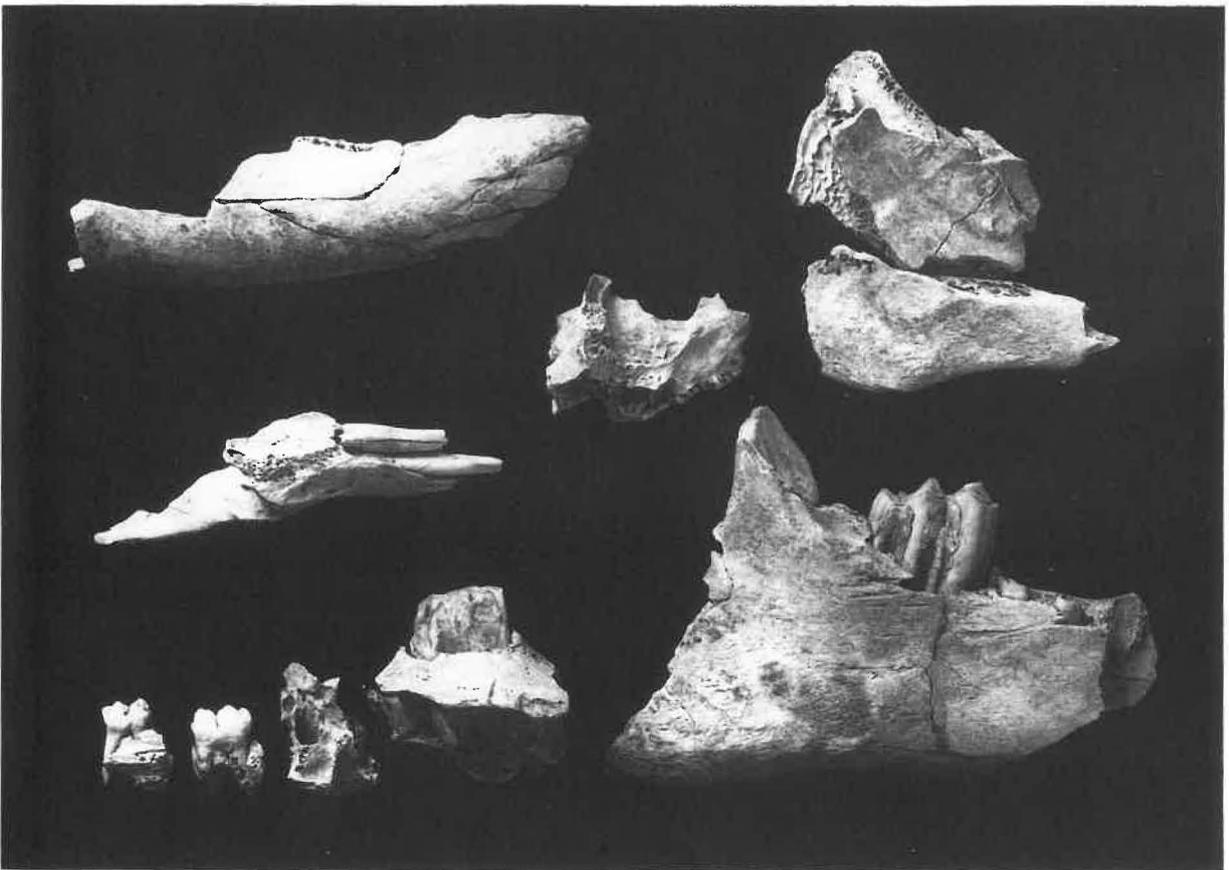
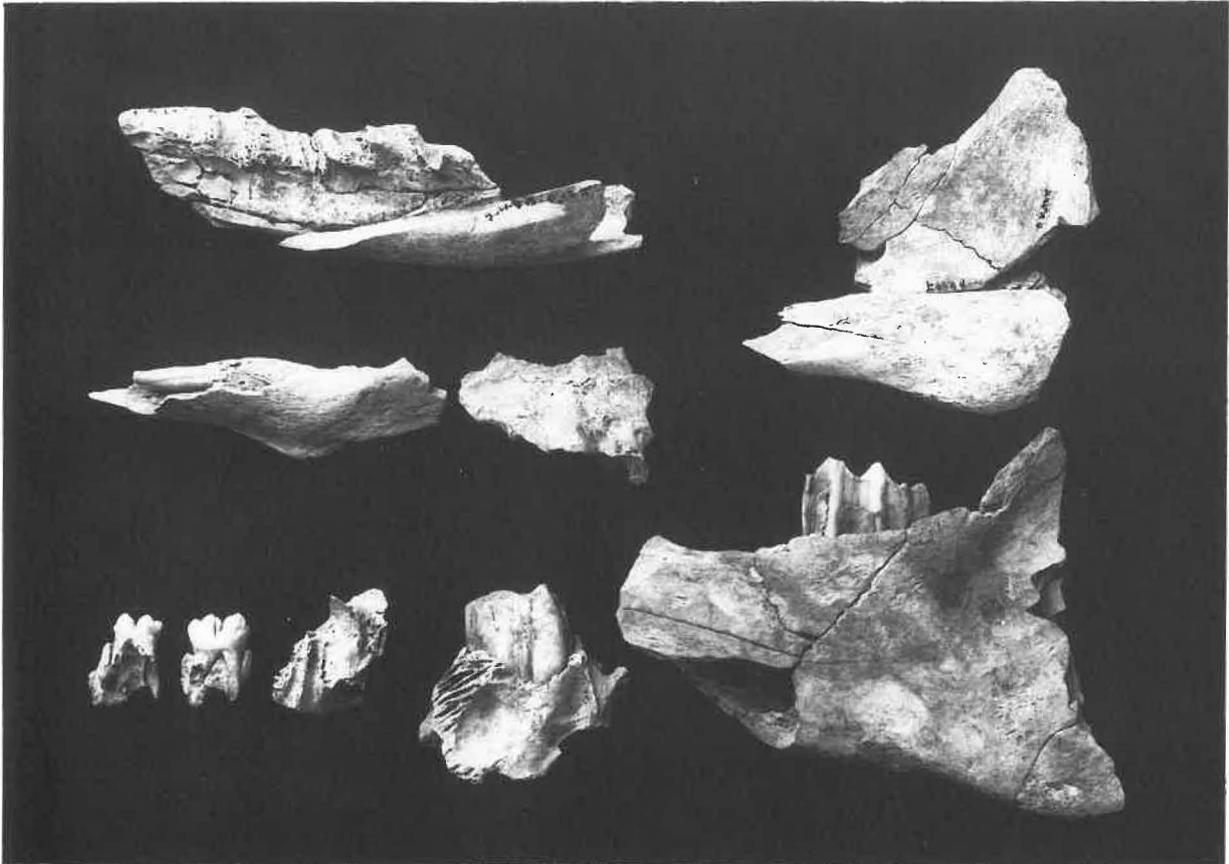
图版32 近代磁器・外面・内面



図版33 鉄製品・古銭表・裏面



図版34 近代製品



図版35 脊椎動物遺骸 ブタ・ウシ

付 記

沖縄県北谷町上勢頭古墓群出土の近世人骨

松 下 孝 幸*

【キーワード】：沖縄県、近世人骨、小児骨

はじめに

沖縄県中頭郡北谷町伊礼伊森原に所在する上勢頭（かみせど）古墓群の発掘調査が1994年に行なわれ、1基の古墓から人骨が1体検出された。

本人骨はおそらく近世人骨と推定されるが、保存状態も良好で、本町の近世人の形質の特徴を知る上では貴重な資料となるものである。しかも14,5歳位の少年の出土例は全国的にみてもきわめて少なく、人類学的価値は非常に高い。

人類学的観察および計測を行なったので、その結果を報告しておきたい。

資 料

本遺跡から出土した人骨は解剖学的に精査した結果、1体分だった。性別・年齢は所見で詳述しているとおり、14歳～15歳ぐらいの男性（少年）である。

本人骨の所属時代は、考古学的検討の結果、近世と推定されている。

人骨の保存状態は良好であった。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、一部はHowells（1973）の方法で計測した。また、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木（1963）と松下ら（1983）の方法で、歯は藤田の方法で小山田常一（長崎大学歯学部口腔第一解剖）が計測し、齶歯の観察も小山田が行なった。

なお、年齢に関しては表1の基準に従っている。

表1 年齢区分

	年齢区分	年 齢	備 考
未 成 人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～5歳	（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6歳～15歳	（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳	（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成 人	壮年	21歳～39歳	（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳	（60歳未満）
	老年	60歳以上	

なお、年齢区分については、普濟院跡の報告書（松下、1996）に詳述しているので、これを参照していただきたい。

埋 葬 状 態

人骨は埋葬時の状態を保っていなかった。頭は墓穴へ向かって左側、下顎骨も左側に存在していたが、両者は離れていた。四肢骨は向かって右側に残っていたが、埋葬された当時の状態ではない。肋骨がかなり広範囲に散らばっており、散乱状態の状況を物語っている。しかし、左側の足（足首から下）は自然の状態で、関節がつながっていた。埋葬された状態を保っている左側の足は墓域のほぼ中央部に位置していることから、埋葬状態の足の位置を残しているとは思えない。攪乱を受けた時期に、この左側の足のみがまだ靭帯でつながっていた可能性がある。



図1. 遺跡の位置 (Fig. 1. Location of the Kamisedo site, Chatan Cho, Okinawa Prefecture)

所 見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

ほとんど完全であるが、土圧のために変形を生じており、冠状縫合部で接合できない。外後頭隆起の発達が悪いが、乳様突起はやや大きい、外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。縫合は、三主縫合とも内外両板がまだ開離している。

頭蓋最大長は変形のために計測できないが、頭蓋最大幅は117mm、バジオン・ブレグマ高は155mmである。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察したところでは頭型は長頭型に傾いているようである。頭蓋幅高示数は132.48となり、akrokran（尖頭型）に属しているが、これは頭蓋の変形によって、最大幅が実際よりもやや狭くなっており、同時に頭の高さがやや高くなっていることによるものと思われる。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋はほぼ完全であるが、頬骨弓は欠損している。眉間は膨隆しているが、眉上弓の隆起はない。また、鼻根部はやや扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、中顔幅は91mm、上顔高は55mmで、上顔示数は60.44（V）となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は38mm（右）、39mm（左）、眼窩高は31mm（右、左）で、眼窩示数は81.58（右）、79.49（左）となり、両側とも mesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は24mm、鼻高は42mmで、鼻示数は57.14となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

側面角は、全側面角が91度、鼻側面角が94度、歯槽側面角は75度で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

〔 / : 不明（破損） ○ : 歯槽開存 ● : 歯槽閉鎖 〕

M ₂ M ₁ P ₂ ○ ○ ○ ○	I ₁ I ₂ C ○ P ₂ M ₁ M ₂
M ₂ M ₁ ○ / ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ P ₂ M ₁ M ₂

上下両顎とも第三大白歯は存在しない。咬耗度は Broca の 1 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は不明である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①鎖骨

細くて、小さい。

②上腕骨

骨体は細い。三角筋粗面はやや発達している。骨体と近位端とがまだ癒合していない。

③橈骨

細いが、骨間縁はよく張っている。

④尺骨

骨体が著しく細い。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

両側の大坐骨切痕部の観察が可能である。その角度は小さい。

②大腿骨

骨体は細い。骨体上部は扁平である。大腿骨頭は骨体とまだ遊離している。

③脛骨

細いが、外側縁は良く発達している。ヒラメ筋線の発達が悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのⅡ型である。近位端は骨体と遊離している。

④腓骨

骨体は細く、溝の形成も弱い。

4. 性別・年齢

年齢から先に推測する。歯は第三大白歯以外のすべての歯種が残存しており、それらの歯根の状態を観察できた。

歯根の完成が一番遅いのは第二大臼歯 (M_2) である (第三大白歯を除く)。次いで遅いのが上顎の第二小白歯 (P_2) である。それでも上顎の P_2 は14歳には完成してしまいが、 M_2 は15歳になってもまだ完成しない。わずかであるが未完成である。

本例の場合は、上顎の P_2 の歯根はすでに完成しており、 M_2 はすべて未完成であることから、年齢を14歳～15歳と推定した。

性別であるが、14, 5歳といえば性的に発育し始め、女性では第二次性徴が表れていてもおかしくない年齢である。従って、寛骨の性的な変化が生じ始めていたと推測される。大坐骨切痕部を観察したが、この角度は両側とも鋭角である。この角度は年齢が著しく若い場合は大きいのが一般的なので、本例の大坐骨切痕は狭いと判断し、性を男性と推定しておきたい。

要 約

沖縄県中頭郡北谷町伊礼伊森原の上勢頭（かみせど）古墓群から古人骨が1体検出された。おそらく近世人骨と推定されるが、保存状態も良好で、14, 5歳位の出土例としては貴重である。人類学的観察および計測を行ない、次の結果を得た。

1. 出土した人骨は1体分であった。
2. 所属時代は近世と推定されている。
3. 本例は、14歳～15歳の男性（少年）と考えられる。
4. 頭型は長頭型に傾いている。
5. 鼻根部は扁平で、顔面は低・広顔であるが、歯槽性突顎の傾向は弱い。
6. 四肢骨は細いが、上肢骨の筋付着部の発達は良好である。
7. 本例は未成人であるので、その形態的特徴を読み取ることはできない。しかし、頭が長頭に傾いていること、鼻根部が扁平であること、歯槽性突顎の傾向は弱いこと、四肢骨は細いが、上肢の発達は良かった可能性が強いことなどがわかった。頭蓋からは中世から近世にかけての特徴がうかがえる。この少年の骨から、この地域の近世人の特徴をある程度推測することができそうである。

また、将来同じ年齢の例数が増えてきたら、他地域と比較し、成長の程度（様子）を検討していきたい。

謝 辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた沖縄県北谷町教育委員会の諸先生方に感謝致します。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

参考文献

1. 藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店。東京：57－98.

2. 金田義夫、1957：日本人永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報、30:165-172.
3. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
4. 松下孝幸、分部哲秋、石田肇、内藤芳篤、永井昌文、1983：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告2）：19-30.
5. 松下孝幸、佐伯和信、弦本敏行、1988：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財(6)-クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書-：106-140.
6. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、小山田常一、1990：沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査-：75-112.
7. 北九州市普濟院跡出土の近世人骨。1996（印刷中）
8. 鈴木尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。

表2 脳頭蓋計測値 (mm) (Calvaria)

		上勢頭 小児 男性
1.	頭蓋最大長	—
8.	頭蓋最大幅	117
17.	バジオン・プレグマ高	155
8/1	頭蓋長幅示数	—
17/1	頭蓋長高示数	—
17/8	頭蓋幅高示数	132. 48
1+8+17/3	頭蓋モズルス	—
5.	頭蓋底長	—
9.	最小前頭幅	91
10.	最大前頭幅	105
11.	両耳幅	—
12.	最大後頭幅	—
13.	乳突幅	—
7.	大後頭孔長	30
16.	大後頭孔幅	27
16/7	大後頭示数	90. 00
23.	頭蓋水平周	470
24.	横弧長	—
25.	正中矢状弧長	—
26.	正中矢状前頭弧長	120
27.	正中矢状頭頂弧長	106
28.	正中矢状後頭弧長	118
29.	正中矢状前頭弦長	106
30.	正中矢状頭頂弦長	100
31.	正中矢状後頭弦長	102
29/26	矢状前頭示数	88. 33
30/27	矢状頭頂示数	94. 34
31/28	矢状後頭示数	86. 44

表3 顔面頭蓋計測値 (mm、度) (Facial skeleton)

		上勢頭 小児 男性
40.	顔長	—
41.	側顔長	—
42.	下顔長	—
43.	上顔幅	97
45.	頬骨弓幅	—
46.	中顔幅	91
47.	顔高	—
48.	上顔高	55
47/45	顔示数 (K)	—
48/45	上顔示数 (K)	—
47/46	顔示数 (V)	—
48/46	上顔示数 (V)	60. 44
40+45+47/3	顔面モズルス	—
50.	前眼窩間幅	17
44.	両眼窩幅	90
50/44	眼窩間示数	18. 89
51.	眼窩幅 (右)	38
	(左)	39
52.	眼窩高 (右)	31
	(左)	31
52/51	眼窩示数 (右)	81. 58
	(左)	79. 49
54.	鼻幅	24
55.	鼻高	42
54/55	鼻示数	57. 14
55(1).	梨状口高	26
56.	鼻骨長	18
57.	鼻骨最小幅	7
57(1).	鼻骨最大幅	17
60.	上顎歯槽長	45
61.	上顎歯槽幅	59
62.	口蓋長	37
63.	口蓋幅	35
64.	口蓋高	10
61/60	上顎歯槽示数	131. 11
63/62	口蓋示数	94. 59
64/63	口蓋高示数	28. 57
72.	全側面角	91
73.	鼻側面角	94
74.	歯槽側面角	75

表4 鼻根部計測値 (mm、度) (Nasal root)

		上勢頭 小兒 男性
50.	前眼窩間幅	17
	鼻根橫弧長	20
	鼻根彎曲示數	85.00
57.	鼻骨最小幅	7
44.	兩眼窩幅	90
50/44	眼窩間示數	18.89
a.	前頭突起上幅 (右)	8
	(左)	7
b.	前頭突起水平傾斜角	111
c.	G-N 投影距離	4
d.	鼻根角	139
e.	G-R 距離	32
f.	垂線高	6
f/e	鼻根陷凹示數	18.75
77.	鼻頰骨角	141

表5 下顎骨計測値 (mm、度) (Mandible)

		上勢頭 小兒 男性
65.	下顎關節突起幅	—
65(1).	下顎筋突起幅	—
66.	下顎角幅	—
67.	前下顎幅	—
68.	下顎長	—
68(1).	下顎長	—
69.	オトガイ高	28
69(1).	下顎體高 (右)	—
	(左)	26
69(2).	下顎體高 (右)	22
	(左)	21
70.	枝高 (右)	—
	(左)	44
70(1).	前枝高 (右)	44
	(左)	47
70(2).	最小枝高 (右)	41
	(左)	40
70(3).	下顎切痕高 (右)	—
	(左)	9
71.	枝幅 (右)	29
	(左)	28
71 a.	最小枝幅 (右)	29
	(左)	28
71(1).	下顎切痕幅 (右)	—
	(左)	25
79.	下顎枝角 (右)	—
	(左)	137
66/65	下顎幅示數	—
68/65	幅長示數	—
68(1)/65	幅長示數	—
69(2)/69	下顎高示數 (右)	78.57
	(左)	75.00
71/70	下顎枝示數 (右)	—
	(左)	63.64
71 a /70(2)	下顎枝示數 (右)	70.73
	(左)	70.00
70(3)/71(1)	下顎切痕示數 (右)	—
	(左)	36.00

表6 鎖骨計測値 (mm) (Clavicle)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	鎖骨最大長	—	—
2 a.	骨體彎曲高	23	23
2(1).	肩峰端彎曲高	—	—
4.	中央垂直徑	7	7
5.	中央矢狀徑	11	11
6.	中央周	30	30
6/1	長厚示數	—	—
2 a /1	彎曲示數	—	—
4/5	鎖骨断面示數	63.64	63.64

表7 上腕骨計測値 (mm) (Humerus)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	上腕骨最大長	—	—
2.	上腕骨全長	—	—
5.	中央最大徑	17	17
6.	中央最小徑	14	15
7.	骨體最小周	46	47
7 (a).	中央周	52	52
6/5	骨體断面示數	82.35	88.24
7/1	長厚示數	—	—

表8 橈骨計測値 (mm) (Radius)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	最大長	—	—
3.	最小周	35	34
4.	骨體橫徑	13	14
4 a.	骨體中央橫徑	13	14
4(1).	小頭橫徑	—	—
4(2).	頸橫徑	12	13
5.	骨體矢狀徑	9	10
5 a.	骨體中央矢狀徑	9	10
5(1).	小頭矢狀徑	—	—
5(2).	頸矢狀徑	12	13
5(3).	小頭周	—	—
5(4).	頸周	39	41
5(5).	骨體中央周	37	38
5(6).	骨下端幅	—	—
3/2	長厚示數	—	—
5/4	骨體断面示數	69.23	71.43
5 a /4 a	中央断面示數	69.23	71.43

表8 尺骨計測值 (mm) (Ulna)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	最大長	—	198
3.	最小周	28	30
6.	肘頭幅	—	18
6(1)	上幅	—	25
7.	肘頭深	—	18
8.	肘頭高	—	18
11.	尺骨矢狀徑	9	10
12.	尺骨橫徑	12	12
S	中央最小徑	9	9
L	中央最大徑	13	13
C	中央周	37	36
3/2	長厚示數	—	—
11/12	骨體断面示數	75.00	83.33
S/L	中央断面示數	69.23	69.23

表9 大腿骨計測值 (mm) (Femur)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	最大長	—	323
2.	自然位全長	—	—
6.	骨體中央矢狀徑	23	23
7.	骨體中央橫徑	20	20
8.	骨體中央周	70	70
9.	骨體上橫徑	25	25
10.	骨體上矢狀徑	21	22
8/2	長厚示數	—	—
6/7	骨體中央断面示數	115.00	115.00
10/9	上骨體断面示數	84.00	88.00

表10 脛骨計測值 (mm) (Tibia)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	脛骨全長	—	—
1 a.	脛骨最大長	—	—
8.	中央最大徑	25	25
8 a.	榮養孔位最大徑	29	31
9.	中央橫徑	19	18
9 a.	榮養孔位橫徑	22	20
10.	骨體周	70	69
10 a.	榮養孔位周	78	—
10 b.	最小周	58	60
9/8	中央断面示數	76.00	72.00
9 a/8 a	榮養孔位断面示數	75.86	64.52
10 b/1	長厚示數	—	—

表11 腓骨計測值 (mm) (Fibula)

		上勢頭 小兒 男性	
		右	左
1.	最大長	—	—
2.	中央最大徑	12	13
3.	中央最小徑	8	8
4.	中央周	34	34
4 a.	最小周	—	—
3/2	中央断面示數	66.67	61.54
4 a/1	長厚示數	—	—

表12 膝蓋骨計測值 (mm) (Patella)

		上勢頭 小兒 男性 右
1.	最大高	33
2.	最大幅	35
3.	最大厚	16
4.	關節面高	26
5.	內關節面幅	17
6.	外關節面幅	21
1/2	膝蓋骨高幅示數	94.29

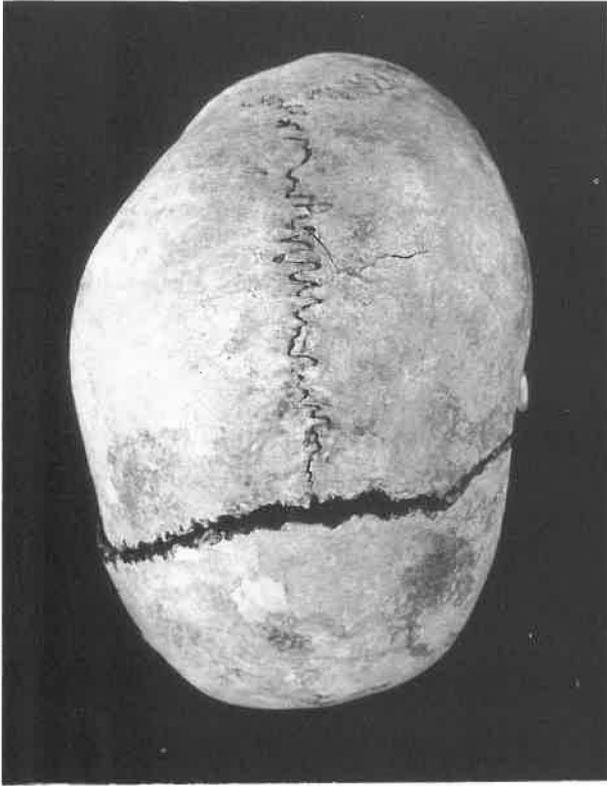
表13 形態小変異 (Non-metric crania variants)

	上勢頭 小児 男性	
	右	左
1. Medial palatine canal	-	-
2. Pterygospinous foramen	/	/
3. Hypoglossal canal bridging	-	+
4. Clinoid bridging	/	/
5. Condylar canal absent	-	-
6. Foramen of Huschke (> 1 mm)	-	-
7. Jugular foramen bridging	/	-
8. Precondylar tubercle	-	-
9. Supra-orbital foramen	-	-
10. Accesory infraorbital foramen	-	+
11. Zygo-facial foramen absent	-	-
12. Aural exostosis	-	-
13. Metopism		-
14. Os incae		-
15. Ossicle at the lambda		-
16. Parietal notch bone	-	-
17. Transverse zygomatic suture (> 5 mm)	-	-
18. Asterionic ossicle	-	-
19. Occipitomastoid ossicle	-	-
20. Epipteric ossicle	-	/
21. Frontotemporal articulation	-	-
22. Biasterionic suture (>10mm)	-	-
23. Mylohyoid bridging	-	-
24. Accessory mental foramen	/	-
25. Mandibular forus	-	-
26. 滑車上孔	-	/

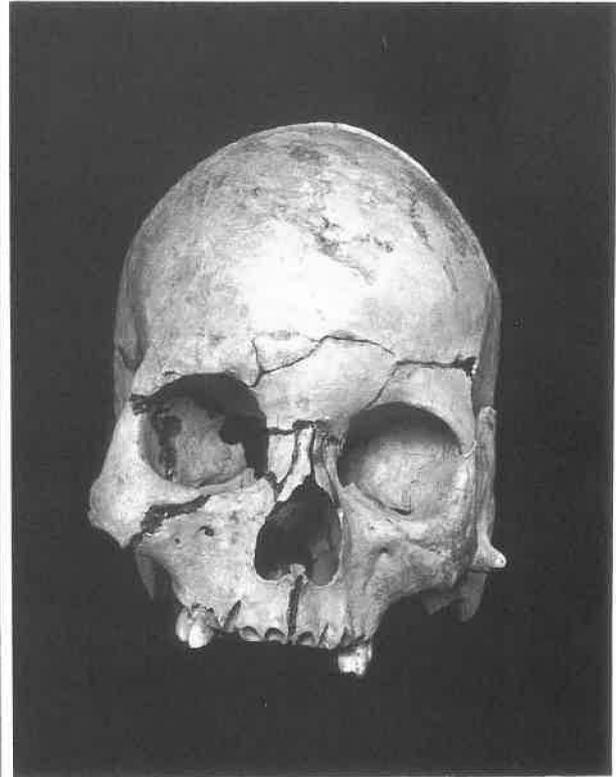
[present:+, absent:-, unobservale:/]

表14 歯の計測値 (mm) (Teeth)

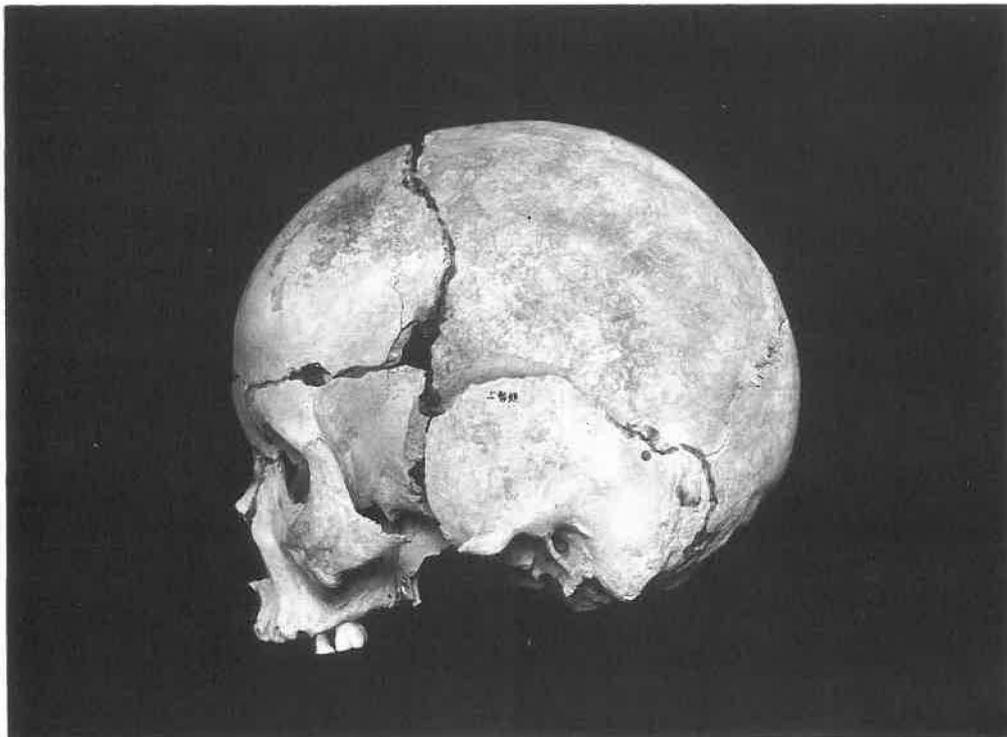
	上			下	
	近遠心径	顎 頰 (唇) 舌径		近遠心径	顎 頰 (唇) 舌径
右側 I ₁	-	-	右側 I ₁	-	-
I ₂	-	-	I ₂	-	-
C	-	-	C	-	-
P ₁	-	-	P ₁	-	-
P ₂	6.24	7.69	P ₂	-	-
M ₁	9.07	9.92	M ₁	10.09	9.33
M ₂	8.47	10.11	M ₂	9.34	8.61
M ₃	-	-	M ₃	-	-
左側 I ₁	7.51	6.54	左側 I ₁	-	-
I ₂	5.76	5.66	I ₂	-	-
C	6.89	7.64	C	-	-
P ₁	-	-	P ₁	-	-
P ₂	6.72	8.62	P ₂	6.46	7.12
M ₁	9.07	10.25	M ₁	10.16	9.64
M ₂	8.50	9.90	M ₂	9.58	8.84
M ₃	-	-	M ₃	-	-



頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋前面 (Lateral view of the skull)

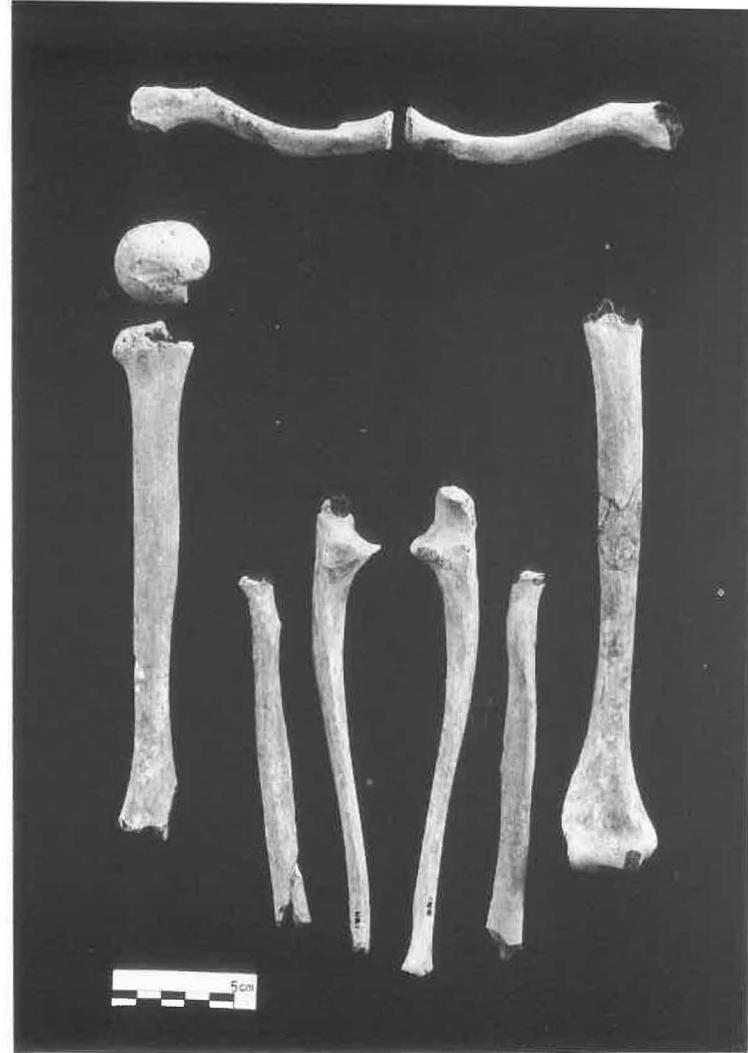


頭蓋側面 (Frontal view of the skull)

上勢頭人骨 (男性、小兒)
(Kamisedo skeleton, juvenile bones)



下肢骨 (Bones of the lower limb)



上肢骨 (Bones of the upper limb)

上勢頭人骨 (男性、小兒)
(Kamisedo skeleton, juvenile bones)

字下勢頭・上原地区の亀甲墓について

玉木 順彦

1 北谷町における墓の分布状況

戦前の北谷における字別の墓の分布状況をみると、下の表のとおりである。
〔ただし、字は戦後の行政字の区分によった。〕

字名	墓数	字名	墓数	字名	墓数
北谷	110基	吉原	124基	砂辺	54基
北前	54基	桑江	114基	上勢頭	64基
大村	64基	伊平	50基	下勢頭	96基
玉上	51基	浜川	92基	総数	873基

資料：「一筆限調書」（1948年作成）

表から分かるように、墓の分布の多い字は①吉原、②桑江、③北谷、④下勢頭、⑤浜川の順で、本報告書の亀甲墓がある字下勢頭は北谷町で4番目に墓が多い地域である。次に字下勢頭における小字別の墓の分布状況をみると、以下のとおりである。

浜川下勢頭原が39墓ともっとも多く、順次、浜川上勢頭原（24基）、上原（13基）、平良迫原（8基）、大道原（5基）、東久間作原（4基）、平安山下勢頭原（3基）というような状態である〔上記の「一筆限調書」による〕。本報告書の亀甲墓は、上原地区にある13基のなかの一基ということになる。

ところで、北谷町の墓地も他の市町村と同様に耕作地に適さない丘陵や海岸などの地域に立地している。とくに「上勢頭区・下勢頭区の古墓群」（谷間に約150基）のように丘陵地帯に多く立地しているのが目に付く。このように普段、我々が目にする集落や耕作地から離れた丘陵や海岸地帯に墓地が立地する光景は、近世期に首里王府の指示によって意図的に作り出されたものである。18～19世紀にかけて王府は、以下のような墓地に関する制限令を通達する。

- a 諸島不依上下人墓所死人銘々墓壺つづつ拵申とて大石切取又は細物杯過分に取り
集困仕太分之物入其上畠方之障にも可罷成候間此節より墓一拵一門中葬候様に被

仰下候間急度可相拵候古墓之儀は相改主不相知墓は骨一所に集結構に取置候事

〈1704年〉

- b 墓所之儀見立次第何方にも仕立候而は漸々地方迫に成行至以後は差支可申候間
向後墓所之儀仕立候砌ハ作地不障場所見合在番頭引合之上可相仕事
- c 墓所之儀可成程先祖墓相用新敷仕立不申候而不叶節は、山林竿迹より敷場見立、
本地方へ致相談申出候はば、奉行見分之上諸士は拾二間四角、町百姓六間四角、
針図仕付御印紙を以て作調させ候事

附町百姓墓所亀之甲迄餅打、其外之飾亦囲袖石垣無に相用させ候事

〈1809年〉

このような王府からの通達によって、徐々に墓地は集落や農耕地からはずれた場所、
いわば丘陵や海岸地帯などに立地せざるを得なくなるのである。繰り返しになるが、
北谷町における墓地の立地状況もこの延長線上に位置付けられるのである。

2 墓の形態と広さ

(1) 墓の形態

本墓は、亀甲墓にするために改修をおこない昭和14年旧5月11日に完了したものである。墓の門の前にヒンプン様の石垣が積まれており、二重門（便宜的に「外門」「本門」と表記する）を形成している。外門と本門は完全にズレており、何らかの意図が作用しているものとみられる。

名嘉真宜勝氏（読谷村立歴史民俗資料館々長）は、このような二重門を持つ墓が北中城村や読谷村、那覇市識名にあることを確認している。名嘉真氏によれば、それらは何れも亀甲墓であり、風水判断と尚家の墓「玉陵」に模して二重門にしたのではないかと推測している。「玉陵」の中門が本門より左側にズレていることは、周知のとおりである。名嘉真氏は、そのズレを風水判断によるものとみている。卓見であろう。

また、二重門構造の墓ではないけれども、浦添市伊祖にある「入め御拝領墓」では本来の墓の門を意図的に石積みで覆い、西側袖垣の手前隅に門が設けられている。それは、本来の門が向いていた方位（南）にヒーザン（火山＝火災や災難などを集落にもたらすとされる丘陵）があるからだという。名護市屋部にも墓庭にヒンプンを設けた墓があるが、その延長線上にはやはりヒーザンがあった。

このような事例から、二重門やヒンプンを設置した墓はその延長線上（墓の向いた方向）に、ヒーザンなどのような災いをもたらす場所や御嶽・拝所などのような聖地の存在が考えられる。ところで東風平村富盛に代表される石獅子は、八重瀬のヒーザ

ンへのヒーゲーシー（火返し）として造られ、風水師の関与が指摘されている。このことから、二重門やヒンプンを設置した墓に風水師が関与したことは十分に想定できよう。しかも、それらの墓がすべて亀甲墓であることから、風水師が深く係わったものと思われる。

さて、本題の上原地区の亀甲墓であるが、その向いている方向にヒーザンが存在していることが聞き取りで明らかになった。しかも、①築造した昭和10年代には謝莉集落にサンジンソー（三世相）や国直（現嘉手納町）にフンシクマー（風水組見立）が居住しており、風水判断や日取りなどをして生活していた。本墓の改築に際して、相談を受けたことが十分に考えられるのである。そして、風水判断をする時にヒーザンの存在を知り、それを避けるために二重門を造った。あるいは、②その頃の墓大工はある程度の風水知識を持っていたので、二重門にした。との二つを想定するのは早計すぎるであろうか。何れにせよ、風水判断が働いたことは相違ないと思われる。

(2) 墓の広さ

近世期には、身分によって墓地の広さに制限があった。下記の史料は、1809（嘉慶14）年に通達された『田地奉行所規模帳』に記載されているものである（前記のCと同じ）。

- 一 墓所之儀可成程先祖墓相用新敷仕立不申候而不叶節は、山林竿迹より敷場見立、本地方へ致相談申出候はば、奉行見分之上諸士は拾二間四角、町田舎百姓六間四角、針図仕付御印紙を以て作調させ候事

附町田舎百姓墓所亀之甲迄餅打、其外之飾亦囿袖石垣無に相用させ候事

士族は12間四角〔一間＝6尺＝1,82m〕、百姓は6間四角の広さに制限されていた。ところで、本墓は長さ19m（本門から。外門から22m）・幅は15mである。所有者は旧士族であり、百姓墓より広くて士族墓の制限内である。つまり、屋取集落でも財力的な問題はあるにせよ、できるだけ士族にふさわしい墓を造ろうと心掛けた事が分かる。

獣骨の調査結果について

川島 由次（琉大農学部）

今回の獣骨の調査で、動物種の数 は 4 種（ウシ・ウマ・ブタそしてニワトリ）であり、各々 1 頭（羽）分であった。出土骨はかなり断片的であったが、判別の比較的容易であったのはウシの下顎骨であった。肋骨の鑑別により、ウマを含む 3 種の動物を区別できた（表 1）。当初リュウキュウイノシシ（以下イノシシと略）の下顎骨先端部（切歯 3 本付着）はよく観察すると、下顎間結合部腹側に小型の隆起を確認したので「ブタ」と判断した。イノシシの下顎間結合部腹側には、隆起状のものは存在しないからである。このブタの体格は 50～60kg で大型のイノシシ成獣とほぼ同程度と思われた。下顎の左右第 2 切歯^{ほうしゅつ}が萌出したばかりで、ほとんど磨耗していなかったため、本種は生後 16～20 カ月齢と判断された。

ウシにおいては、右下顎の第 3 後臼歯（M 3）が完全な形で出土した。ウシの下顎 M 3 の萌出は 24～30 カ月齢とされているので、本個体は比較的若いと思われた。なお、右上顎の M 3 も存在したが、人工的に破壊されており状態は良くないので明確に断定はできなかったが、同一個体のものと思われた。今回の獣骨においては、頭蓋・肋骨が主体であって前・後肢の長骨（上腕骨・大腿骨など）や脊椎骨がまったく含まれていないという特徴が見られた。哺乳類の他としては、トリの上腕骨と中足骨が鑑別できた。骨の特徴より小型のニワトリと判断したが、点数が少ないのでニワトリサイズの野鳥の可能性もある。

表 1 出土した獣骨の分類

	ウシ	ウマ	ブタ	ニワトリ
下顎骨	1		1	
歯	3		6	
肋骨	1	4		
中足骨				1
上腕骨				1

北谷町文化財調査報告書 第16集

上勢頭古墓群

— 嘉手納(7)貯油施設工事に伴う文化財発掘調査報告 —

発行 北谷町教育委員会
1996年(平成8年) 3月
北谷町字桑江 529
電話 (098) 936-3490

印刷 (株) 南西印刷
製本 那覇市首里石嶺町1の127
電話 (098) 884-4321
